

昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報



1985

神戸市教育委員会

## 昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報

## 正 誤 表

誤	正	誤	正
P 8 fig. 13 西から	北から	P 50 上から10行・12行目 壺A、壺B	壺1、壺2
P 9 fig. 14 北から	西から	下から11行目 打撃穿孔	焼成後穿孔
fig. 15 東から	北から	下から4行目 円線B種	円線B種
fig. 16	北から	下から2行目 口縁部	口頬部
P 14 上から11行目 火輪部	水輪部	P 52 下から4行目 2類	Ⅱ類
P 15 上から7行・9行目 阿弥陀堂	阿弥陀堂	P 54 上から8行目 勾玉	勾玉
P 17 上から17行目 彼覆土	被覆土	上から10行目 1.5m	15cm
上から17行目 堅致	堅致	P 55 上から3行目 正確に	正確な
上から29行目 阿弥陀堂	阿弥陀堂	下から9行目 勾玉	勾玉
P 19 上から5行目 失なわれている	失なわれている	下から7行目 示めす	示す
上から10行目 超す	越す	P 57 上から17行目 5.0~3.9m	5.0×3.9m
P 20 上から4行目 旧河道より	旧河道により	P 65 上から7行目 須恵器短脚高环	須恵器無蓋高环
上から10行目 この遺構	この堆積	P 69 下から11行目 対称的	対照的
P 27 上から10行目 砂質土	砂質土	P 72 fig. 106	天地逆
P 30 上から28行目 直径 6.2m	長径 6.2m	P 73 下から6行目 北側屈折上層	北側屈折部上層
P 32 fig. 49 北から	東から	下から6行目 北側屈折	南側屈折
P 35 fig. 55	天地逆	P 74 上から19行目 丘陵線	扇状地
P 36 上から13行・16行目 削除	除去	P 76 下から2行目 背後に	裏込に
P 40 上から6行・7行・12行・13行目 高位段丘	中位段丘	P 81 上から10行目 坂下町遺跡	坂下山遺跡
P 42 上から12行目 龍泉窯系	龍泉窯系	P 88 下から1行目 土塙墓	木棺墓
P 47 上から2行目 弥生時代後期	弥生時代中期	P 89 上から4行目 束柱	柱列
P 48 上から23行目 小口孔	木口穴		
P 50 上から4行目 15世紀	5世紀		

昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報

1985

神戸市教育委員会

## 序

神戸市教育委員会では、昭和57年度職制改正を行ない、文化財を担当する課として、文化財課を発足させ、新たな陣容で文化財の保護、保存事業を意欲的に進めてまいりました。

その成果を、昭和59年3月に『昭和57年度 神戸市文化財年報』としてまとめましたが、埋蔵文化財関係につきましてより詳細な報告として『昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報』を刊行する運びとなりました。

発掘調査の実施に際し、御協力を賜わった関係各位に深謝するとともに、本書がより多く活用されますよう切望いたします。

昭和60年3月

神戸市教育長 山本治郎

# 目 次

序

例 言

昭和57年度埋蔵文化財調査一覧表

昭和57年度埋蔵文化財調査地位置図

## 1. 西神ニュータウン内遺跡

西神第33地点遺跡	1
西神第62地点B遺跡	5
2. 西神中央線長谷遺跡	10
3. 如意寺	15
4. 神出古墳群	18
5. 西戸田遺跡	24
6. 小寺遺跡	27
7. 頭高山遺跡	30
8. 居住遺跡	36
9. 居住・小山遺跡	40
10. 今津遺跡	47
11. 新方遺跡（大日地点）	52
12. 新方遺跡（丁の坪地点）	57
13. 史跡五色塚古墳・小壺古墳	59
14. 舞子古墳群東石ヶ谷1号墳	62
15. 松野遺跡	67
16. 史跡処女塚古墳	69
17. 郡家遺跡	73
18. 束求女塚古墳	76
19. 森北町遺跡	81
20. 北神ニュータウン内遺跡	
第47地点遺跡	85
鹿の子遺跡	88
21. オキダ古墳群	92
22. 塩田遺跡	95

## 挿 図 目 次

fig.	1	西神第32地点、第33地点遺跡位置図	1
fig.	2	第33—1 号墳主体部掘方平面図及び断面図	2
fig.	3	西神第33地点遺跡全景（北から）	3
fig.	4	第33—1 号墳全景	3
fig.	5	第33—1 号墳主体部掘方	3
fig.	6	第33—5 号墳全景	3
fig.	7	第33—5 号墳主体部	3
fig.	8	第33—5 号墳主体部掘方平面図及び断面図	4
fig.	9	第62地点B遺跡位置図	5
fig.	10	第62地点B遺跡平面図	6
fig.	11	S B01、02平面図	7
fig.	12	S D01内土師器出土状況	8
fig.	13	第62地点B遺跡全景（西から）	8
fig.	14	S B01、02（北から）	9
fig.	15	S B03、04（東から）	9
fig.	16	S B06	9
fig.	17	長谷遺跡トレンチ設定図	10
fig.	18	土塁集成図	12
fig.	19	S K01	13
fig.	20	S K02	13
fig.	21	S K05	13
fig.	22	S K06	13
fig.	23	S K07	13
fig.	24	五輪塔	13
fig.	25	如意寺位置図	15
fig.	26	遺構平面図	16
fig.	27	調査実施地域図	18
fig.	28	堂ノ前支群位置図	19
fig.	29	田井裏支群位置図	20
fig.	30	池ノ下支群位置図	21
fig.	31	南下地区トレンチ全景	21
fig.	32	出土遺物	22
fig.	33	堂ノ前支群出土遺物実測図	22
fig.	34	軒瓦拓影	23
fig.	35	調査区位置図	24
fig.	36	調査区全景（南から）	25
fig.	37	調査区平面図	25

fig.	38	S K 03 .....	26
fig.	39	S K 03遺物出土状況 .....	26
fig.	40	出土遺物実測図 .....	26
fig.	41	調査地区位置図 .....	27
fig.	42	第 1 地点平面図 .....	28
fig.	43	第 3 地点平面図 .....	28
fig.	44	出土遺物実測図 .....	29
fig.	45	第 1 地点遺景 .....	29
fig.	46	第 1 地点掘立柱建物 1 .....	29
fig.	47	頭高山道路全図 .....	31
fig.	48	南斜面遺景(東から) .....	32
fig.	49	豎穴住居址 1 (北から) .....	32
fig.	50	豎穴住居址 4 (北から) .....	32
fig.	51	東斜面遺景 .....	33
fig.	52	1 号住居址実測図 .....	34
fig.	53	4 号住居址実測図 .....	34
fig.	54	5 号住居址実測図 .....	34
fig.	55	出土遺物実測図撮影 .....	35
fig.	56	調査区全景 (北から) .....	36
fig.	57	調査区平面図 .....	37
fig.	58	出土遺物実測図 .....	38
fig.	59	出土遺物実測図 .....	39
fig.	60	掘立柱建物 (北から) .....	39
fig.	61	調査地区位置図 .....	41
fig.	62	A 地区 平面図 .....	42
fig.	63	B 地区 トレンチ平面図 .....	43
fig.	64	3 号埴土器群出土状況 .....	44
fig.	65	5 号埴土器群出土状況 .....	44
fig.	66	出土遺物実測図 .....	45
fig.	67	A 地区 S X01 .....	46
fig.	68	B 地区 2 号墳 .....	46
fig.	69	トレンチ配置図 .....	47
fig.	70	第 1 トレンチ第 1 遺構面 平面図 .....	49
fig.	71	第 1 トレンチ第 2 遺構面 平面図 .....	49
fig.	72	第 2 トレンチ第 1 遺構面 平面図 .....	49
fig.	73	第 2 トレンチ第 2 遺構面 平面図 .....	49
fig.	74	第 1 トレンチ全景 .....	49
fig.	75	第 2 トレンチ S B 01 全景 .....	49
fig.	76	出土遺物実測図 .....	51

fig. 77	調査区位置図	52
fig. 78	第Ⅰ造構面 平面図	53
fig. 79	第Ⅲ造構面 平面図	53
fig. 80	第Ⅳ造構面 平面図	54
fig. 81	木棺墓平面図	55
fig. 82	出土遺物実測図	56
fig. 83	造構平面図	58
fig. 84	出土遺物実測図	58
fig. 85	調査区位置図	59
fig. 86	トレンチ設定図	60
fig. 87	G 2 トレンチ検出溝	61
fig. 88	G 3 トレンチ外堤埴輪出土状況	61
fig. 89	東石ヶ谷支群位置図	62
fig. 90	墳丘測量図	63
fig. 91	石室実測図	63
fig. 92	箱式石棺実測図	64
fig. 93	出土遺物実測図	64
fig. 94	舞子古墳群位置図	65
fig. 95	古墳と弥生時代住居址全景（南から）	66
fig. 96	石室左側壁検出状況	66
fig. 97	石室内炭敷検出状況（南から）	66
fig. 98	玄室内遺物出土状況（南から）	66
fig. 99	玄室奥壁付近遺物出土状況（東から）	66
fig. 100	箱式石棺検出状況	66
fig. 101	第3次調査地位置図	67
fig. 102	造構平面図	68
fig. 103	トレンチ配置図	70
fig. 104	第18トレンチ前方部東側断面図	71
fig. 105	処女塚古墳全景	72
fig. 106	半截竹管文埴輪片	76
fig. 107	調査区平面図	74
fig. 108	出土遺物実測図	75
fig. 109	方形周溝造構検出状況	75
fig. 110	東求女塚古墳調査区平面図	77
fig. 111	東求女塚古墳全景	78
fig. 112	前方部西側墳丘裾と周溝	78
fig. 113	前方部北側墳丘裾と周溝	79
fig. 114	前方部北西隅	79
fig. 115	造構平面図	82

fig. 116	溝5土器群出土状況	83
fig. 117	溝出土土器実測図	84
fig. 118	火葬墓址平面図（1）	85
fig. 119	火葬墓址平面図（2）	86
fig. 120	第47地点遺跡構造全体図	87
fig. 121	鹿の子遺跡位置図	88
fig. 122	遺構配置図	89
fig. 123	掘立柱建物検出状況	89
fig. 124	西部建物実測図	90
fig. 125	土塁幕実測図	90
fig. 126	出土遺物実測図	91
fig. 127	地形測量図	92
fig. 128	溝内遺物出土状況	93
fig. 129	横穴式石室検出状況（西から）	93
fig. 130	出土遺物実測図	94
fig. 131	1トレンチ平面図	95
fig. 132	1トレンチ全景（東から）	96
fig. 133	2トレンチ平面図	97
fig. 134	S E04漆器出土状況	97
fig. 135	S D05遺物出土状況	97
fig. 136	S K01-S、S K01-N	97
fig. 137	2トレンチ S D01（西から）	98
fig. 138	S D04、S D05	98

## 例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が昭和57年度に実施した埋蔵文化財関係事業の概要である。
2. 事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財専門委員の指導のもとに、神戸市教育委員会が実施した。事業の実施にあたっては、奈良国立文化財研究所、兵庫県教育委員会の指導と協力を得た。記して謝意を表したい。調査組織は以下のとおりである。

### 調査関係者組織表

#### 神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

野地 脩左	神戸大学名誉教授
小林 行雄	京都大学名誉教授
檀上 重光	神戸新聞社副主筆

事務局 教育長	山本 治郎
---------	-------

社会教育部長	太田 修治
--------	-------

文化財課長	八尾 明
-------	------

埋蔵文化財係長	奥田 哲通
---------	-------

学芸員	丸山 潔
-----	------

タ	渡辺 伸行
---	-------

調査担当 学芸員	宮本 郁雄
----------	-------

西岡 巧次
-------

菅本 宏明
-------

口野 博史
-------

森田 稔
------

丹治 康明
-------

千種 浩
------

3. 本書に掲載した遺跡の所在地、調査内容、調査担当者は、一覧表に記した。
4. 本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究会社会科研究部編集の5万分の1神戸市全図を使用した。
5. 昭和57年度の埋蔵文化財事業の概要は、先に刊行した「昭和57年度神戸市文化財年報」1984を参照されたい。
6. 昭和57年度埋蔵文化財調査地位置図の数字は、一覧表に示した遺跡番号と対応している。
7. 本書は、一覧表に示した各調査担当者が執筆し、全体の編集を渡辺伸行・森田稔が担当し、中原明子の協力を得て作成した。
8. 表紙写真は、東求女塚古墳出土三角縁四神四獸鏡、裏表紙写真は、同車輪石（いずれも東京国立博物館所蔵）である。

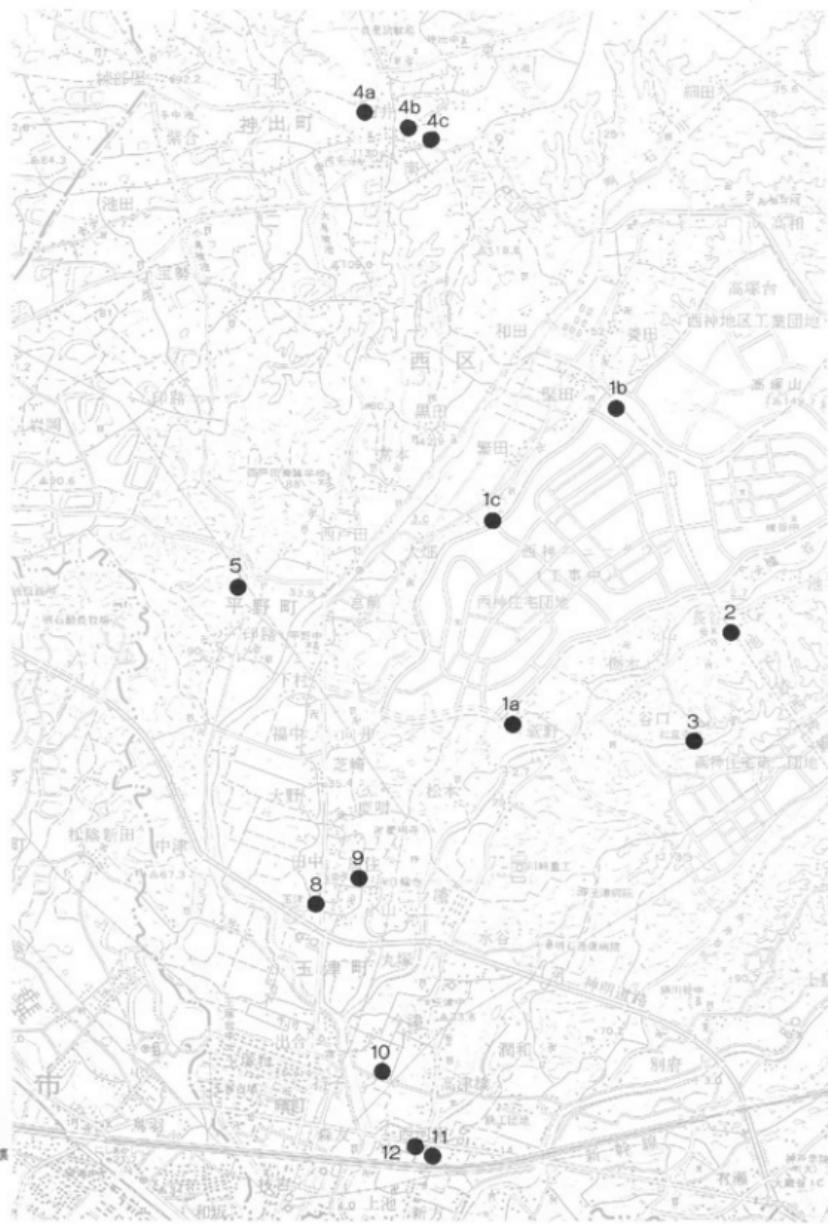
昭和57年度 埋蔵文化財調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査内容	担当者
1	西神ニュータウン内遺跡	西区櫛谷町菅野 西区平野町堅田	古墳時代住居址、溝、 平安時代建物、弥生時代溝	菅本 宏明
2	西神中央線内遺跡	西区越谷町池谷	中世焼土塙 7、土塙 古墳時代溝	宮本 郁雄
3	如意寺	西区櫛谷町谷口	建物基壇、室町時代瓦窯	西岡 巧次
4	神出古窯址跡	西区神出町田井・東	平安時代～鎌倉時代の古窯址、建物	丹治 康明
5	西戸田遺跡	西区平野町西戸田	古墳時代溝、弥生時代土塙	口野 博史
6	小寺遺跡	西区伊川谷町小寺	平安時代建物、土塙	森田 稔
7	通高山遺跡	西区伊川谷町小寺 横間	弥生時代集落址	宮本 郁雄 菅本 宏明
8	居住遺跡	西区玉津町居住	古墳時代溝、ビット	口野 博史
9	居住小山遺跡	西区玉津町 居住、小山	古墳 5基、土壘状遺構、 弥生時代豎穴式住居址 土塙墓、掘立柱建物	千種 浩
10	今津遺跡	西区玉津町今津	弥生時代住居址、土器棺、 土塙	千種 浩
11	新方（大日地点）	西区伊川谷町潤和	鎌倉時代掘立柱建物、古墳 時代住居址（玉造工房址）、 弥生時代木棺墓、溝	丹治 康明
12	新方（丁の坪地点）	西区玉津町高津櫛	古墳時代住居址、溝 弥生時代住居址、溝	丸山 潔
13	史跡五色塚古墳 小壺古墳	垂水区五色山 4丁目	五色塚古墳外堤周溝、外堤、 埴輪列、 小壺古墳周溝、外堤	西岡 巧次
14	舞子古墳群 東石ヶ谷1号墳	垂水区舞子陵	横穴式石室をもつ古墳 1基 弥生時代住居址	口野 博史
15	松野遺跡	長田区松野通4丁目	弥生時代溝、近代溝	菅本 宏明
16	史跡女塚古墳	東灘区御影塚町2丁目	处女塚古墳前方部、 西側斜面、東部振部、 後方部西側斜面	千種 浩
17	郡家遺跡	東灘区御影町	奈良時代柱穴、 弥生時代溝、川	西岡 巧次
18	東求女塚古墳	東灘区住吉宮町1丁目	東求女塚古墳前方部と周溝	渡辺 伸行
19	森北町遺跡	東灘区森北町4丁目	弥生時代溝、中世溝	西岡 巧次
20	北神ニュータウン内 遺跡	北区長尾町・道場町	古墳時代住居址、溝、 平安時代建物、弥生時代溝	丸山 潔 西岡 巧次
21	オキダ古墳群 (日下部遺跡)	北区道場町日下部	古墳	宮本 郁雄 西岡 巧次
22	塩田遺跡	北区道場町塩田	中世ビット群、土塙、 弥生時代溝、近世井戸	口野 博史
23	池谷遺跡	西区櫛谷町福谷	遺構なし	森田 稔
24	居住（玉津老人いこ いの家）遺跡	西区玉津町居住	遺構なし	丸山 潔
25	日下部遺跡	北区道場町日下部	遺構なし	丹治 康明
26	宇治川南遺跡	中央区楠町1丁目	绳文時代晚期、弥生時代前 期、平安時代溝、土塙墓、 住居址	奥田 哲通
27	今津遺跡	西区玉津町今津	弥生時代土塙、平安時代溝	丸山 潔

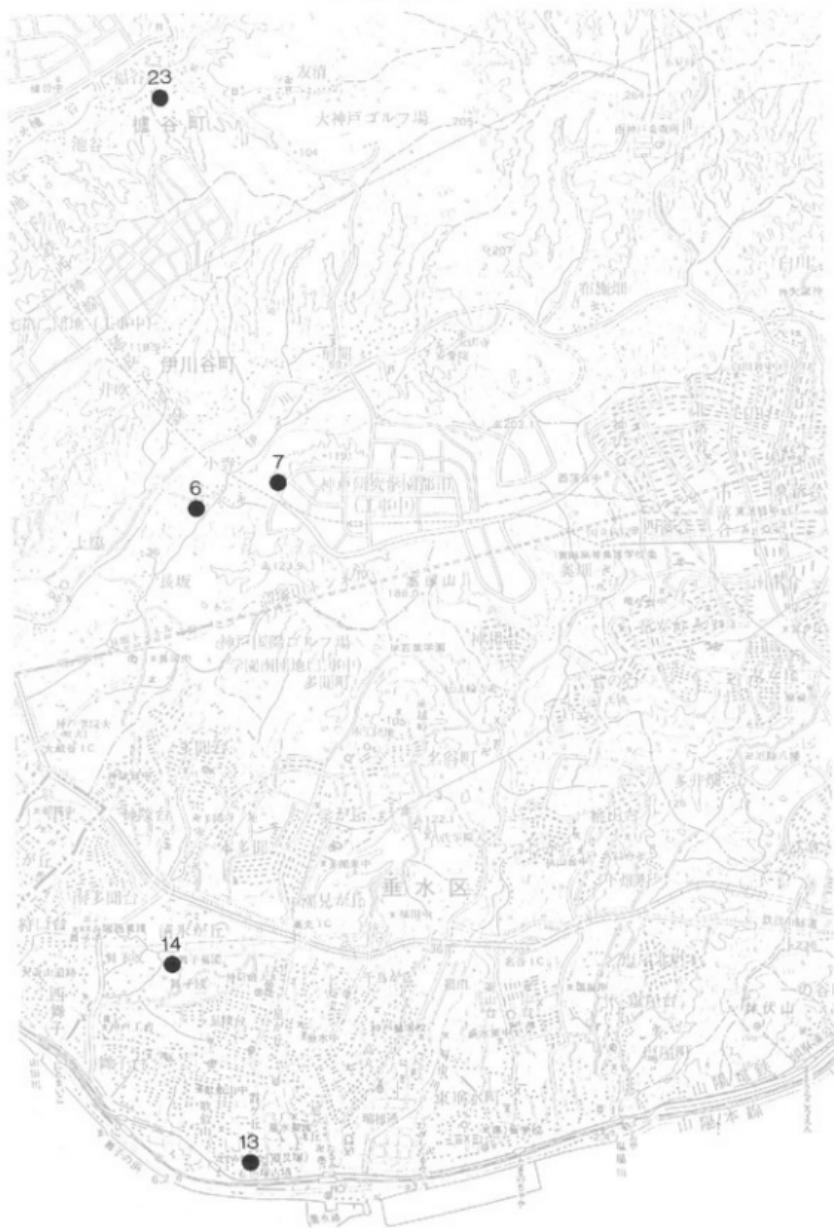
昭和57年度 埋蔵文化財調査地位置図



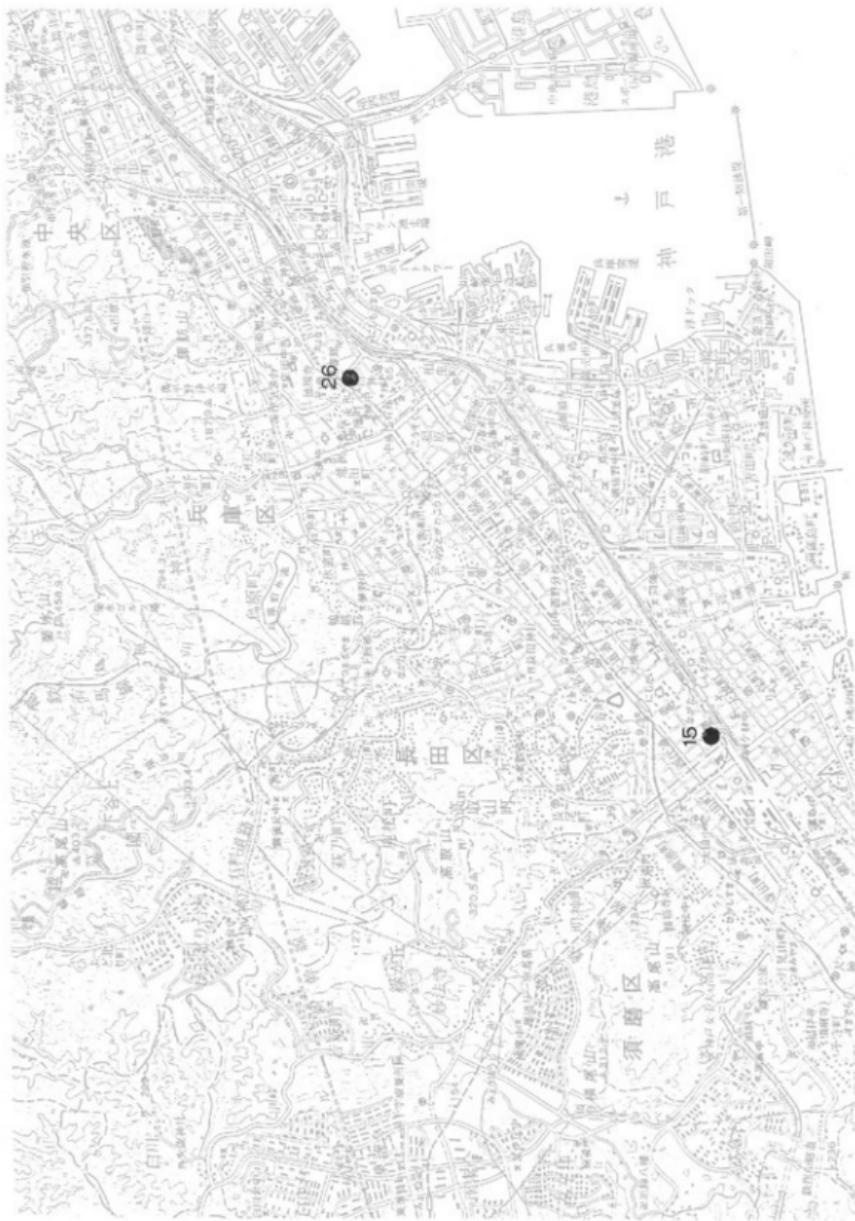
位 置 図 1



位置図 2

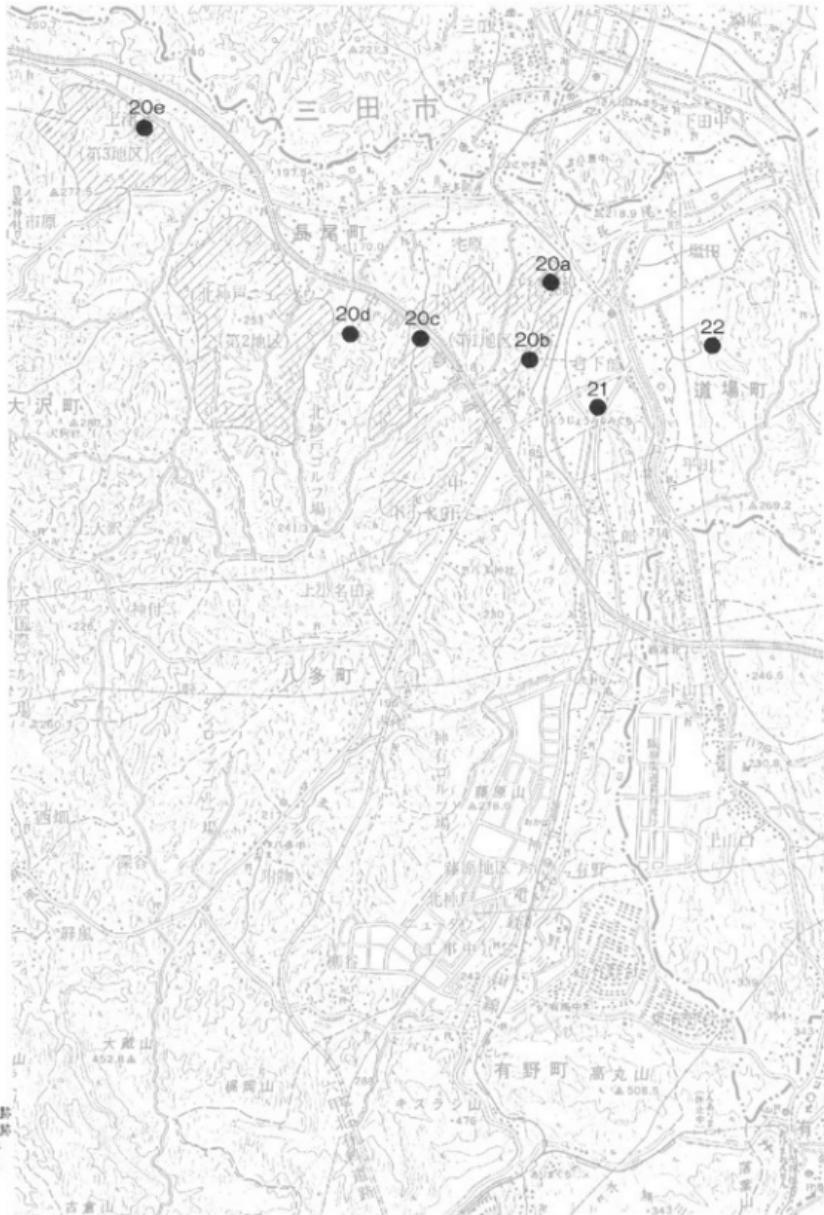


市 聞 団 3



位置図 4

位 置 図 5



- 20a 第4地点遺跡  
20b 第47地点遺跡  
20c 麋の子通路  
20d 長野谷地区  
20e 第38地点  
雨堤地区

## 1. 西神ニュータウン内遺跡

昭和57年度の西神ニュータウン建設及び関連事業区域内の発掘調査は、昨年度に引き続き第62地点B遺跡の発掘調査と第33地点の古墳群の補足調査並びに第88地点の窓跡確認のための試掘調査を実施した。このうち試掘調査では、窓跡は確認されなかった。

### 第33地点遺跡

1. はじめに 西神33地点遺跡は、尾根上に5基の古墳が存在し、第33-1号～第33-5号の5地点を33地点と呼んでいる。昭和46年に、埋葬主体部、墳丘規模などを明らかにする発掘調査を実施し、多くの遺物が出土した。しかし、当時は保存の可否が未定であったため、すべての調査を実施していなかった。今回、これら古墳の存在する尾根一帯が造成されることになり、未調査である1号墳と5号墳の埋葬主体部掘方及び2号墳の墳丘を中心に再調査を実施した。



fig. 1 西神第32地点、第33地点遺跡位置図

## 2. 調査概要 a 第33—1号墳

第33—1号墳は、標高約96mにあり、第33地点の古墳群の中心部に位置し、墳丘規模は直径14mで最大規模である。主体部は、前回の調査で箱式の木棺を使用していたことが明らかにされた。また、主体部より出土した遺物は、棺の東端に置かれていたものが棺内に倒れこんだような状態で出土している。今回掘方の調査により棺の埋納状況及び掘方の規模・形状を知ることができた。掘方は、盛土より掘り込まれ、下部は地山を切り込んでいる。掘方規模は、幅1.5m、長さ3.7m以上、深さ0.45mで棺部分はさらに幅0.7m、深さ0.1mで一段深く掘りくぼめてあった。棺底にあたる部分より鉄製刀子1点が出土した。

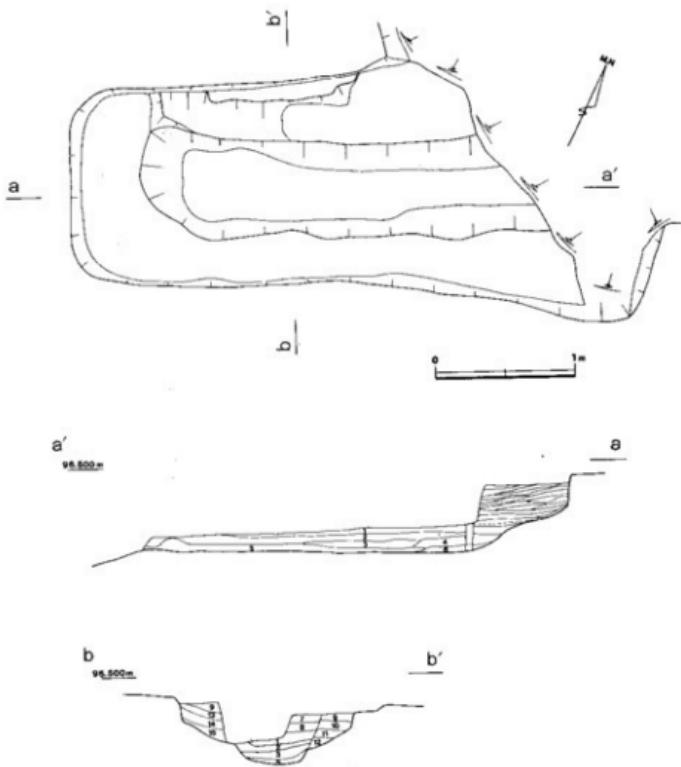


fig. 2 第33—1号墳主体部掘方平面図及び断面図



fig. 3 第33地点遺跡全景(北から)



fig. 4 第33—1号墳全景



fig. 5 第33—1号墳主体部掘方



fig. 6 第33—5号墳全景



fig. 7 第33—5号墳主体部

### b 第33—2号墳

第33—2号墳は、前回調査の結果、主体部はほとんど盗掘によって破壊されており、部分的に掘方らしきものが残っていただけであった。そのため、今回の調査は、墳丘の盛土部分を掘り下げ、積土層より築造状況を調査することとした。墳丘は、ほぼ平坦面に築かれ、大部分盛土により造られていた。盛土はおよそ6回にわけて盛られている。墳丘規模は径約9mであった。

### c 第33—5号墳

第33—5号墳は、埋葬主体の掘方を中心に調査を行った。内部主体は、「木棺直葬であり、棺の両長側に沿って径20cm前後の河原石が積まれていた」ことが前回調査で明らかにされている。その後の墳丘上の流失が著しく、掘方も下部を一部残すだけであった。掘方は棺底より約10cm深く掘られている。幅は北側が失われているが1.5m以上、長さ3.2mであった。

3.まとめ 今回の調査は、前回調査の補足的なものであり、特に新たな知見は得られなかった。

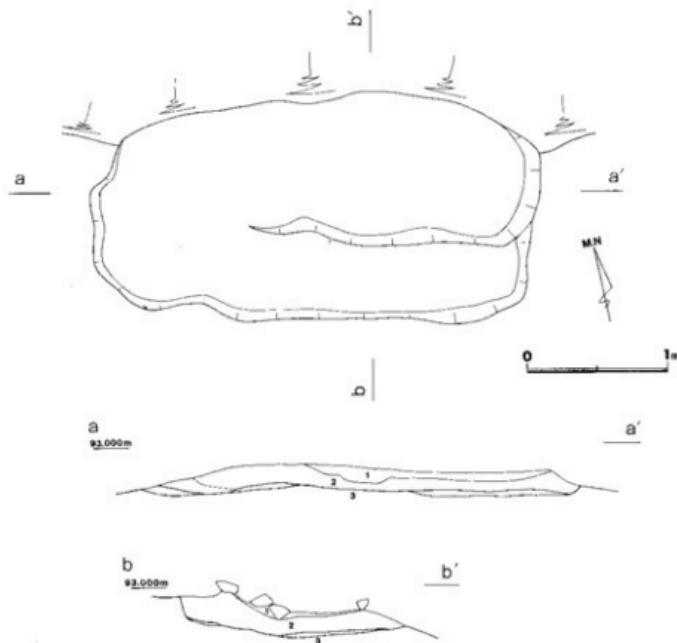


fig. 8 第33—5号墳主体部掘方平面図及び断面図(但し、b b'は掘方内土層堆積状況)

## 西神第62地点B遺跡

1. はじめに 西神62地点遺跡は、菅野谷川の河岸段丘上に位置する。菅野谷川の改修工事に伴い、昭和56年度に第1次及び第2次の調査を行った。第1次調査では、右岸にあたるA地区の発掘調査を実施し、弥生時代～中世の集落址を発見している。第2次調査は、左岸のB地区について遺跡確認の試掘調査を行った。この結果、B地区においても古墳時代から中世にかけての遺構及び遺物を検出した。今回、第2次調査の成果に基づいてB地区的全面調査を実施した。



fig. 9 第62地点B遺跡位置図

2. 調査概要 発掘調査は、河川改修工事にかかる範囲（第2次調査地区を含む）約1,000m<sup>2</sup>について行った。検出された遺構は、竪穴住居址2棟、掘立柱建物6棟、溝状遺溝4条である。他に、ピット、土塙が數か所検出された。

## a. 竪穴住居址

S B01・02 竪穴住居址は、2棟が切合って検出された。S B01は、S B02に切られており半分以上失われているが、一辺4.5mの方形竪穴住居址と思われる。S B02は、一辺5.4mの方形竪穴住居址で、4本柱の建物である。いずれの住居址も西辺中央にカマドを設けている。カマドは、上部がすでに失われているが、下半部は黄褐色の粘土で馬蹄形に築かれ、住居址の外へ掘り込んだ煙出しがつくられている。これらの住居址の時期は、出土した土器片から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。

## b. 掘立柱建物

S B03・04 掘立柱建物は、6棟が発見された。このうち2棟は、調査地外にひろがっている。S B03とS B04は2間×2間で柱間は1.8m前後の規模である。S B04は、建替えがあったものと思われ、柱穴の重複が見られる。いずれの建物の柱

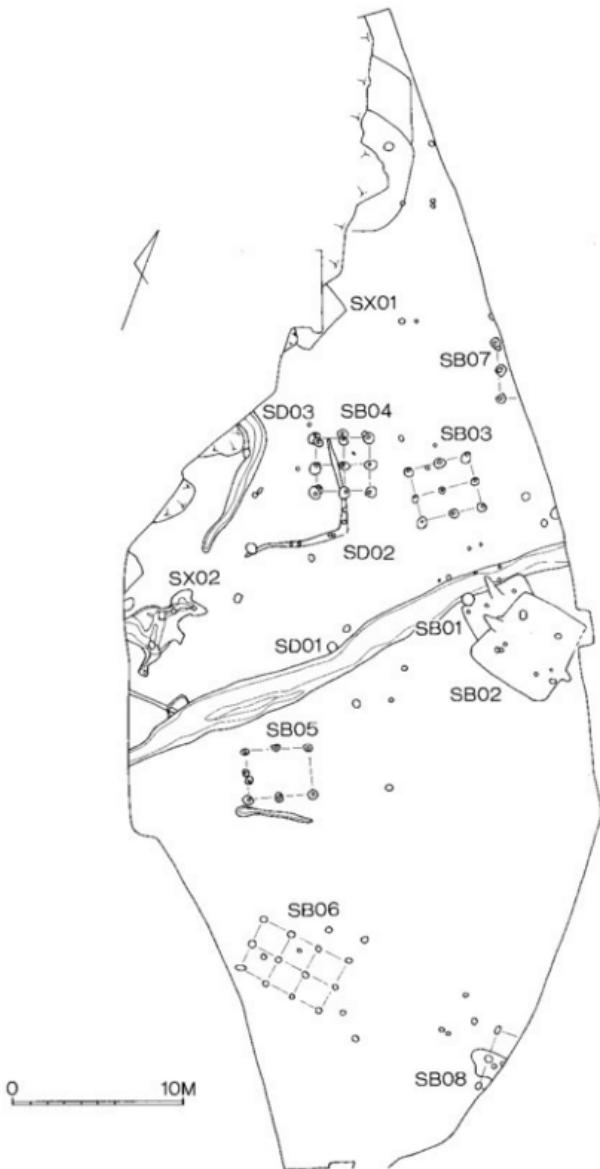


fig. 10 第62地点B遺跡平面図

穴掘方も、径60cm前後の不整円形若しくは方形に近い形をしており、深さ50cm以上である。建物規模からみて、柱穴が比較的大型であるのが特徴であり他にSB07の柱穴も共通した形状をもっている。

**SB05** SB05は、1間×2間で、西辺は間にもう1本柱を設け2間としている。柱間は南北2.8m、東西1.9mを測る。

**SB06** SB06は、2間×3間の規模で、柱間は約1.8mである。検出された掘立柱建物のなかでは最も規模が大きく、整った形状である。SB06の柱穴は、径30cm前後のほぼ円形の平面形で、SB03・04・05などと比べて小型である。

**SB07・08** SB07・08は2間分の柱穴しか検出できなかったが、おそらくSB03・04と同様の建物と推定される。

これらの掘立柱建物の柱穴掘方内から出土する遺物は、いずれも須恵器・土師器の細片であった。このため、時期を決定するのは難しいが、SB06は平安時代末から鎌倉時代初頭と思われ、他の建物址は竪穴住居址と同時期の古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。

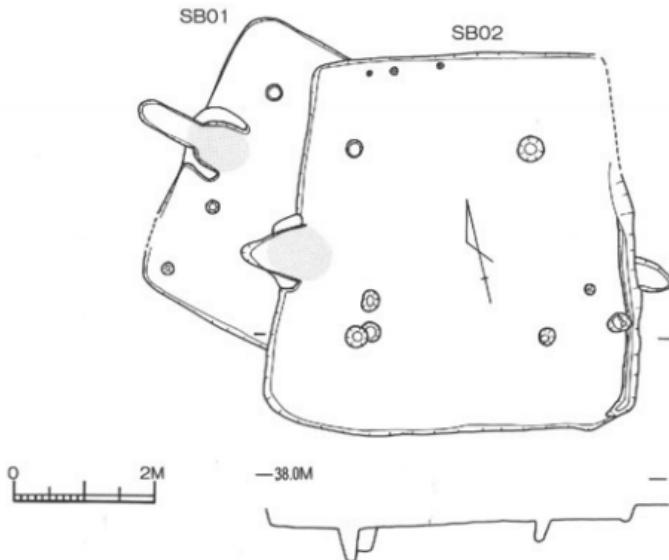


fig. 11 SB01、SB02平面図

### c. 溝状遺構

溝状遺構は4条検出され、SD03が弥生時代後期のものであるほかは、古墳時代後期のものである。

SD01は、幅1.4~2.2m、深さ0.4~0.6mで、SB01に切られている。SD02は、幅0.3~0.4m、深さ0.1m内で、一辺約6mのL字状になっている。溝底から径10cm程のビットが数か所検出された。SD03は、最大幅1.2m、深さ0.3mで南側に向かい浅くなっている。SD01からは、須恵器・土師器片が出土し、6世紀中頃と推定される。

### 3.まとめ

今回の調査では、古墳時代及び中世初頭の建物址の遺構が検出された。前回調査したA地区(右岸地区)においても古墳時代後期の遺構が検出されており、遺跡は、現在の菅野谷川の両岸に存在し、さらに北西の段丘上にひろがっていると考えられる。これまで櫛谷川流域においては、古墳時代の集落址の調査例が極めて少なく、その様相についても明らかでなかった。今回の調査で、集落址の一部が確認され、当流域の様相を解明するのに役立つものと期待される。掘立柱建物の性格については、竪穴住居址と共に存することから倉庫とも考えられるが、今後、規模・構造などを他の遺跡の類例と比較する必要がある。また、集落址の全容が不明なため、今後の資料の増加、検討に待つところが大きい。



fig. 12 SD01内土師器出土状況



fig. 13 第62地点B遺跡全景(西から)

fig. 14 S B01・02  
(北から)

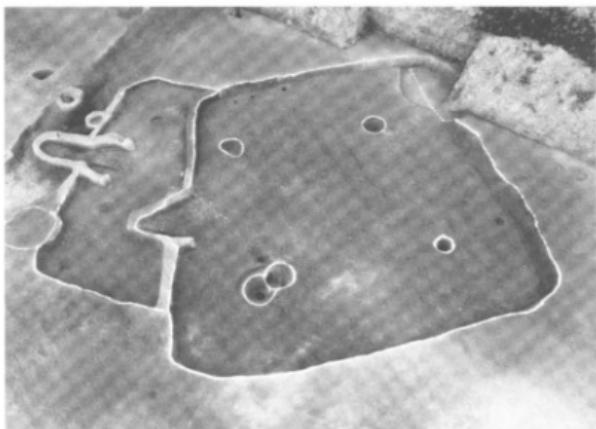
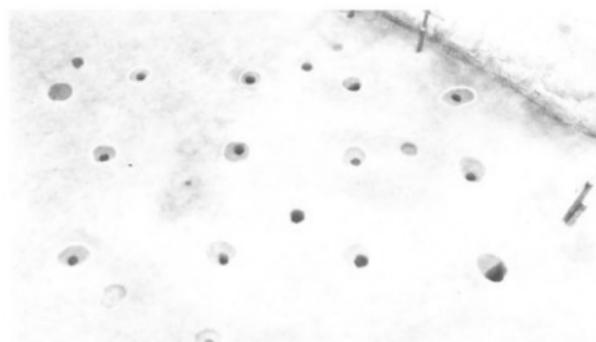


fig. 15 S B03・04  
(東から)



fig. 16 S B06



せいじんちゅうおうせん 2-2  
2. 西神中央線長谷遺跡

1. 調査経過 長谷遺跡は、櫛谷川の中流域、神戸市西区櫛谷町池谷に位置している。櫛谷町は明石川の支流、櫛谷川によって形成された、ほぼ東西に広がる谷平野に立地している。その中を櫛谷川と並行に県道小部一明石線が中央を走っている。明石川流域およびその支流である伊川流域には、吉田南遺跡、池上口ノ池遺跡、頭高山遺跡、新方遺跡等弥生時代から中世にかけての遺跡が多く存在しているが、櫛谷川流域には弥生時代の遺跡は少なく、菅野・松本地域で古墳時代の遺跡の存在が知られているのみである。しかし、中世以降は急激に遺跡の数が増加する。

当該地点は、研究学園都市から西神ニュータウンへ通じる西神中央線が、県道と交差する計画となっている。そのため工事に先立ち、昭和56年度に西神中央線予定地内の分布調査、試掘調査を実施した結果、須恵器片口鉢の口縁部片、土師器羽釜片や長方形土塙が検出され、中世火葬墓群が存在すると考えられた。

今回の調査は、中央線建設予定地内の両側に幅5mの擁壁工事が本工事に先立ち実施されるため、本体中央部と分離して擁壁部のみについて実施した。

fig. 17 長谷遺跡トレントンチ設定図



**2. 調査概要** 調査は、中央線建設予定地の両側に幅5m、長さ180mのトレンチ2本を設定して行うこととし、東側を第1トレンチ、西側を第2トレンチとした。掘削は両トレンチとも県道側から開始したところ、遺物包含層はほとんどなく、遺物の出土も少なかった。調査面積は1800m<sup>2</sup>である。検出された遺構は、火葬墓と思われる土塙（SK01～07）土器溜め土塙（SK08）、用途不明土塙（SK09）である。

**SK01** 長軸3.7m、幅1.5m、深さ20cmのやや扁平な舟底形の土塙である。長軸の一方には、30cmの突出部があり、土塙内全面に炭が詰まっている。土塙肩部にはかなり大きな木炭も検出されたが、壁や底はほとんど火を受けた痕跡はみられなかった。出土遺物は皆無であった。長軸方位はN77°Eである。

**SK02** 長軸3.6m、幅1.7m、深さ20cmの多いびつな長方形土塙で、長軸の一方、長さ1mで肩の部分がくびれた突出部がある。くびれた部分の底はさらに一段低くし、炭と焼土が交互に検出された。焼土が検出されたのは、この部分のみで、土塙内はSK01同様炭だけであった。くびれた部分はトンネル状になっており焚口を思わせる造りである。土塙内の上層より時期不明であるが中世須恵器小片一片が出土している。長軸方位はN96°Eである。

**SK03** 長軸2.3m、深さ10cmで幅はSK08に切られているため不明である。長軸方位はN80°Eである。突出部は、わずかに認められるが、土塙全体の寸程度が欠けているため詳細は不明である。土塙内は、炭と灰のみで遺物は皆無であった。

**SK04** トレンチ端で、長方形土塙の一部を検出したため、東側へ1.5m拡張した結果、長軸2.8m、幅1.3m、深さ10cmを計測した。20cmの突出部をもち、扁平底である。長軸方位はN74°Eである。土塙内は全面炭土で、上層にわずか灰土が認められた。遺物は出土していない。また、突出部側の両肩部に、径20cm、深さ10cmの柱穴を検出したが、土塙との時期差は不明であり、土塙を覆っていた建物の柱とは考えにくい。

**SK05** SK04の南約20mで長方形土塙の一部を検出し、東側へ2.5m拡張した。長軸4.2m、幅1.7m、深さ15cmで60cmの突出部をもつやや大型の土塙である。土塙の大きさに対して突出部は比較的小さく、底は突出部が多少高くなっている。床面の一部に焼けた痕跡が認められた。しかし、土塙内の炭土の割にはほとんど壁面に火を受けていない。長軸方位はN94°Eである。

**SK06** 長軸3.7m、幅1.6m、深さ10cmで、40cmの突出部をもつ、SK02と同様突出部の下で一段掘りくぼめられていた。全面炭土で遺物は検出されなかった。長軸方位はN57°Eである。

**SK07** SK06の南約10mで検出されたが、長軸2.3m、幅1.3m、深さ10cm

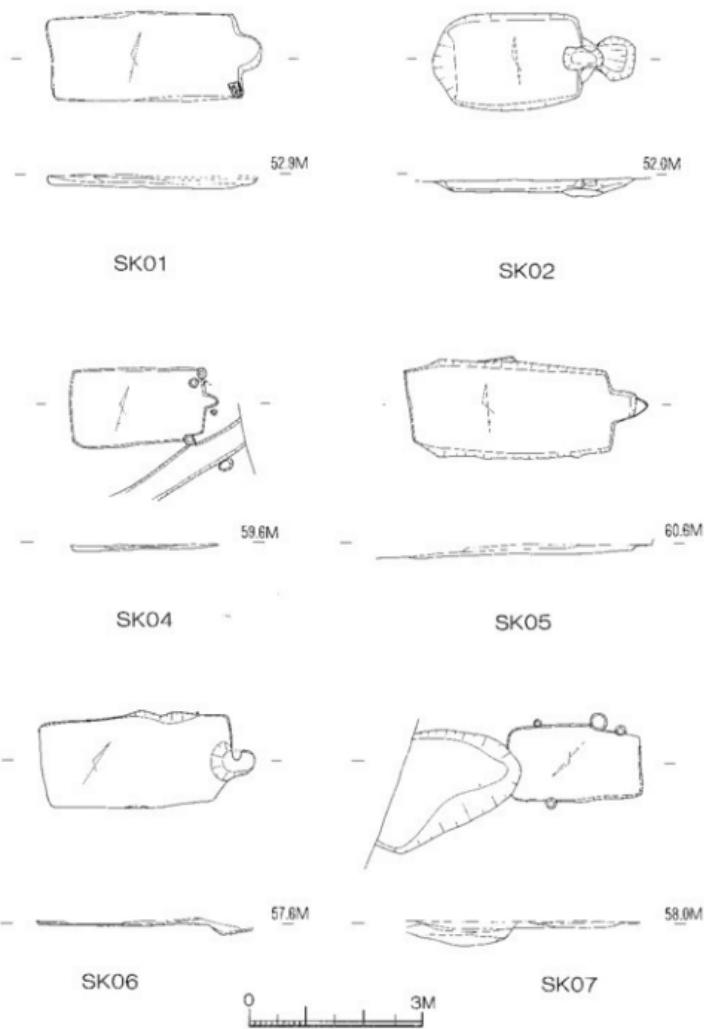


fig. 18 土块集成图



fig. 19 SK01

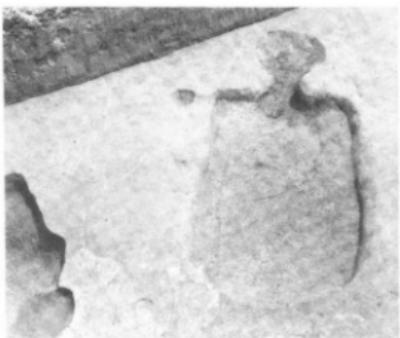


fig. 20 SK02



fig. 21 SK05

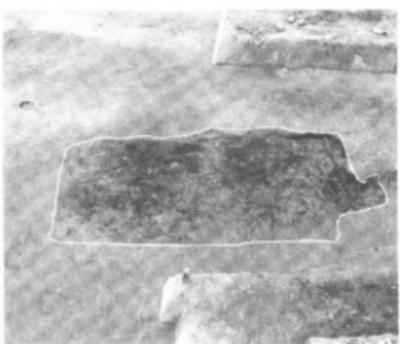


fig. 22 SK06

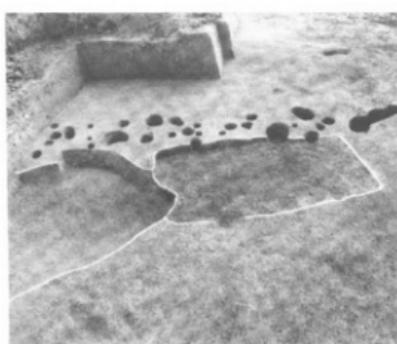


fig. 23 SK07



fig. 24 五輪塔

の長方形土塙である。突出部は搅乱を受けているため不明である。土塙内は、他の長方形土塙と同様全面炭土で、遺物は検出されなかった。長軸方位はN47°Eである。土塙周囲の肩部に径20cm、深さ15cmの柱穴を数個検出したが、覆屋と断定はできなかった。

**S K08** 長径4.3m、短径3m、深さ1mの楕円形をしたすり鉢状の土塙である。底から人頭大の石を数個検出したが、人為的なものとは考えられない。また、土塙内から多量の土器が出土している。これらのほとんどは浮いた状態で出土しているため、土塙の目的とは別に、土塙が使用されなくなった後、土器溜めになったと考えられる。出土土器は、須恵器壺、鉢、土師器羽釜、瓶、土鍋、甕、青磁碗等の破片であるが、中でも土師器羽釜片が多量に出土している。

また、SK08の北20mから、凝灰質砂岩で造られた五輪塔の地輪部と火輪部が検出された。地輪の下には根石を敷いているが、遺構は検出されなかった。

**S K09** SK01とSK02の中間に、径60cm、深さ40cmの円形土塙が検出された。土塙内は炭土が詰まっていたが、遺物はなく用途不明である。

**3.まとめ** 今回の調査で検出された遺構のうち、SK06とSK07が第2トレンチから検出された他は、すべて第1トレンチで検出されている。中でも、注目されるのは短辺中央に突出部のある長方形の土塙で、この形態は、大きく分けて3種類ある。まず、

A類——突出部の底が平らで本体土塙の底と同レベルであるもの 4例

B類——突出部の底を一段掘りくぼめて深くしているもの 2例

C類——突出部の底が一段高くなっているもの 1例

である。長軸方位は、やや離れているSK06とSK07は大きく北へ振れてるが、他のほとんどは多少の誤差があるが東向きである。おそらく突出部を焚口として意識したものと思われる。当初火葬墓と考えていたが、土塙内から骨片や木棺に使用される釘などの遺物が出土せず、墓と断定することはできなかった。また、土塙内に炭が堆積している状況から見てかなりの火を使用したと思われるが、底や壁の焼けが少なく当初から炭を土塙内に敷いていた可能性もある。

SK08の土器溜め土塙は、2. 調査概要の項でもふれたが、土器が浮いた状態で出土していることから、何かの目的で使用されていた土塙が不要になった後、土器溜めとして使われたものと思われる。しかし、こうした土器を使用した生活面は検出されていないことから、周辺部に遺構が存在すると考えられる。

長谷遺跡の時期であるが、長方形土塙からは出土遺物がなく断定できないがそれが土器溜め土塙（SK08）と同一面で検出されることから12世紀後半から13世紀にかけてのものと推定される。

### 3. 如意寺

**1. 位置と歴史的置き** 如意寺は、檜谷川左岸の河谷平野から東方へのびる支谷の奥まった地点に位置している。

**環境** 如意寺の創建時期は「如意寺日記」・「如意寺縁起」によれば、大化元年（645年）「当山開基」の記事がみられる。このほか、仁寿元年（851年）円仁僧都によって「七堂伽藍を成す」の記事や、正暦年中（990年～994年）に願西上人によって「仏閣諸棲を再び修営」と記されているが、確実なものではない。従って現存する阿弥陀堂の建築様式から鎌倉時代にはすでに堂舎が建立され、南北朝時代には七堂伽藍が整備されていたと考えるのが妥当であろう。



fig. 25 如意寺位置図

**2. 調査概要** 調査地は文殊堂の西南約30mに位置し、北側の阿弥陀堂が存在する丘陵腹部から人工的に切り離されて平坦部を作り出している。南側は現在の公道より約1.5m高く、南北15m、東西14mの方形壇状となっている。この方形壇状部中央の消火用貯水槽設置予定地99m<sup>2</sup>について調査を行った。

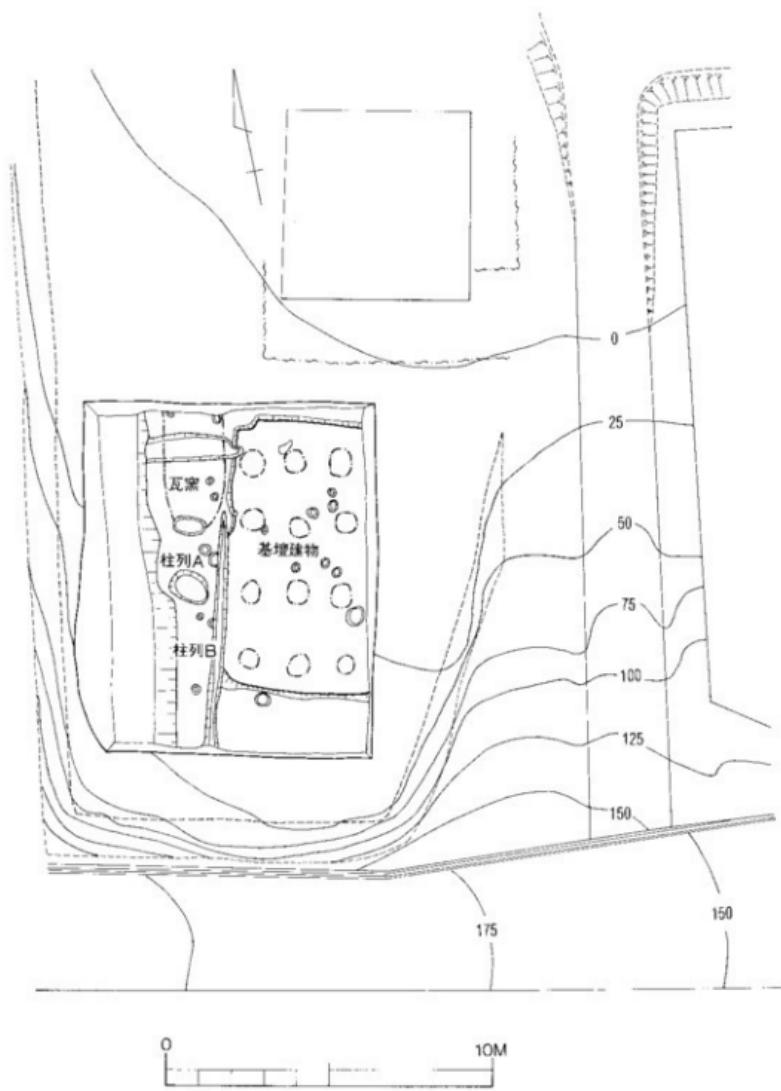


fig. 26 造構平面図

**第1次遺構面** 地表下80cmで焼土・焼瓦を多量に含む第一次整地面が存在し、江戸時代の巴文軒丸瓦を含む不定形土塙1基及び柱穴1ヶ所を検出した。

**第2次遺構面** 第1次整地面を形成する明黄褐色粘質土を除去すると黄褐色砂礫土となり、トレンチ北西部でこれを切り込んだ瓦窯1基が検出された。

**第3次遺構面** さらに第2次整地土を除去した結果、トレンチ東部中央よりでは、黄褐色粘質土がほぼ平坦面をなし、南・西には暗灰褐色土（土師器・須恵器を含む）が西に厚く堆積して、西側は急な段落ちとなっている。この暗灰褐色土を取り去った結果、方形基壇1基を検出した。

**3. 検出遺構** 長辺円形の平面プランをもつ瓦窯である。規模は幅1.8m、主軸長3.7m以上瓦窯で、窯体北側は調査地外となる。窯体は敷地層を掘りくぼめ、粘土を敷き床面を築いている。後世の削平のため焚口・煙出しの形状は不明であるが、両側に焚口をそなえ、中央に煙道・煙出しをもつ瓦窯と推定される。以上の推定より復原される窯体規模は主軸長約5.0mである。

**基壇建物** 南北8.5m、東西4.5m以上の方形基壇である。北側で約20cm、西側で約15cm、南側で約30cmの高さを残し、傾斜面を削り出して平坦な基壇の基底をつくりだしている。基壇上面は全体に中世須恵器を含む灰褐色土に覆われている。この被覆土を取り除くと灰色砂質土と黄褐色粘質土を交互に叩き締めた堅致な基壇面が検出される。この基壇上面から3cm大の小石を埋めた礎石据付け痕跡を確認した。礎石据付け痕に伴う建物は南北3間、東西3間以上で、ほぼ南北方向に棟を置く建物である。桁行の柱間は南・北とも1.9mで中央間は2.3mを測る。梁の柱間は1.5m等間である。

礎石建物の基壇西辺に沿って内側に2間分（2m等間）の柱列Aがあり、それを切って柱列B4間分（2.1m等間）が付設されている。

**4.まとめ** 今回の如意寺境内での発掘調査では、三時期の遺構面を検出した。

江戸時代の遺構面となる焼土と焼瓦層の堆積は、如意寺旧記にある天文8年（1589年）の大改修のものであり、その下層で検出した瓦窯は天文8年以前のものと考えられる。この瓦窯は宝塚市元清発見の瓦窯に類似し、元清瓦窯は16世紀頃のものと考えられている。如意寺における瓦葺き換えは、応永年中（1394～1427）の大改修と共に行われたとされている。これは、阿弥陀堂に葺かれていた丸瓦のヘラ書きに「応永13年」（1406年）とあることから明らかである。従って、今回発見の瓦窯も15世紀前後のものと推定される。

瓦窯の下層及び第2次整地層からは瓦の出土はなく、基壇周辺での堆積層からも瓦の出土がないことから、基壇建物は瓦葺きではなかったと考えられる。基壇上面出土の須恵器塊の型式から、建物の創建は14世紀後半を降らない時期と考えられる。

かんでこようしきん  
4. 神出古窯址群

1. はじめに 神出町一帯は印南段丘と呼ばれる高位段丘上の東北端に位置する。付近は、雄岡山とそれに連なる隆起扇状地からなり、小河川による浸蝕によって、谷が東西に入り込む。周辺では、旧石器時代から平安・鎌倉時代に至る各時期の遺物・遺跡が発見されている。この内、特に注目すべきものとしては、平安時代後期に始まる瓦・中世須恵器を生産した窯址及びそれに関連する工房・集落址などである。

神出町地域での圃場整備事業は昭和53年より開始され、工事に先立ち、分布調査、試掘調査を実施してきている。

今年度の事業地区は、田井・北古・神納の3地区、事業面積約63haである。当該地域の試掘調査の結果より、田井地区堂ノ前・田井裏・池ノ下・南下の各地点で窯体及び集落址の存在を確認した。その多くは、農政当局の協力によつて工事の計画を変更し、保存の処置がとられたが計画変更の不可能な場合に限定して調査を実施した。



fig. 27 調査実施地域図

**2. 調査概要** 窯体が存在すると予想された部分に南北 $4 \times 60\text{m}$ のトレンチを設定するとともに、灰層の堆積状況を知るためにその下部（谷に近い位置）の崖面の精査を60mにわたり実施した。

この結果、トレンチ内で8基の窯体を検出した。各窯体は、焼成部の一部と煙道部がすでに開墾により失なわれている。窯体内の調査は保存を図るため実施していないが、各窯体とも焚口は南を向く。

崖面の精査より灰原は東西約60mの範囲に亘り、保存状況も良好で、前庭部付近は約60cm地山が掘りくぼめられている。灰層の堆積状況からトレンチ内で検出した8基の他、もう1基は存在すると考えられる。灰層は、各窯体の前庭部付近が最も厚く、1mを超すものもあり、窯壁片や赤色土が瓦層をなし窯体の修復がくり返されたことを物語っている。

遺物は、中世須恵器・瓦がほぼ同量出土している。須恵器では、片口鉢が最も多く、壺、皿と続く。壺なども少數焼かれている他、風字碗・長方碗が各一点出土している。瓦は平・丸瓦が大多数であるが、軒丸・軒平瓦の出土も多い。このほか5面の鬼瓦も出土している。窯の操業時期は、中世須恵器の形態及び瓦当文様などより12世紀前半と思われる。

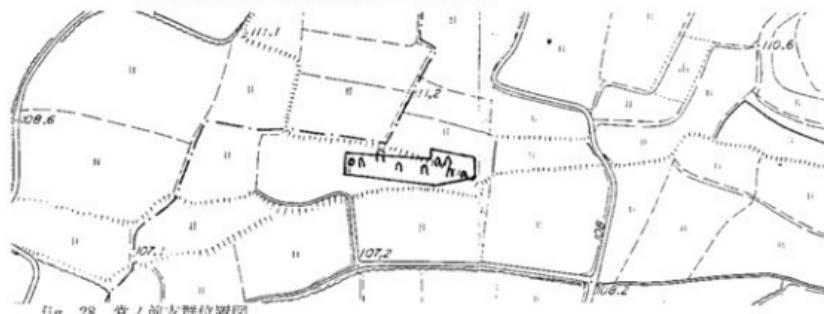


fig. 28 窯ノ前支群位置図

**田井裏** 昨年度の試掘調査によって灰層の一部を確認し、その後の磁気探査の結果でも窯址の存在が予想されたため、窯体の位置と灰層の範囲を知ることを目的としたトレンチを設定した。トレンチは、南北に入り込む谷の中心部に $1 \times 80\text{m}$ のトレンチ（第1トレシチ）を設け、それに直交するトレンチ3本（北より第2～4トレシチ・ $1 \times 15\text{m}$ ）を設定した。

この結果、第1トレシチにおいて南北30mにわたり灰層を確認した。灰層の断面観察より、厚くなる部分が3か所あることから3基以上の窯体による堆積であることが知られた。そのため、灰層が最も厚く堆積する部分に直交する第2～4トレシチを設けた。

第2トレンチでは、焚口を東に向ける窯体（第1窯体）を検出した他、東西約10mにわたり灰層を確認した。灰層の東端部は、旧河道より一部削られていた。第1窯体は、谷の西側傾斜面に位置し、燃焼部上半以上が開墾により削平されていた。また、東側傾斜面では、灰を含まない土器の堆積（厚さ20~50cm）を東西約5mにわたり検出した。この遺構の中で発見される遺物は、焼成不良品（赤焼け）や大型の破損品が多い。

第3・4トレンチでは、東から西に傾斜して灰層が堆積する状況を認めた。このことから1号窯同様、東に焚口を向ける窯址が存在したことが明らかになった。しかし、窯体は開墾により失なわれたと思われ発見されなかった。

出土遺物は、1号窯前庭部と土器溜りから出土したものが大半で、第3・4トレンチからの出土量は少ない。瓦・中世須恵器が同量出土している。

須恵器では、片口鉢の出土量が最も多く、塊、皿がそれに続き、壺なども比較的多い。この他、風字碗1、猿面碗1、二面碗1が出土している。

現在までの整理では、瓦類の内、軒平・丸瓦を中心としているため、その内容は不明である。操業時期は、堂ノ前支群と同様、12世紀前半のものである。

**池の下** 旧三木街道の東、中ノ池の西側に位置し、釜ノ口谷の最も奥に入り込んだ地区である。

試掘調査の結果、釜ノ口谷とその南側段丘との傾斜面中位の棚田において東西約30mの範囲で灰層を検出した。工事計画との調整を行ったが、西半部での現状保存が困難となったため、この部分東西約20m、南北10mの約200m<sup>2</sup>の調査を実施、記録化を図った。

調査の結果、2基の窯体とその灰原を検出した。西側に位置する1号窯は、保存状態が非常に悪く、燃焼部の床面をわずかに残す程度であった。東側に位置する2号窯も保存状態が悪く、燃焼部・焼成部の一部が残るだけであった。焼成部床面には、遺物が多く残存していた。

出土遺物の多くは、2号窯灰原から出土しており、1号窯灰層からの出土量



fig. 29 田井裏支群位置図

は少ない。中世須恵器は、片口鉢が主体を占め、塊がわずかにみられただけである。その他、風字硯1が出土している。操業時期は、中世須恵器の形態や瓦当文様より、12世紀後半のものと考えられる。



南下 田井地区から南地区にまたがる、県道東垂水一加古川線に接する北側の地域  
堂ノ池の東方の地区である。

試掘調査の結果、東西80m × 南北40m の範囲（約3200m<sup>2</sup>）にわたって、柱穴・溝・土塙と、その上部に堆積する包含層を確認した。この地点は、池ノ下支群の南東約500mの段丘頂部付近に位置し、これらの窯を築いた工人集団の生活集落と考えられたため、その多くを計画変更によって、現状保存を行なった。しかし排水路部分での計画変更が困難であったため、この部分を調査した。

トレーナーは、幅3mとし、第1(40m)、第2(30m)、第3(60m)の3本のトレーナーを設けて調査を実施した。

第1トレーナーでは、溝2条・土塙4基を検出した。溝からは、多数の中世須恵器、瓦・青磁・白磁が出土している。

第2トレーナーでは、一部で包含層がわずかに認められる他、遺構は認められなかった。

第3トレーナーでは、柱穴・溝・土塙を検出したが、建物の規模等は、トレーナー外に延びるため不明である。

出土した遺物は、全トレーナーとも12世紀中期から後半のものである。



fig. 31 南下地区トレーナー全景



fig. 32 出土遺物

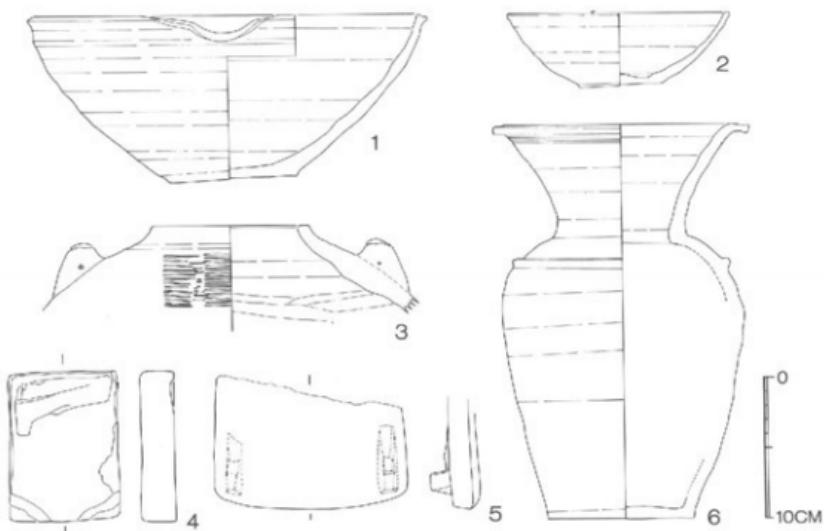


fig. 33 堂ノ前支群出土遺物実測図

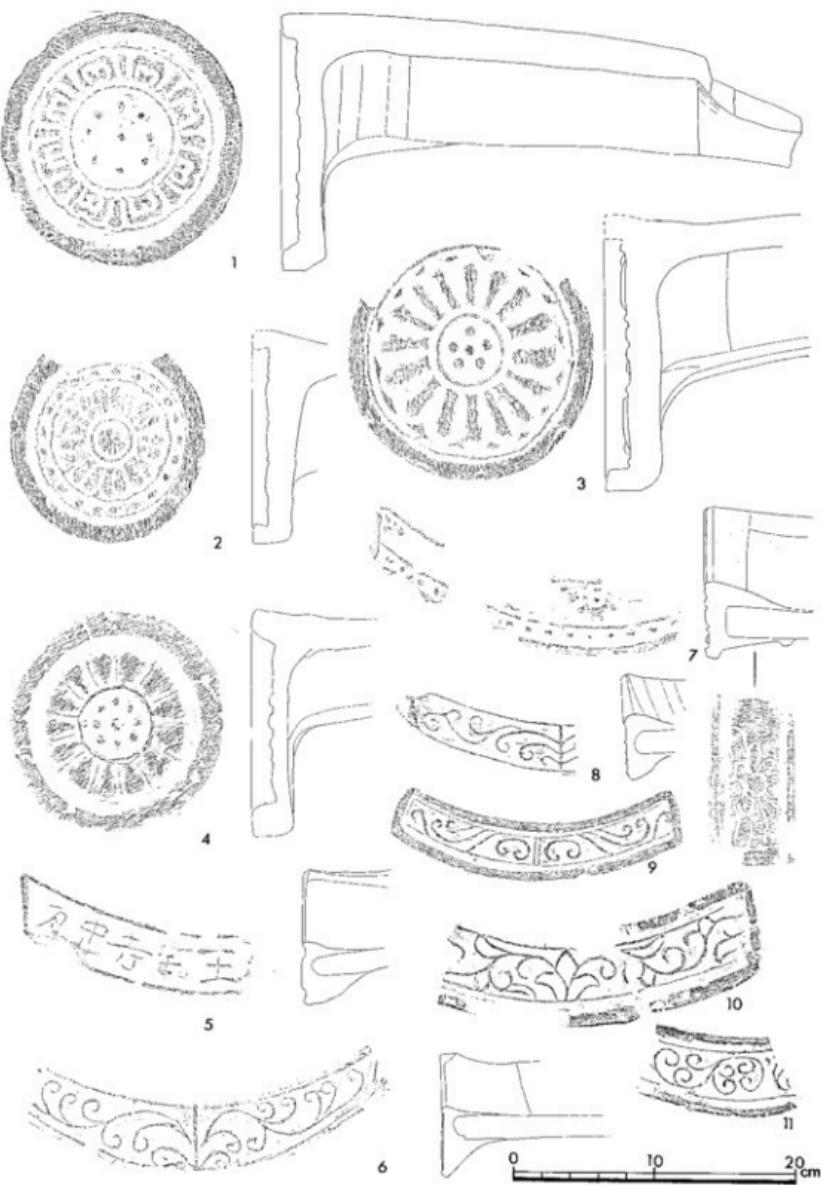


fig. 34 虹瓦拓影 1~4, 8, 10, 11 堂ノ前支群  
6, 7 田井裏支群 5 池ノ下支群 9 南下支群

## にしとだ 5. 西戸田遺跡

### 1. 環境

西戸田遺跡は、圃場整備事業に伴う調査で確認された遺跡である。圃場整備工事に先立ち昭和54年度から57年度にかけて発掘調査を実施してきた。今年度調査地は、明石川の右岸、印路の中位段丘裾部にひろがる圃場である。

周辺の遺跡として、北側に常本遺跡（弥生時代前期・後期）、黒田遺跡（古墳時代中期）が存在する。また西戸田の集落の東辺丘陵裾部には、江戸時代に開削された林崎堀割が南流する。

東南方向の丘陵上に中村古墳群、南には、明石川が形成した沖積地に玉津田中遺跡（弥生時代・中世）等が存在する。

### 2. 調査方法

調査は、試掘調査の結果と圃場整備計画で破壊される地区を考慮して、トレーニングを設定して行った。

fig. 35  
調査区  
位置図



### 3. 調査概要

試掘調査では、古墳時代遺物包含層が確認されている。遺物包含層直下は、地山で、これが造構面となる。検出された遺構は、SK03を除いてすべて古墳時代のものである。

SD01 SD01は、東へ低くなった溝で、規模は、幅5m、深さ0.2~0.5mを測る。出土遺物は、弥生土器片と古墳時代土師器・須恵器である。

SK01・02 SK01・02は、SD01の埋土を除去した後に検出された。SK02は、径約1m 深さ0.1mの浅い土塹である。

SK01は、形状は不明であるが、SD01を垂直に切り込んでいる。遺物は比較的多く出土した。時期は、SD01の遺物と大差なく6世紀後半頃である。

SK03 SK03もSK01・02と同様にSD01の埋土を除去した後に、検出された遺構

fig. 36

調査区全景  
(南から)

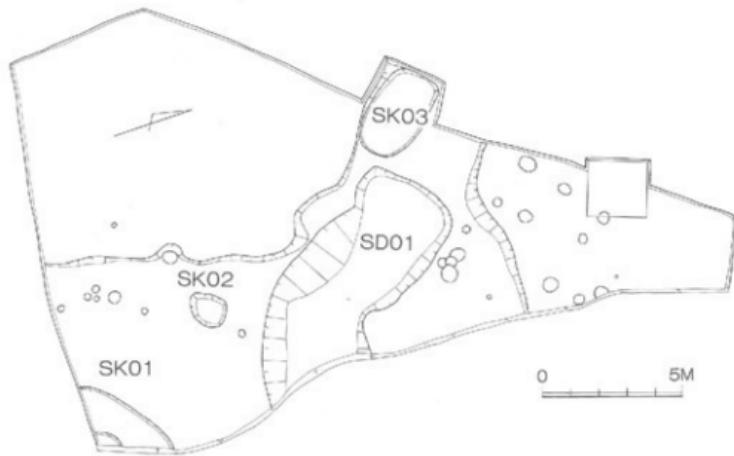
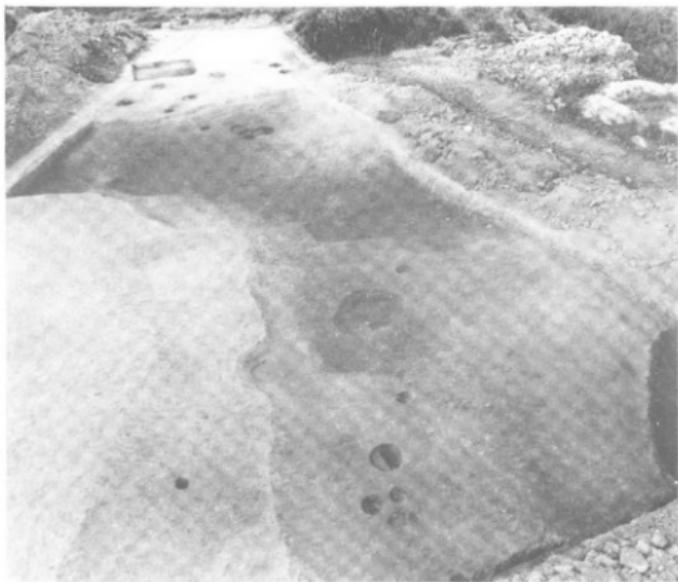


fig. 37 調査区平面図

である。

出土遺物は、弥生時代前期（畿内第1様式中段階）の一括遺物が含まれていた。出土状況から、土器を意識的に埋めたとは考えられず、単に廃棄したものと考えられる。また少量の炭も検出した。

ピット トレンチの北側には、10数か所のピットが検出された。柱穴と思われるが、建物としてはまとまらなかった。

4.まとめ 弥生時代前期の土塙SK03が発見されたため、他に同時期の造構の存在も考えられ、トレンチ内を精査したが、検出されなかった。弥生時代前期の土器の出土は、数少ない一括資料として重要である。

古墳時代の一連の造構は、出土遺物から考えても周辺に、この時期の集落の存在を予想させるものである。

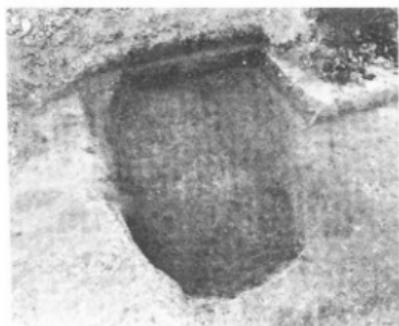


fig. 38 SK03



fig. 39 SK03遺物出土状況

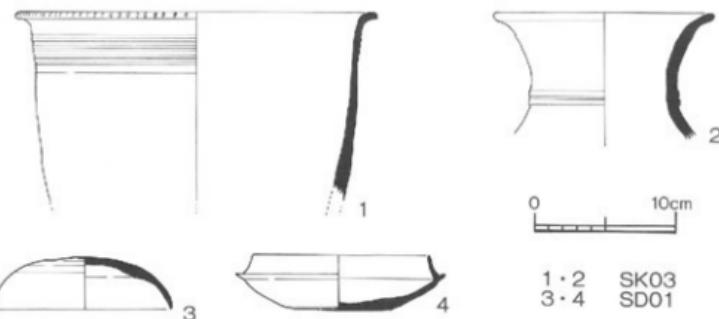


fig. 40 出土遺物実測図

## 6. 小寺遺跡

### 1. はじめに 小寺遺跡は、伊川中流域東岸に位置する。

当該地は、昭和56年度に、遺跡の有無・性格・時期・範囲等を確認する予備調査が実施されており、今年度は、その成果に基づいて全面調査を実施した。

近隣地には、頭高山遺跡（弥生時代集落址）、大門遺跡（中世火葬墓群）、柿谷古墳群が存在し、発掘調査がおこなわれている。

### 2. 調査概要 昭和56・57年度予備調査の成果に基づき20m×30m（第1地点）、10m×20m（第2地点）、10m×20m（第3地点）の調査区を設定した。

その発掘調査の結果検出された遺構は、土塁、溝、掘立柱建物、ピットであった。

(1) 第1地点 第1地点の東半分は、伊川の氾濫原に立地し、遺構ベースは砂質上であり、その直下は円礫を多量に含む砂礫層である。SD01は、出土遺物はないがその堆積状況よりその成立時期は新しいと考えられる。

その他の溝状遺構（SD02～05）は、出土遺物（土師器・須恵器）から7世紀後半から8世紀の初頭にかけての遺構であろう。

掘立柱建物は2棟検出された。SB01は2間×4間であるが、新しい時期に成立したSD01に削られたと考えれば2間×6間になる可能性がある。

SB02は2間×3間である。

これらの掘立柱建物やピット類は、出土遺物より7世紀後半と考えるのが妥当であろう。



fig. 41 調査地点位置図

(2) 第2地点 第2地点は第1地点と同一の遺跡であるが、水路建設の際に両者の間の部分は遺構が消滅している。

発掘調査の結果検出された遺構は、土塁、溝、ピットで、建物址は検出されなかった。

SK01、SK02は土器溜めのピットで、土師器類が投棄された状況で検出された。

第2地点も第1地点と同様、その時期は7世紀後半と考えられる。

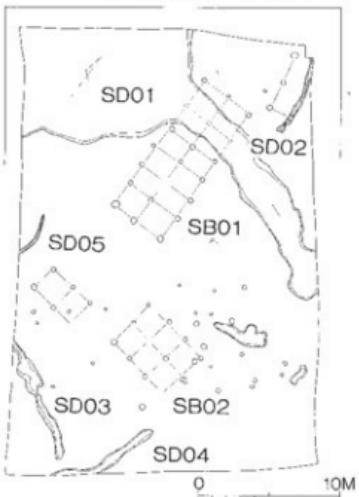


fig. 42 第1地点平面図



fig. 43 第3地点平面図

(3) 第3地点 第3地点は、第1・2地点の南西約400mにあり、小寺の集落の最奥部に位置する。検出された遺構は溝2、土塁1、ピット1である。

**溝** 検出された2条の溝は調査区北西部で合流する。SD01は最大幅4.25m、深さ0.8mで、断面「V」字状の溝である。SD02は幅1.2m、深さ0.3mで、断面「U」字状の溝であるが、その存続期間は短い。

**土塁** 調査区北端で検出されたSK01は、4m×2.2m深さ0.2mの不定形土塁である。

**出土遺物** SD01は縄文陶器塊（fig. 44）をはじめ、10世紀代を中心とする須恵器・土師器類が出土した。またSK01からは、台付長頸瓶・甕などの須恵器と、鉢などの土師器類が一括投棄された状況で出土している。

**3.まとめ** 今年度の発掘調査によって、小寺遺跡が古墳時代後期から平安時代まで存続する遺跡であることが明らかとなった。特に西神地域における縄文陶器の出土例は、明石郡衙跡と考えられる玉津町古田南遺跡のみで、この小寺遺跡の優越性を表わしている。伊川流域は太山寺を経由地とする古代山陽道の候補ルートであり、この遺跡の存在が注目される。

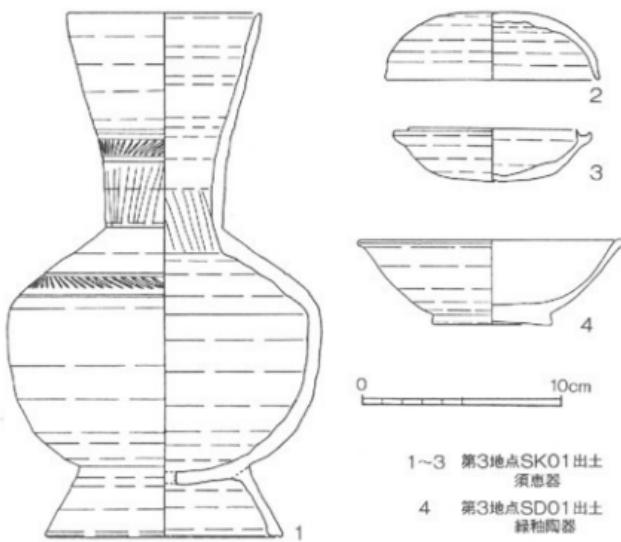


fig. 44  
出土遺物  
実測図

1~3 第3地点SK01出土  
須恵器  
4 第3地点SD01出土  
綠釉陶器

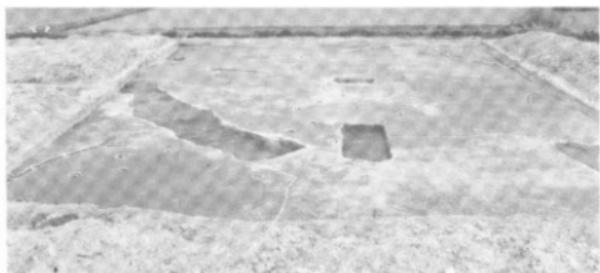


fig. 45  
第1地点遠景

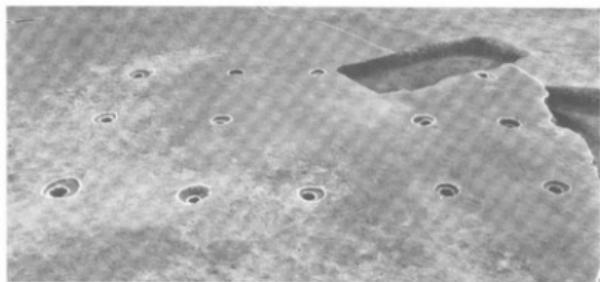


fig. 46  
第1地点据立柱建物SB01

## 7. 頭高山遺跡

1. はじめに 頭高山遺跡は、明石川の支流である伊川の中流域左岸に位置している。伊川によって形成された平野部に臨む標高117mを頂部とする洪積丘陵上に立地している。

昭和53年に研究学園都市建設予定地内の遺跡確認調査を実施した結果、弥生時代の遺跡の存在が明らかになった。その後の試掘調査で頭高山の頂部とそこから派生する尾根のほぼ全体に弥生時代中期の広大な集落址が確認された。遺跡は、標高90～115mの間に存在しており、尾根上及び斜面に遺構を形成している。今回の調査は、昭和57年末より遺跡の南東部分にあたる尾根の約7000m<sup>2</sup>を対象に実施した。

2. 調査概要 調査地は、頭高山遺跡のなかで平野部側から最も奥に位置する尾根である。尾根上には、幅10m程の平坦面がのびており、東、南、西の各斜面の傾斜はきつく、30度の斜度を測る所も少なくない。

a. 検出遺構 今年度調査対象地の西及び南斜面からは、弥生時代中期の竪穴住居址10棟、段状遺構1か所、土塙9か所、ピット4か所が検出された。

竪穴住居址 竪穴住居址は、尾根上の平坦面に存在せず斜面に営まれている。傾斜面にあるため残存状態は悪く、住居址と断定し難いものもある。住居址のほとんどは、平面形が半月状を呈している。このことから、住居址は等高線に沿って地山を掘り込み、掘り出した土を斜面下に盛土し平坦面をつくり出して建築したものと推定している。住居址の残存状況は地山を掘り込んだ部分が検出され、斜面側は流失している。住居址は構造からみれば、半竪穴半平地式の形をとっているものと考えられる。

1号住居址 1号住居址は、長径6.2m、残存短径3.8m（推定5m）の規模で楕円形を呈している。周溝は、南北辺に分かれて設けられ、幅約25cm、深さ5cmのU字状のもので、炭化物を含む土が堆積していた。検出された柱穴から4本柱であったと推定される。

2号住居址 2号住居址は、残存状態が悪く、規模については不明である。床面中央付近に炭の入った焼土塙があり炉と考えられる。

3号住居址 3号住居址は、直径6.2m、残存短径1.5mである。ピットが床面で2か所検出された。

4号住居址 4号住居址は、長径8.3m、残存短径3.5m（推定6.5m）で6本柱と推定される。中央の土塙から上方の周溝に向かって溝のがび、住居址を二分するかたちで周溝と一体になっている。中央土塙とこの溝からは、かなり多量の炭化物が

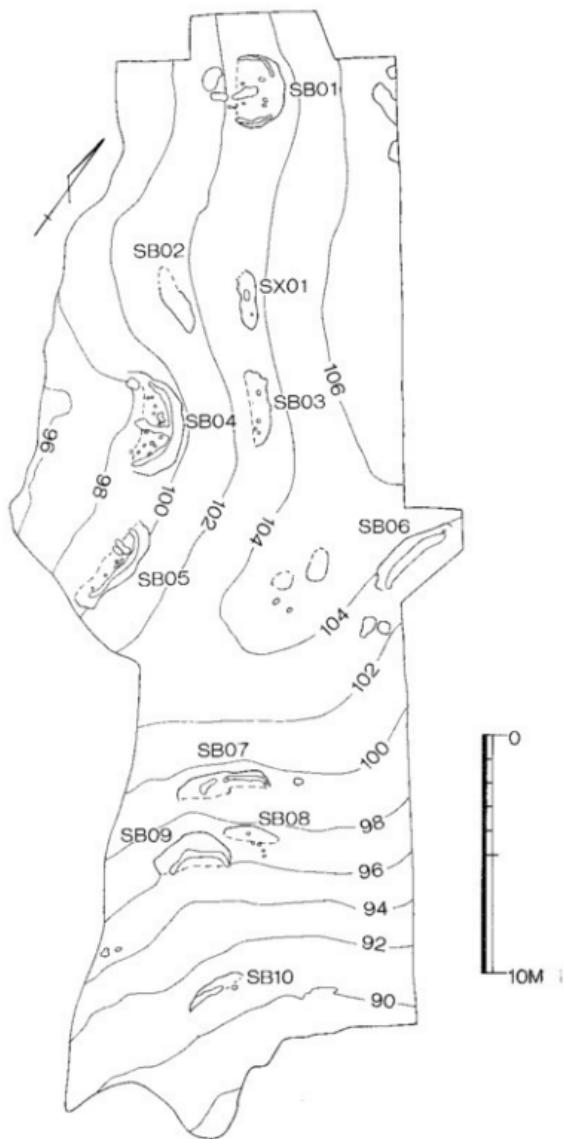


fig. 47 調査区全図



fig. 48  
南斜面遠景（東から）



fig. 49  
竪穴住居址 1（北から）

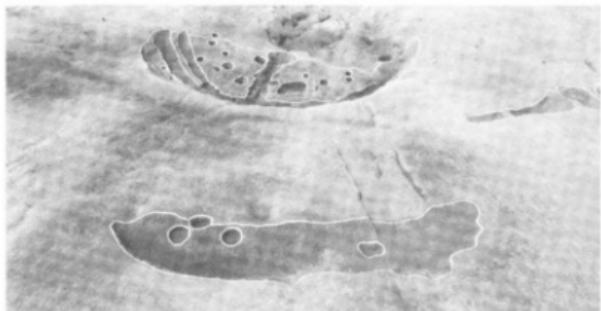


fig. 50  
竪穴住居址 4（東から）

混入した土の堆積がみられた。この住居址の斜面上方の壁に杭状のくぼみが數か所直立して検出された。その内部には炭化物が堆積しており、何らかの建築部材の痕跡ではないかと判断される。

**5号住居址** 5号住居址は、残存長8.5m、幅7.6mで、柱穴が4本直列に検出された。このことから、長楕円形若しくは隅円長方形の住居址であったと考えられる。

**6号住居址** 6号住居址は、南斜面に位置し、残存部2×8mである。残存状態は悪く、大半は流失したようである。床面から2か所柱穴が検出された。

**7号～10号住居址** 7号住居址から10号住居址は、南斜面に築かれている。この斜面は傾斜がきつく、住居址の残存状態は悪い。8号住居址と10号住居址については、住居址でない可能性もある。7号、9号住居址は、周壁溝を設けている。

**段状造構** 住居址とほぼ同様の形で、等高線に沿って斜面を掘り込んだ断面L字状の造構が検出された。1号段状造構は、長さ約5m、幅1.5mである。3号、8号住居址も、あるいは段状造構とすべきものかもしれない。段状造構の性格については不明である。

**土 塚** 尾根上平坦面若しくは稜線上からは、土塚が検出された。これらのほとんどに焼土や炭化物が見られ、土器片などの遺物も少量であるが出土した。土塚内壁の焼け具合もさほどではなく、長期かつ高温で使用したものと考えられる。

**b. 出土遺物** 遺物は、造構や流土中から多くの弥生土器と石器類が出土した。土器のはほとんどは、弥生時代中期後半のもので、壺・甕・高环・器台などさまざまな器種がみられる。石器類は、打製の石鎌・石錐・磨製石剣・石斧、砥石が出土している。磨製石剣は、南斜面の包含層より出土し、茎部が欠損しているが、残存長15.5cm、最大幅3.2cmで基部付近に孔を2つ穿っている。

本遺跡周辺での磨製石剣の出土地は、青谷遺跡、池上口ノ池遺跡、新方遺跡、養田中の池遺跡が知られている。

**3. おわりに** 昭和58年度に調査継続中で、今回は中間報告として調査地の約半分にみたない約3,000m<sup>2</sup>の部分について、現在までに検出された遺構の概略を記した。このため、調査成果の詳細については、調査の終了および出土遺物の整理を待ってあらためて報告したい。



fig. 51 東斜面遠景

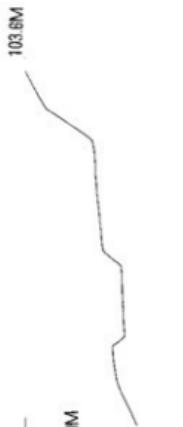


fig. 52 1号住居址実測図

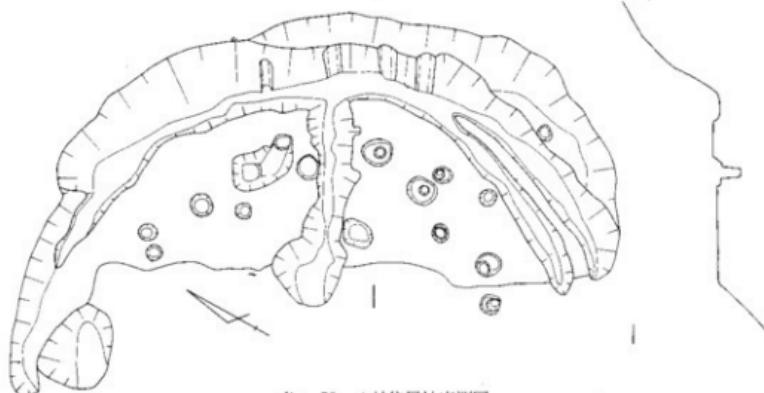


fig. 53 4号住居址実測図

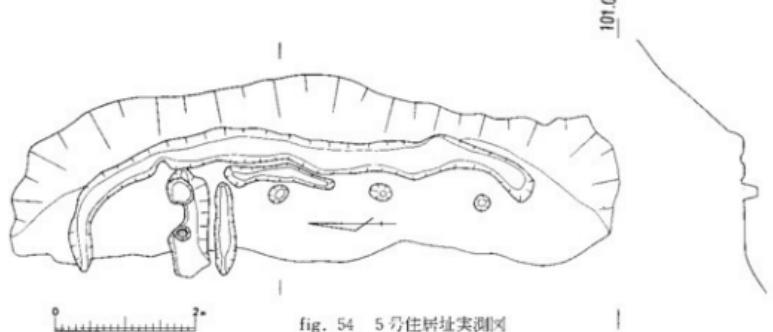


fig. 54 5号住居址実測図

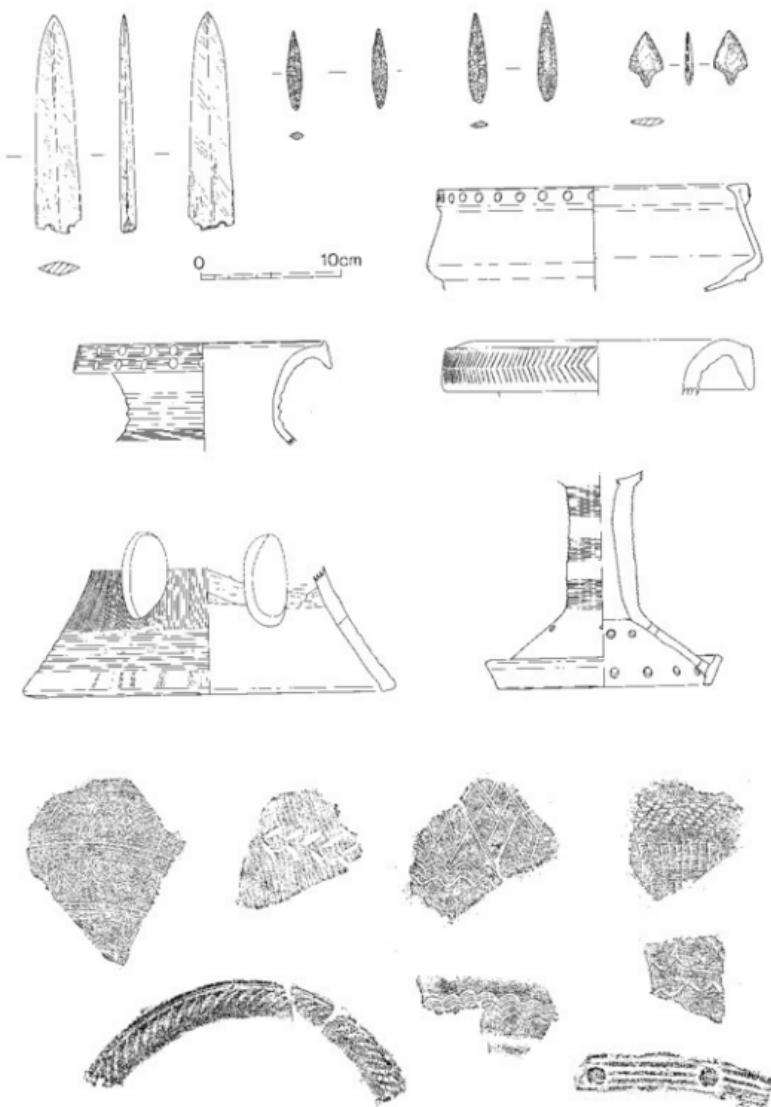


fig. 55 出土遺物実測図・拓影(包含層出土)

## いすみ 8. 居住遺跡

1. 環 境 居住遺跡は、明石川が下流域に入り、緩やかに蛇行を始める左岸の河岸段丘下位面に位置する。

周辺の遺跡として、西方の丘陵上に中村古墳群、西北の河岸段丘下位面に玉津田中遺跡、北方には、西戸田、常本、黒田遺跡等がある。東北方向の丘陵上には、居住・小山遺跡、また東南から西南にかけて高津橋岡・今津・吉田・吉田南の各遺跡と王塚古墳等の存在が知られている。

2. 基本層序 基本層序は、上から現代盛土層・旧耕土・遺物包含層（I～III層）・自然流路内堆積土（IV層）・地山となる。地形が北から南へ下がる傾斜地であるため、遺物包含層以下の層は、北に薄く南に厚く堆積している。

I層は、弥生土器・古墳時代から中世にかけての土師器・須恵器を含む層である。遺物の磨減状態から流れ堆積と思われる。

II層は、I層よりやや古い中世の土師器・須恵器が下限となる遺物包含層である。I・II層とも削除後、それぞれの面での構造検出作業を行ったが、試掘時に予想された中世の遺構は検出されなかった。

III層は、古墳時代の土師器・須恵器が出土する層である。III層は、調査区北辺ではほとんど存在せず、南に厚い堆積層である。III層を削除すると、北西隅よりピット群、東側には、北から南へ走る自然流路が検出された。

IV層（自然流路内堆積層）は、大きく2層に分かれ、上層は10cm大の礫を含

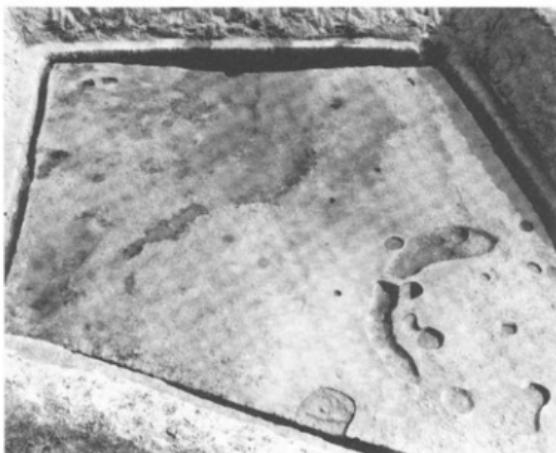
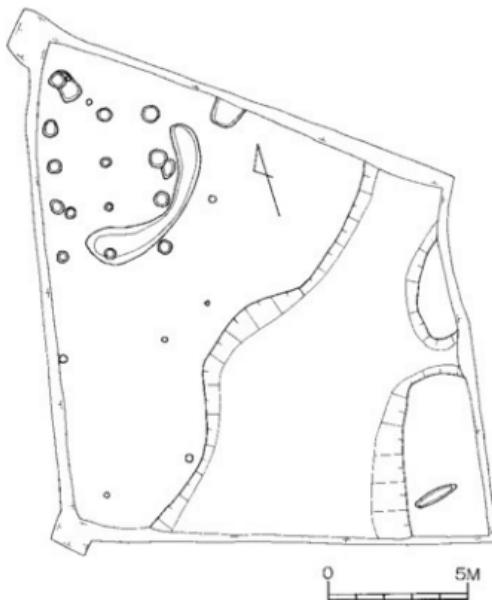


fig. 56 調査区全景（北から）

fig. 57

調査区平面図



む黒褐色の泥砂層、下層は同色の粘質砂泥層となる。大半の遺物は、この2層の間で出土した。

**3. 出土遺物** I層からは、弥生土器・土師器・須恵器・青磁・白磁・鉄鎌・石製紡錘車・サヌカイト片等が出土した。鉄鎌（4）は、「雁股」と称される類であろうか。調査区北東部で出土した滑石製紡錘車（5）は、端部が一部欠損しているが、2段の鋸歯文をもつ。

II層出土遺物は、量的に古墳時代後期の遺物が大半を占めている。ミニチュアの須恵器（7）は、成形技法から古墳時代のものと考えられる。他に、綠釉陶器片・瓦・弥生土器・鉄鎌・鉄釘・叩き石等が出土した。

III層は、6世紀初頭から中葉頃の遺物包含層である。古い型式に属する須恵器と土師器（11～19、21、22、26）・ミニチュアの土師器（8～9）・製塙土器・弥生土器が出土した。

IV層からは、いわゆるTK208型式に属する須恵器（23～25、27）やそれに伴う土師器（20）・ミニチュア土器・サヌカイト片・弥生土器等が出土した。

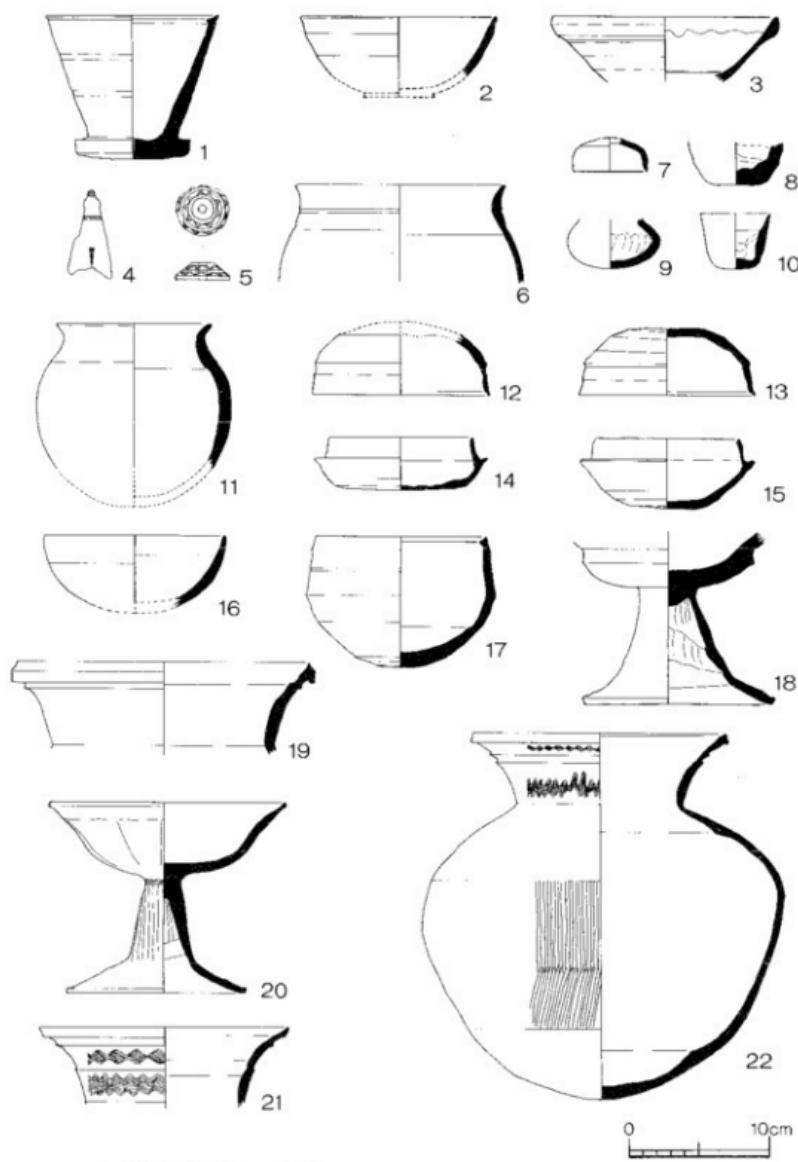


fig. 58 出土遺物実測図 (1~5 I層、 6~7 II層、 8~9.21.22 III層、 20 IV層)

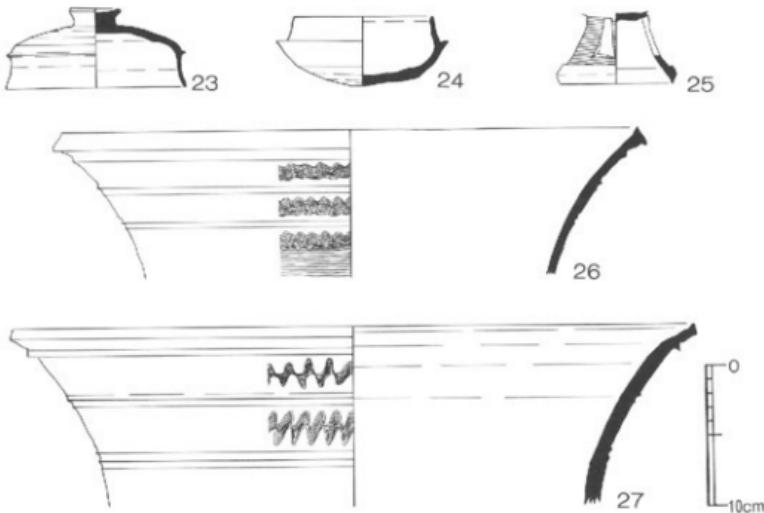


fig. 59 出土遺物実測図 (23~25.27 IV層、 26 III層)

**4. 遺構** 遺構は、幅約6m、深さ0.2~0.5mの自然流路と、南北棟総柱建物(2×3間、東西柱間1.8m・南北柱間1.6m)1棟、その他に浅い土塙2基・弧状の溝(幅0.7m、深さ0.2m)1条とピット數か所が検出された。

自然流路内からは、5世紀末葉から6世紀前半にかけての多量の土師器・須恵器が出土した。出土状況から廃棄物の堆積と見られる。建物その他の遺構は、この流路の埋没時とほぼ併行し、III層の堆積(6世紀半ば以降)が始まると頃まで存続していたようである。

**5. まとめ** 基本層序でも述べたが、I・II層の堆積層は、中世頃の洪水の所産である。上流の中世遺跡の同時期の存続状況を考察する一助となる資料を呈示している。

またTK208型式の須恵器とミニチュア土器の出土は、この付近で祭祀が行われていたことを物語っている。

玉津田中遺跡では、当報告と同時期と考えられる自然流路が検出されている。  
(兵庫県教育委員会「玉津田中遺跡調査概報」1984)



fig. 60 拔立柱建物(北から)

## いすみ こやま 9. 居住・小山遺跡

1. 調査経過 居住・小山遺跡は、昭和56年11月に居住・小山住宅街区整備事業に伴う試掘調査を実施するまでその存在すら知られていなかった。

試掘調査は事業区域全体に実施したが、包含層もしくは遺構が認められたのはA地区(3,500m<sup>2</sup>)、B地区(2,400m<sup>2</sup>)であった。この両地区を昭和57年11月から昭和58年4月に全面調査を実施した。

2. 立地と環境 当遺跡は標高34~36mで、平野部との比高が約16mの高位段丘に立地している。この高位段丘面は、2つの小浸蝕谷に区切られながらも平野町下村まで続く。その規模は東西約300m、南北約1,000mに拡がる。

この段丘の西側に接する平野部には、玉津出中遺跡、居住遺跡が広がっている。両者は、弥生時代前期から鎌倉時代に至るまで集落が存続している。さらに、古墳時代前期に形成され以後継続する出合遺跡は対岸の平野部に立地し、当遺跡とほぼ同一の標高、比高にある高位段丘面にまで広がっている。

この高位段丘面のA地区北方約200mの平野町慶明には、横穴式石室1基が露出している。そして東側丘陵上の花丘共同墓地内には木棺を直葬する古墳約10基が存在している。両者を含めて現在は、慶明寺古墳群と呼んでいる。この古墳群は、横穴式石室と木棺直葬が混在している。これが時間的な埋葬施設の推移を示すものか、または造墓主体の階層性を示すものかは、詳細な時期判断ができないために不明である。またB地区に接する西側の地区には「金尾塚」という小字名が残っており、地元には「塚」があったという伝承がある。しかし試掘の結果では、それを確認することができなかった。

B地区的南東50mに普光山日輪寺がある。この寺は『群書類従』によれば平安時代に行基によって建立され、当初は現在地より北方の丘陵にあったことが窺える。その位置は定かではないが、現在の慶明寺からB地区に接する丘陵の間と推定される。三好一族の攻撃を受ける中世末期(天文年間)にはおそらく現在の位置に存在していたであろう。

3. 調査概要 両地区とも開墾によって包含層が削平されているため、ほとんどが耕土直下で遺構面が検出された。遺構面の土層は、黄色系粘土層またはその下部の硬質の赤褐色系砂礫層である。赤褐色系砂礫層は2~3m堆積しており、その下部には厚さ3~5mの大坂層群が堆積している。

A地区 調査区内に3か所の直径約5mの竪穴が空たれているが、これは水田耕作の灌漑用の水溜である。他に井戸1基もあるが、いずれも近現代のものである。

遺構としては、弥生時代中期中頃の竪穴住居址1棟、土塙3基、鎌倉時代の



fig. 61  
調査地区  
位置図

掘立柱建物 4 棟、区画溝 1 条、土塙 12 基、土塙墓 5 基、ピット多数が検出されている。

(単位 cm)

掘立柱建物

四 数	規 模	柱 間 隔				柱 穴			方 位	備 考
		南北	北	東	西	横 方	柱 頭	深 さ		
S B01	3 × 4 間 (南北 × 東西) (南北 × 東西)	720 × 730 (950)	170~210	210~280	20~60	15~20	50	N60°W	柱穴の底面に軒平瓦。柱擁方に土塙 塗付跡、縁石にちりばめ。	
S B02	2 × 3 間	430 × 680	190~240	190~270	30~50	15	20~30	N70°W	柱擁方に土上部瓦塗跡。縁柱	
S B03	3 × 2 間	690 × 400	230	190, 202	20~25	10	10~15	N35°W	柱穴の底面に、こぶし大の円礫。 南に 1 階の張り出しが縁柱。	
S B04	3 × 3 間	600 × 650	200	210~220	26~50	15	15~20	N60°W	縁柱	

S B01は、東西 5 間になる可能性があるが断定し難い。北辺の西から 3 番目と 4 番目の柱掘方には、土師器皿の完形品が埋め込まれていた。地鎮に関するものと考えられる。さらに東西 5 間とした場合に、東側 2 列の柱穴は他のものよりも少し小さくなっている。この 2 点から建物本体は、東西 3 間、南北 4 間と考えられ、東側 2 列は軒や墀に関するものと考えられる。

この建物のみ柱掘方に瓦類が埋められていること、さらにこの柱掘方の一部を切り込んでいる土塙から瓦類が出土していることなどから、この建物は瓦葺きであった可能性が高い。しかし柱間が広い点と瓦の出土量から見て総瓦葺きとは考えられず、ごく一部に瓦が使われていた程度であろう。

S B02の北東コーナーの柱掘方にも上師器皿 1 点が S B01 同様に埋め込まれていた。一部の柱掘方には、こぶし大の円礫が埋め込まれて柱根を固めている。南側に 1 × 1 間の張り出しがあり、その部分に浅いくぼみ程度の土塙が認められる。これは縁石のようなものの掘方か断定し難い。

竪穴住居址 S B05 は直径約 7 m を測り、周壁溝をめぐらすが、東西で一部切れている。

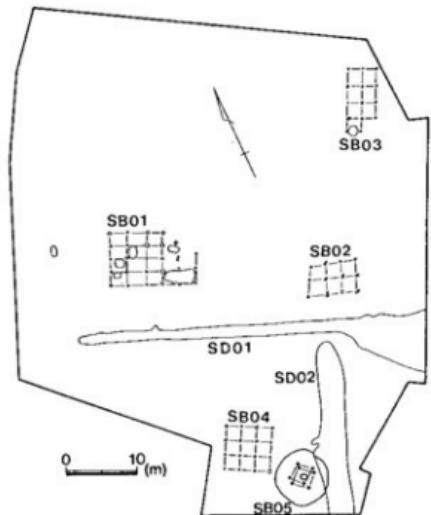


fig. 62 A地区平面図

主柱は4本で他に小さなビットが穿たれている。一部南東方向に約1mの拡張を行っており、主柱も併せて移動している。中央の土塙には炭化層と灰層が混在している。埋土洗浄によってサヌカイト製石鐵・石錘・多量のフレイク・チップや菅玉、貝殻が検出された。

**土塙** S X01は、S B01の柱掘方を切り込んでいる。かろうじて柱痕は切り込んでいないので、両者が同時存在であったことも否定はできない。埋土には平瓦、丸瓦、羽釜、龍泉窯産青磁碗などと礫が出土している。壁面はゆるやかで、プラン内側にそって、直径5~10cmの小ビットがまわっている。出土遺物から13世紀前半の土塙と考えられる。

**土塙墓** 5基の土塙墓が検出されている。

いずれも床面は平坦で壁は垂直に立ち上る。規模は様々であるが、概ね長さ110~150cm、幅80~110cm、深さ30~50cmである。S T01からは3枚の古銭と2枚の小皿が出土している。時期は13世紀前半に属する。

**溝** S D01はS B01とS B02に並行して東西に走る。溝底は東側に傾斜している。埋土から土師器・須恵器が集中的に出土している。

**遺物** 弥生時代出土遺物は、中期中頃にはほぼ限定されている。遺物の大半は竪穴式住居址から出土しているが、この周辺の土塙墓からも若干出土している。その中には蛇紋岩製大型石庵丁と石庵丁が含まれている。この大型石庵丁の類例は現在まで知られていない。使用による磨滅が著しいが、使用目的等は不明である。

**小結** 弥生時代の遺構は調査区南半のみで認められ、集落がさらに南側へ拡がっているものと考えられる。時間的には短い期間に営まれた集落である。

鎌倉時代に入って再びこの台地が開発され集落が形成される。S D01以北のL字形に配置されたS B01、02、03が1つの建物群と考えられる。S B01が母屋、S B03が倉庫、S B01の北側の空間が作業場としての機能をもっていたであろうと推定される。

土塙墓と建物群の関係は、出土遺物が同時期であり、両者の位置関係も対応していることから、この区画で生活を営む人々の墓であったと考えられる。

B地区 古墳時代の遺構としては、円墳2基、土器棺墓1基、土塙4基、木棺墓1基、ピット9個が検出された。また調査区西側に接して2条の土塙状遺構が南北方向に伸びている。そしてその延長上に通称七ツ池と呼ばれる灌漑溜池が続いている。

(単位: cm)

古 墳	形 形	規 模	周 墓				備 考
			幅	深さ	礫 群	古 墓 + 墓	
1号墳	方墳	1辯 600 300	20	北辺の 東半部			
2号墳	円墳	径 950 100~200 15~25	東半部				南側の縁に広い100×50cm の範囲に火をいたい跡跡
3号墳	方墳	南北 700 東西 750 100~200 20~25	東南部				跡01 山東部須恵器短頸壺 跡02 須恵器环身・蓋 各1
4号墳	方墳	南北 1,000 東西 800 200~300 20~24	北半及び 西南隅				跡03 須恵器短頸壺4点 跡04 須恵器环身・蓋各1点 跡05 須恵器环身・蓋各1

周 淹 周濠の埋土は大きく2層に分かれ、上層の埋土中には礫群、古墳時代須恵器細片、鎌倉時代須恵器、土師器が、下層には古墳時代須恵器が含まれている。上層の礫群は、墳丘削平時に埋葬施設に用いられていたものが周濠内に落ち込んだものと推定される。2号墳と3号墳の周濠は連結している。

各墳丘には横穴式石室の掘方の痕跡は認められることから、これらの古墳の埋葬施設は木棺直葬であったことが窺える。そして周濠の礫群はこの木棺の掘方の裏込めに使用されていたと推定される。

供獻土器 1号墳を除く各古墳の周濠から供獻された土器群が検出されている。しかしその供獻状況は様々である。2号墳は濠底より少し上位に蓋壺がセットで出土している。他に細片化した須恵器甕と焼土を含む浅い土塙がある。3号墳の土器群03、04は墳丘裾部に整然と置かれていた。03では須恵器短頸壺に蓋壺2点で蓋をしている。04は東西35cm南北40cmの範囲に須恵器・土師器が整然と並べられている。4号墳の南辺では須恵器環身・身各1点がほぼ濠底に接して出土している。5号墳では濠底に東西80cm南北70cm深さ15cmの土塙が穿たれ、有蓋高壺6セットが埋置されていた。

1号墳の西側約5mのところでは、口縁部を打ち欠いた須恵器の甕が横にして埋置されていた。埋土からはガラス小玉1点が出土している。

4号墳西側約6mのところでは、直径約40cmの土塙があり、須恵器環身・蓋各2点が埋置されていた。

4号墳北辺の周濠外側の肩部付近に、東西1.8m南北0.6m深さ0.2mの掘方をもつ木棺墓1基が検出されている。棺の大きさは東西1.5m南北0.4m深さ0.

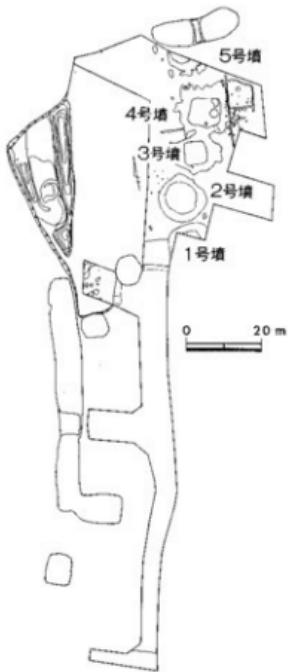


fig. 63 B地区トレンチ平面図

15mを測り西端に須恵器壺・坏が出土している。

平安時代後半に属する土塙1基を1号墳東側で検出した。埋土から須恵器壺1点が出土している。

鎌倉時代に属するピット多数、土塙を調査区北東部のみで検出した。多くのピットを検出したが、明確な建物は復原できない。土塙からは土師器羽釜・壇須恵器片口鉢・甕、白磁など13世紀代の遺物が出土している。

先述した土塙についても調査を実施したが、二条とも盛土によって築かれている。遺物は断割り部から陶器1点が出土したのみである。この土塙が防御施設としての土塙とすれば、天文年間に日輪寺が三好一族により攻撃を受け焼失した際の日輪寺側の防御施設であった可能性がある。

小 結 平坦な水田に、削平された古墳5基を検出したが、これは東側丘陵に拡がる慶明寺古墳群の一支群であると考えられる。この支群を小山支群と呼ぶ。この支群は周濠上層及び削平面の遺物から13世紀に削平された事がわかる。この地域が耕作地化されたのはこれ以降と考えられる。

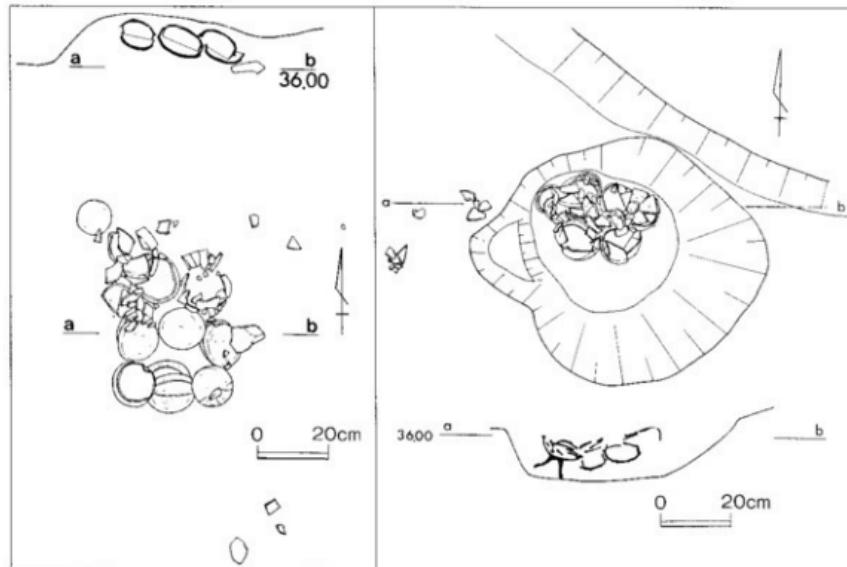


fig. 64 3号墳土器群出土状況

fig. 65 5号墳土器群出土状況

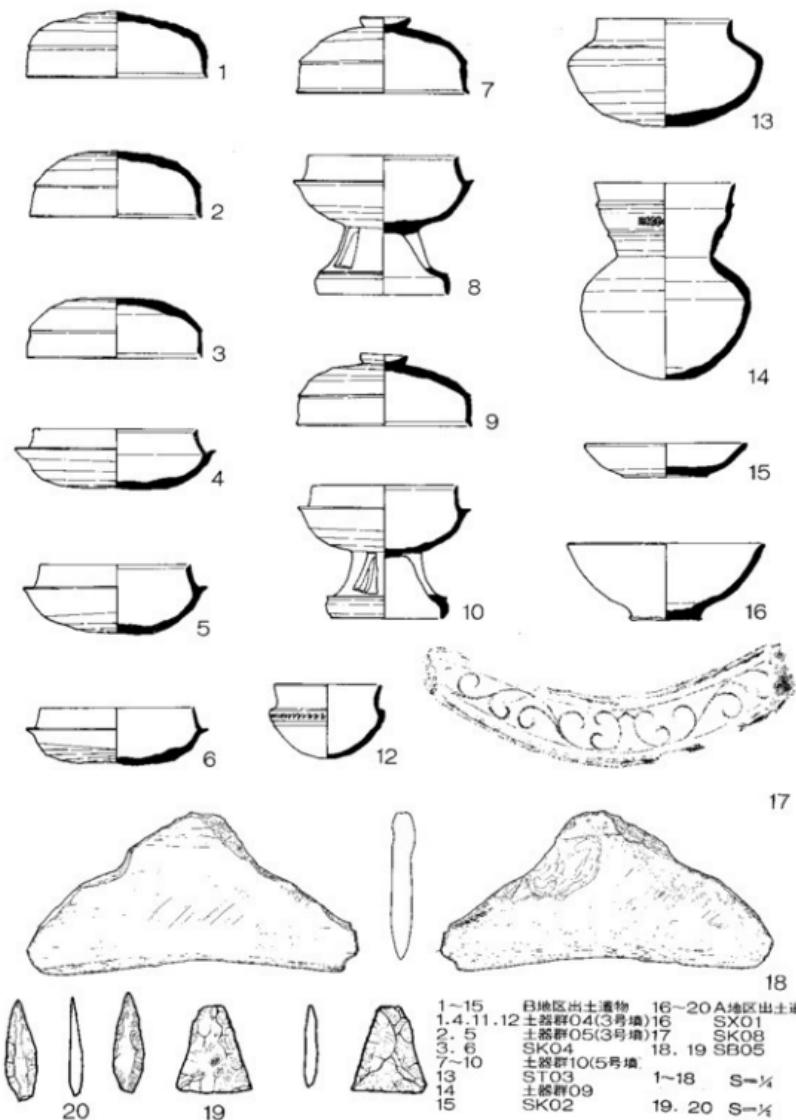
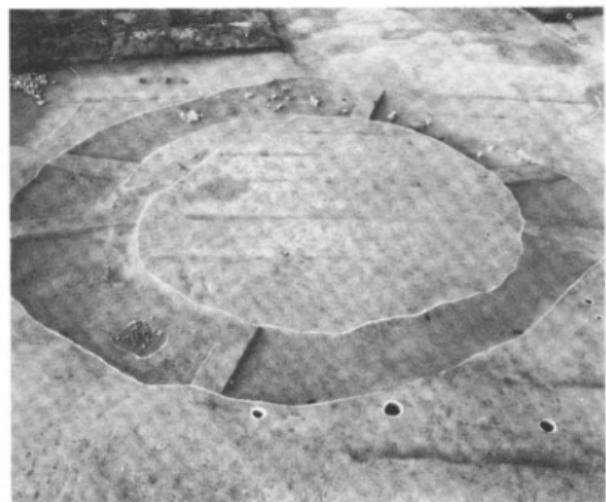


fig. 66 出土遺物実測図

fig. 67  
A地区 S X01



fig. 68  
B地区 2号壤



いまづ いせき  
10. 今津遺跡

**1. 調査経過** 従来、明石川と櫛谷川の合流地点から東約 700 m に位置する南北に伸びる丘陵上の遺物散布地を今津遺跡と呼んでおり、弥生時代後期が主体の遺跡である。

近年の発掘調査によってこの丘陵上に高津橋岡遺跡が発見され、弥生時代後期の住居址等の遺構が検出され、丘陵上に点在する後期の遺跡の一端と考えられた。また一方この丘陵と明石川との間の沖積地にも発掘調査が実施され、弥生時代前期から中期に至る遺物・遺構が検出された。現在は、この沖積地に広がる遺跡を今津遺跡と呼んでいる。

先述の沖積地の発掘調査は昭和55年に実施された。これを第1次調査と呼ぶ。第1次調査では、弥生時代中期の竪穴住居址3棟、土塙墓1基、土塙、ピットが検出されている。遺物は、前期から中期に至る土器と打製・磨製の石庵丁・サヌカイト片が出土している。

今回実施した第2次調査地点は、第1次調査地点より西へ10mのところに位置する。前回と同じく民間宅地造成に伴う事前調査である。2本のトレーニチを道路予定地（幅5m 長さ30m）に対して設定し、南側を第1トレーニチ、北側を第2トレーニチと呼んでいる。

**2. 周辺の環境** 当遺跡は明石平野の北辺に位置しているが、この平野及び流域では近年急速に宅地開発が進み従来の村落景観が破壊されつつある。この動きに伴い埋蔵文化財に関する調査も増加している。この結果、多くの弥生時代の遺跡の存在が確認されつつある。弥生時代前期の遺構が確認されているのは、中位段丘上では、吉田遺跡、平野部では玉津田中遺跡、西戸田遺跡、常本遺跡、新方遺跡



fig. 69  
トレーニチ  
配置図

今津遺跡である。中期後半には、明石川水系の西神50地点遺跡や伊川水系の頭高山遺跡など丘陵上に集落が営まれる。一方平野部の集落も存続している。後期には再編成され、吉田南遺跡・高津橋岡遺跡・池上北遺跡などが出現している。古墳時代にはいると摸点化が進み、吉田南遺跡・出合遺跡・玉津田中遺跡など王塚古墳群を生みだしたであろう集落が存在している。

### 3. 調査概要 第1遺構面では木棺墓1基、土塙6基、溝1条、大溝1条、ピット多数、不

第1トレンチ 明遺構2基を検出した。大溝は5世紀後半から6世紀前半に属し、他は弥生時代中期に属する。いずれの遺構も内包する遺物は少ない。不明遺構は、その大半が調査区外へ伸びており、また柱穴や周壁溝を確認できなかったために竪穴住居址の一部と推定されるものと断定し難い。

S T 01 幅1.6m、長さ1.5m以上の長楕円形の掘方で、幅60cm、長さ70cm以上の木棺の痕跡がある。木棺部の深さは約25cm、掘方の深さは40cmである。

S D 01 幅約2.2m、深さ約1mの南北方向の溝。深さ80cm近くで段を成し、その下層には砂礫が堆積している。

S D 02 (大溝) 東側の肩は調査区外へ伸びているため幅は不明であるが、約8mを検出している。一段深くなる部分では、砂礫層が堆積しており、層中からはクイ状木製品、流木、植物遺体が多数出土している。上層は黒灰色系の砂泥が堆積している。弥生時代中期前半から後期にかけての土器が、溝の肩部付近から集中的に出土している。

第2遺構面では土塙墓1基、土塙13基、竪穴式住居址1棟、ピットを検出した。これらの遺構は弥生時代中期中頃に属する。

S T 02 SK 12を切り込んで形成されている。長さ2.1m、幅80~120cm、深さ60cmを測り、木棺痕跡や小口孔は認められない。底は平坦で、壁は垂直に近い立ち上りを呈している。

S K 11 長さ3m、幅1m、深さ40cmを測る。S T 02とほぼ同時期の遺物が大量に出土している。

S K 12 南端は調査区外に伸びているため規模は不明。深さは約30cmを測る。埋土上層からは、S T 02とほぼ同時期の遺物が出土するが、下層にはそれよりも少し古相の土器が出土している。

S B 01 推定直径約5mの円形竪穴住居址である。床面までの深さは約20cm、浅い周壁溝が存在する。プラン上面には多量の土器群が検出された。住居址埋没時に土器を投げこんだものと推定される。SK 11とほぼ同時期である。

第2トレンチ 第1遺構面では、土塙2基と第1トレンチから続く大溝1条を検出した。

S K 01 6世紀代の須恵器小片を含む不整形土塙である。

S K 02 調査区南側へ伸びているため規模は不明である。確認した規模は長さ

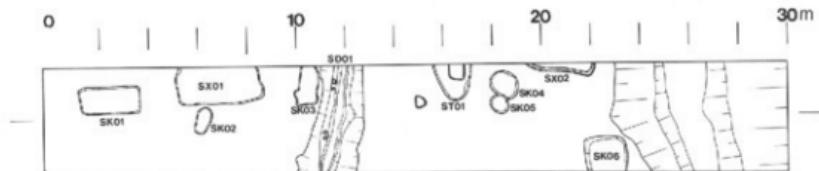


fig. 70 第1トレンチ第1遺構面 平面図

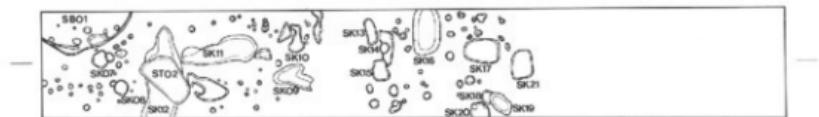


fig. 71 第1トレンチ第2造構面 平面図

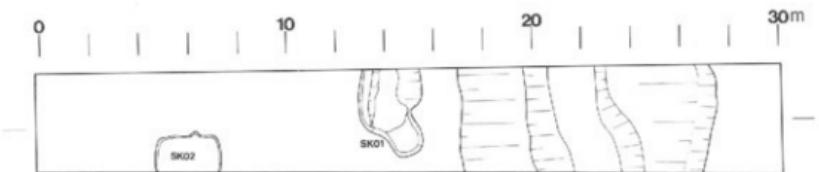


fig. 72 第2トレンチ第1造構面 平面図

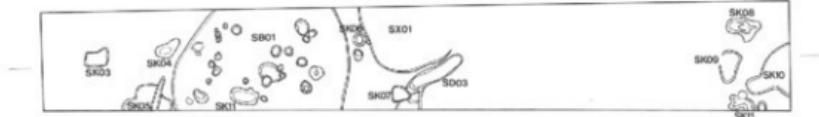


fig. 73 第2トレンチ第2造構面 平面図



fig. 74 第1トレンチ全景

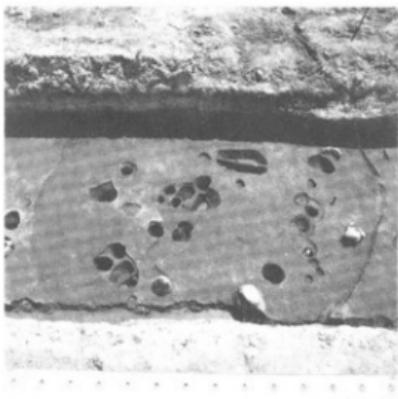


fig. 75 第2トレンチSB01全景

2.8m、幅1.5mの椭円形で、深さは約20cm、断面はゆるやかなすり鉢状を呈する。埋土には、粉碎された完形品を含む土器群と5~10cm大の円礫群が含まれている。土器群の約6割は高壺と器台によって占められる。

**S D 02** 埋土の状態は第1トレンチの状況と同一である。溝底からは、15世紀後半の土師器大壺と弥生時代第Ⅱ様式の壺の完形品が接した状態で出土している。

第2遺構面では、土塙11基、ピット、竪穴式住居址1棟、土器棺1基、不明遺構1基を検出した。各遺構の時期は、弥生時代中期中頃から後半にほぼ相当する。

**S K 06** 直径約60cmの円形掘方で2個体の壺を用いて棺としている。壺Aの頸部を打ち欠き、さらに胴部を縦半分に割り、その一方の掘方に横にして埋置し、壺Bの下半部でAの頸部を横から蓋をし、A及びBの他の破片で上面に蓋をしている。埋土からは何ら遺物は出土しなかった。

**S K 08** 西半をS D 02によって切られている。壁面は赤く焼け、底には薄く粘土化した灰が溜り、埋土には火を受けた粘土塊が含まれていた。

**S B 01** 推定直径7mの円形住居址である。遺構面が砂層のためか周壁溝は確認できなかった。プランのほぼ中央に火址と推定される炭と灰の充満した土塙1基を検出した。柱穴と推定されるピットも検出されているが、全体が不明なため対応関係は明瞭ではない。埋土上よりガラス玉1個、埋土中からは扁平片刃石斧1点、磨製石庵丁1点が出土している。時期は弥生時代中期中頃に属する。第1トレンチS B 01と同時に存在していたと考えられる。

**S D 03** 鈍いL字形プランを呈し、東西方向の直線部分のみ深くなっている。深くなっている部分は長さ2m、幅約45cm、深さ50cmを測り、断面形はきついU字形である。この部分から、下半部及び口縁部を打ち欠いた長頸壺、胴部に数か所の打撃穿孔を施した甕が出土している。

4. 出土遺物 出土遺物の内9割以上は土器である。さらにその9割は弥生時代中期中頃から後半にかけてのものである。未だ遺物整理を完了しておらず全体把握は不十分である。土器がまとまって出土しているのは、第1トレンチS K 11、S K 12と第2トレンチS K 12である。第1トレンチS K 12の壺は、装飾性が強く、口縁端を下方に折り曲げ、あるいは拡張し装飾を施している。第1トレンチS K 11は、壺・鉢では凹線文が見られ、広口壺の口縁端部は、上方への拡張を施して凹線B種が施されている。しかしこの両土塙出土の甕の相異は顕著ではない。第2トレンチS K 02出土の甕はいずれも平底の底部を突出させ、大型のものは上半の最大径から底部まで直線的なプロポーションになる。口縁部は、強く「く」の字に曲げ、水平に近くなっている。体部全体に幅の広い右上りのタ

タキを施し、その後ハケ目調整によって器面をととのえている。高坏と器台はいずれもていねいなヘラ磨きによって調整されている。脚部には单孔、1段複数孔、2段複数孔が穿たれ、さらに刺突点や範描沈線文によるシンプルな加飾がみられる。壺は1個体のみで最大径を下半にもち、頸部からゆるやかに最大径に至り、底部を突出させ、頸部に刺突文をめぐらせていている。口縁端は上下に少し拡張、擬凹線2条をめぐらせていている。これらの一括資料の時期については高坏、器台からは中期的な要素がみられるが、壺・甕からは後期的な要素がみられる。いずれにせよ、この接点に近い時期と考えられる。

石製品では、砂岩製石庵丁3点、粘板岩製石庵丁2点、扁平片刃石斧・柱状片刃石斧各1点が出土している。

## 5.まとめ

今回の調査では、第1次調査と同じく弥生時代中期の遺物・遺構が検出され明石川のかなり近くまで遺跡が広がっていることが判った。その様相は、住居と墓が混在しているが、実際に両者の時間差がなかったのか、もしくは領域が意識されていなかったのかは、土器の編年細分作業の進展によって解明されていくと考えられる。

現在知り得るデータからは、遺跡は東西500m、南北1,500mに広がると考えられるが、今後の調査によってさらに拡大する可能性もある。また時期・性格を異なる遺構・遺物の発見も周辺の遺跡の状況から十分に考えられる。

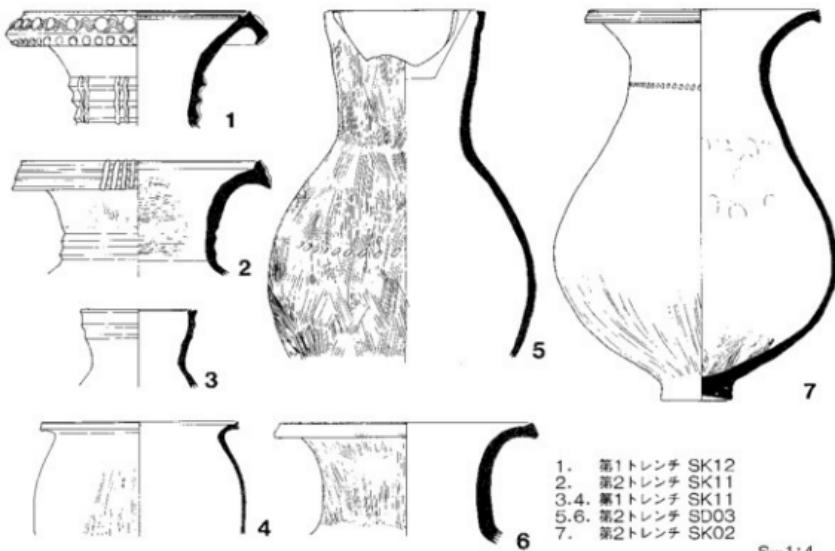


fig. 76 出土遺物実測図

## 11. 新方遺跡（大日地点）

**1. 調査経過** 新方遺跡は昭和45年に始まった山陽新幹線建設に伴う分布調査・試掘調査によって発見された遺跡である。その後、民間による開発に伴って緊急調査が行われる中、昭和52年には国庫補助金を得て遺跡範囲確認調査が実施された。これらの調査結果から、当遺跡は東西約1.5km、南北約1kmに広がり、弥生前期から奈良・平安時代の遺構が存在する複合遺跡であることが判明した。

今回は、倉庫建設に先立ち事前調査（調査面積約330m<sup>2</sup>）を実施したものである。

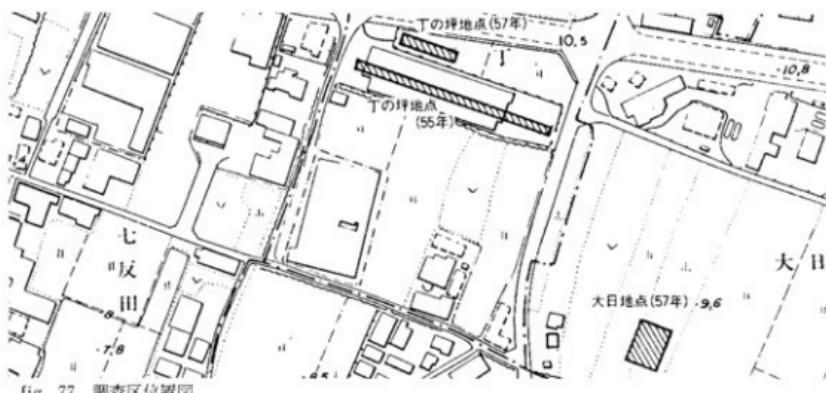
**2. 調査概要** 今回の調査は南北約26m、東西約13mの倉庫予定地を全掘した。遺構は上層より第Ⅰ遺構面（12世紀末）・第Ⅱ遺構面（7～8世紀頃）・第Ⅲ遺構面（5～6世紀頃）・第Ⅳ遺構面（弥生時代中期）の4面が検出された。同一面で一部、時代が重複するところも認められた。また、今回の調査において出土した遺物総量は、整理コンテナ(2.8ℓ)にして約300箱である。

**第Ⅰ遺構面** 当遺構面からは掘立柱建物5棟・溝1条・土塙1基のほか多数の柱穴が検出された。

建物址は2間×2間の1棟を除き、ほかは規模を知りうるものはない。

溝は幅1.2m、深さ0.3mで西方へ地区外に延びる。埋土中からは白磁碗（第2類）須恵器塊・土師器皿などが出土した。

土塙は長径65cm・短径60cmの楕円形のもので深さ約50cmを測る。塙底付近には拳大の円礫とともに土師器羽釜、皿、須恵器片口鉢、塊などが重なり合って出土した。



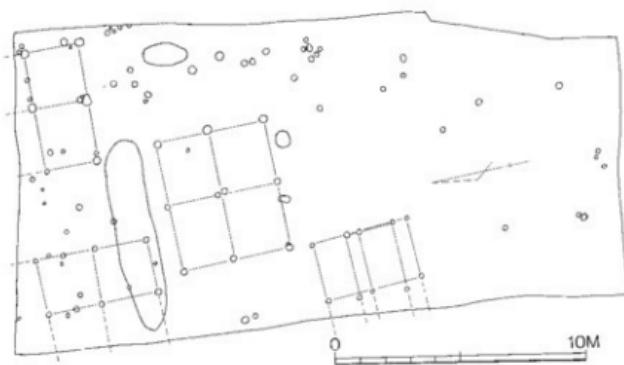


fig. 78 第丁遺構面平面図

**第Ⅲ遺構面** 第Ⅰ遺構面検出中、調査区の南半部において南北約10mにわたって幅80cm・高さ10cmの畦畔状の高まりを検出した。その後、周辺の精査により、これにほぼ直交する同様の高まりも発見した。水田址の可能性もあるが、検出された範囲もせまいため、十分な確証を得るには至らなかった。

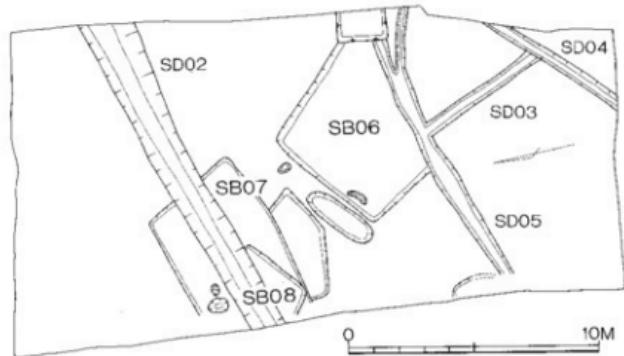


fig. 79 第四遺構面平面図

**第III遺構面** 当遺構面から竪穴住居址4棟・溝4条・土塙3基を検出した。ここでは規模の判明したものについて記述する。

溝2——幅約160cm・深さ約70cmのV字溝で調査区の北側を東西に延びる。埋土中の出土品より、6世紀後半に廃棄されたものと考えられる。

竪穴住居址6——一辺5.2mの方形プランを持つ竪穴住居址である。南北の壁際中央部にはそれぞれ1基の小型土塙が付設され、床面からは4本の柱穴を検出した。埋土中からは須恵器・土師器などの土器類とともに多量の滑石・碧玉・グリーンタフなどの勾玉・管玉・臼玉の未製品・剥片などが出土した。時期は共伴する須恵器より5世紀末頃（TK23期）のものと考えられる。

竪穴住居址7——一辺5.4m深さ1.5mの方形プランからなる竪穴住居址である。周壁溝を持つとともに、南東隅と北西隅に小型土塙が付設される。南東隅の土塙からは土器とともに滑石製臼玉が出土している。時期は住居址6と同じく5世紀末頃のものである。

**第IV遺構面** 当遺構面では、北から南へ向って地山の傾斜が認められ、最南部では地表下約2.5mに弥生時代中期前半の包含層を検出した。遺構は竪穴住居址1棟・溝2条・木棺墓1基のほか、多数の土塙・柱穴を検出している。

溝6——「く」字形に屈曲する大型の溝で幅2.4m・深さ80cmを測る。屈曲部付近は浅く陸橋状となり断面形はU字形である。

溝7——溝6の一部と平行する幅1.6m・深さ60cmのU字溝である。両溝とも溝中埋土内より、完形品を含む多量の土器・石器が出土している。時期は中期

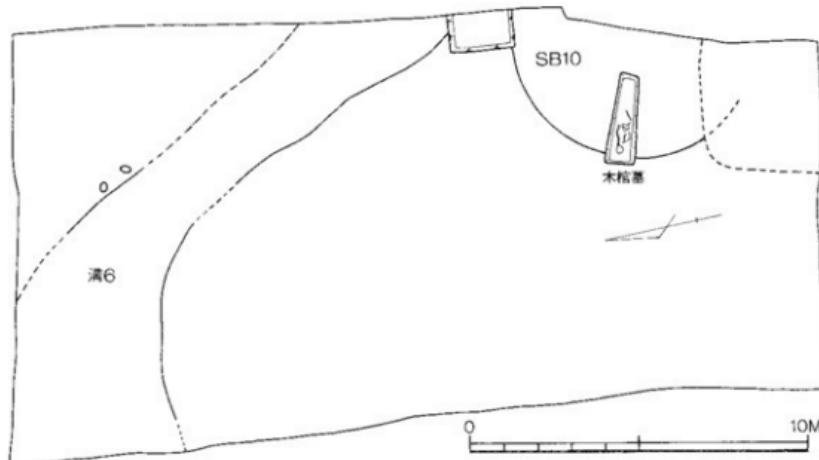


fig. 80 第IV遺構面平面図

中頃（Ⅲ様式古段階）のものである。

竪穴住居址10——直径約8mの円形プランを持つ竪穴住居址で深さ40cmを測る。東半部が調査区外にあるため正確に柱穴数は不明であるが、床面より検出した3本の柱穴より、6本もしくは8本柱の建物と考えられる。床面中央からは直径120cm・深さ60cmの中央土塙を検出した。時期は中央土塙内の土器より中期前半（第Ⅱ様式）と考えられる。

木棺墓——竪穴住居址10の埋没後にその上部に造られている。長さ2.1m・幅0.9mの墓塙中央部に長さ1.7m・幅65cmの木棺を収めている。木棺は痕跡を僅かにとどめる程度であったが棺内には人骨が良好な状態で遺存していた。人骨は正確な鑑定を受けていないので詳細は不明であるが、身長約160cm程度の成人的なものと思われる。時期は中期中頃と推定される。

**3.まとめ** 今回の調査では、弥生時代から鎌倉時代にいたる多数の遺構が多層に重なり多量の遺物を伴って検出された。こうした成果の内、特に留意すべき発見としては、第Ⅲ遺構面（古墳時代後期）で検出された玉造工房址と、その関連遺物である。遺物は石材の種類も多く、勾玉・管玉・臼玉の各段階の未製品が出土しており、その製作工程を知ることができる。また、第Ⅳ遺構面（弥生時代中期）での木棺墓内での人骨の保存状況が示すように、自然遺物が良好に保存されていることが実証された。今後、周辺の調査によって当時の自然環境の復元にも見通しがついたといえる。そして、同時に出土した弥生土器は質・量とともに当地域の基準資料となる内容を持つものである。玉造工房址・人骨などの貴重な発見・多量の遺物の出土は、新方遺跡が明石川流域における拠点的な集落として弥生・古墳時代を通じて存続していたことを示しており、今後の当地域における研究の上に新たな視点を与えるものとなろう。

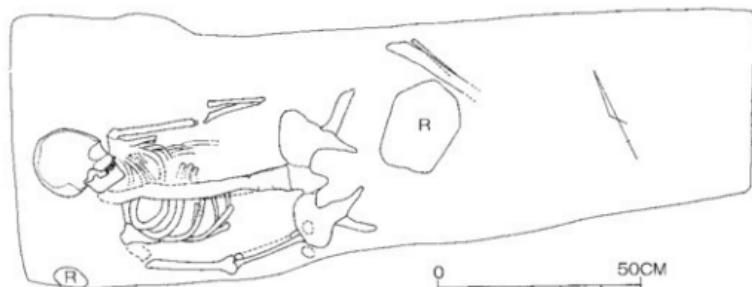


fig. 81 木棺墓平面図

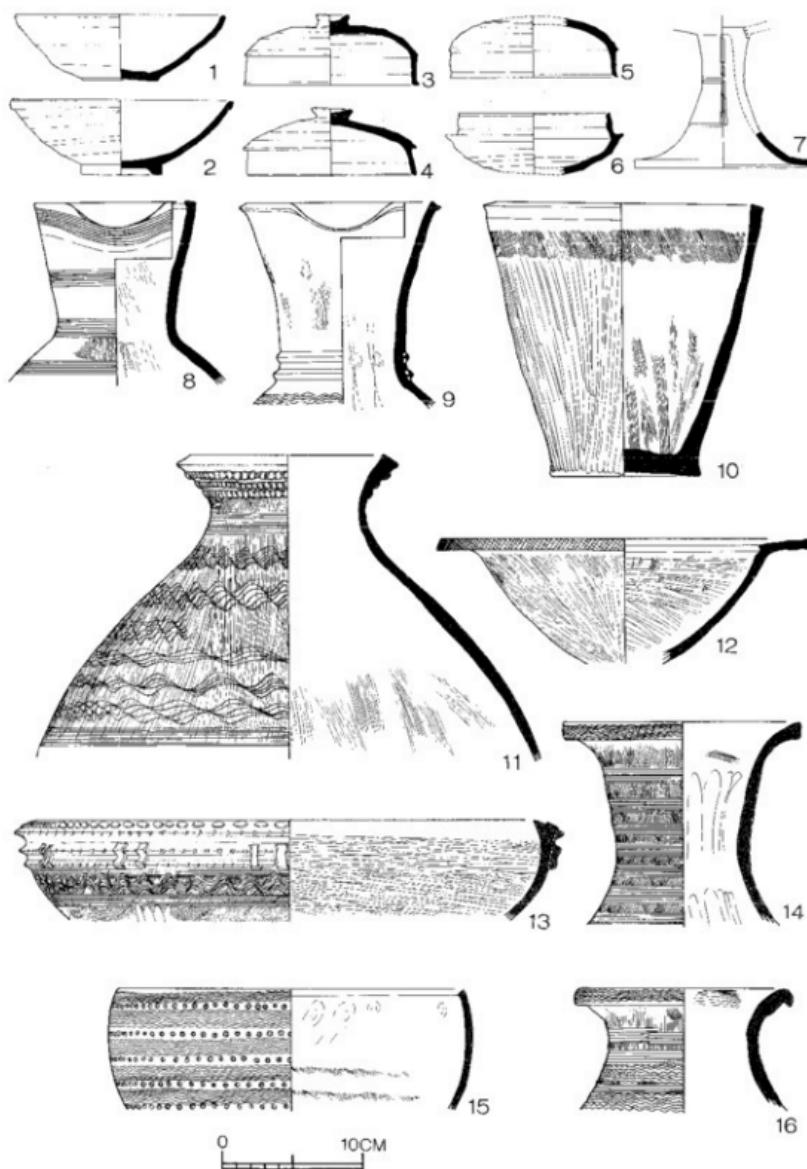


fig. 82 出土遺物実測図 (1 SK01, 2 SD01, 3~7 SB07, 8~13 SD06, 14~16 遺物包含層)

## 12. 新方遺跡（丁の坪地点）

**1. 調査経過** 当遺跡は、山陽新幹線敷設時にその存在が確認され、その後、数次に渡る小規模な調査が実施されてきた。その結果、弥生時代前期から鎌倉時代に至るまで連綿と続く大規模な遺跡であることが判明している。今回の発掘調査は、自動車販売店建設に伴うもので、4m×25mのトレンチ調査である。

**2. 調査概要** 調査区の両端は自然河川により区切られている。層位および検出遺構は、現水田面下1.1mに古墳時代（6世紀後半）の小規模な溝状遺構が存在し、それ以下に同時代（6世紀前半）の竪穴住居址、溝、弥生時代後期（第V様式）の竪穴住居址、土塙、溝、同時代中期（第III、IV様式）の土塙、土器群、同時代中期（第II様式）の竪穴住居址が層位を異にして存在した。なお第II様式の遺構検出面は、現地表下2.0mで、標高7.2m前後である。

**竪穴住居址** **S B04** 弥生時代中期（第II様式）に属するもので、直径6.5m程度で円形を呈する。一度建て替えが行なわれているが、柱位置、中央ピットがわずかに動くだけで規模に変化はない。

**S B03** 弥生時代後期（第V様式）に属するもので、4.2×4.6mの長方形を呈し、現存の壁高は45cmである。周壁溝は存在しない。

**S B02** S B03と同時期で、径4.5~5.0m程度の円形であろう。

**S B01** 古墳時代（6世紀前半）に属するもので、5.0~3.9mの長方形を呈する。中央よりやや西に偏する部分に焼土塊を含む土塙が存在する。

**土 塙** 上記のいずれの時代のものも出土しているが、弥生時代第III（新）および第IV様式のものが4基存在する。いずれも梢円形を呈し、長径1.0~1.8m、短径0.6~1.4mである。

**3. 出土遺物** 弥生時代中期の土器が最も多いが、特筆されるものとして、弥生時代の玉造に関連する遺物と銅鏡の出土があげられる。古墳時代須恵器は僅少であった。

**弥生土器** 壺形土器、脚台を有する土器が多く、變形土器は少ない。特異なもののみ列举すると、第II様式の紀伊産の變形土器、第IV様式の注口土器、同時期の播磨的色彩の濃い台付鉢形土器等である。

**石 器** 弥生時代中期の石鍬、石錐、石匙、楔形石器、石庵丁、大型蛤刃石斧、砥石等が出土している。

**玉 類** S B02、03、04から管玉の製品、未製品およびすり切り施溝を有する石材が出土している。石材については鑑定を受けていないので不明である。

**銅 鏡** S B04から出土したもので、長さ38mm、最大幅12mmで、表裏とも凹凸が著しく刃部にも鋭きはない。

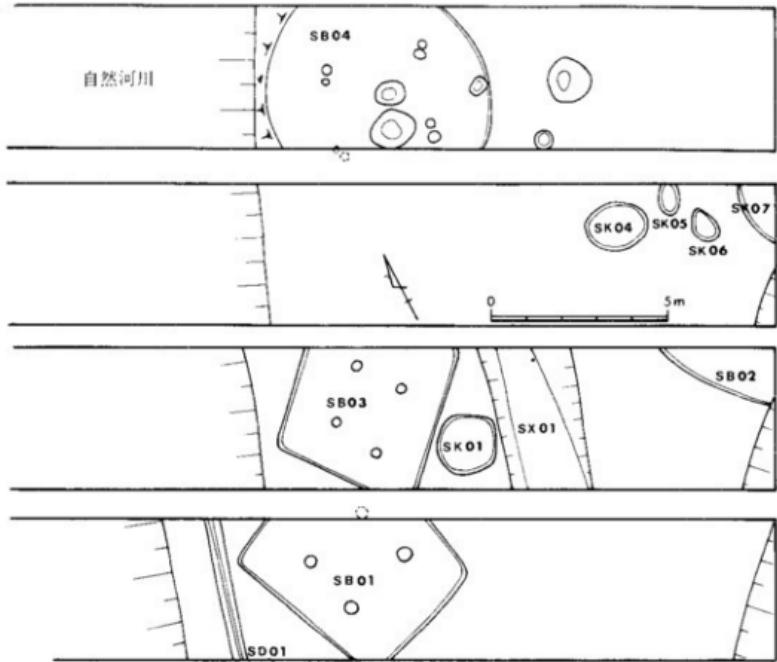


fig. 83 造構平面図

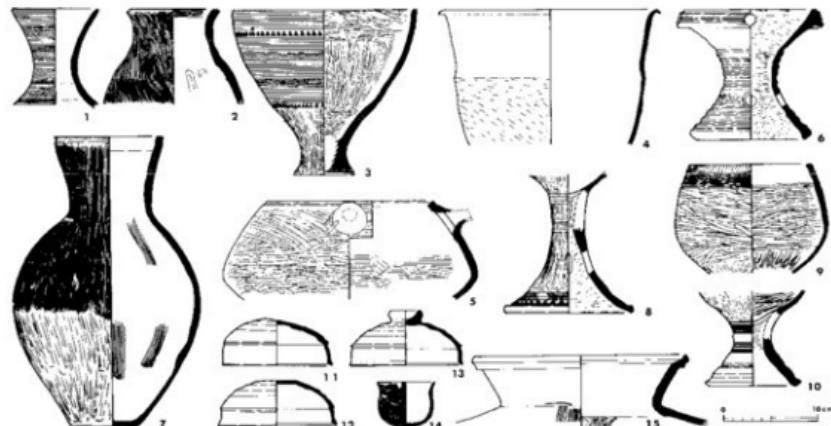


fig. 84 出土遺物実測図

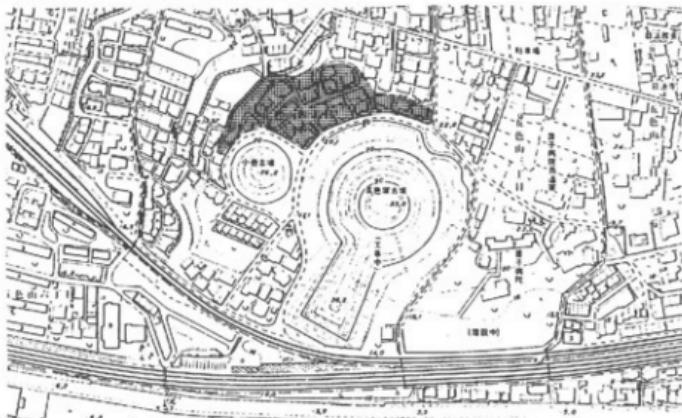
1~4(SB04).5(SK04).6(SK05).7~10(SK07)  
11~13(SB01).14·15(SD01)

し せき ごしきづか こふん こつぼ こふん  
13. 史跡五色塚古墳・小壺古墳

1. はじめに 今回の調査は五色塚古墳の北西、小壺古墳の北東に接する神戸市営北五色山西五色山住宅の建て替えに先立って五色塚古墳・小壺古墳の外縁施設を確認するために行った。昭和28年に市営五色山住宅が建設される前は、当該地は畠地として開墾されていたが、畠地の中に五色塚古墳と同心円状の一段高い土壇がめぐっていたといわれている。

調査地は現在市営住宅として使用されているため、調査は家屋と家屋との間や、立ち退きのすんだ敷地に、トレンチを設定して実施した。設定したトレンチは12か所、調査面積は約75m<sup>2</sup>である。

fig. 85  
調査区  
位置図



2. 調査概要

Aトレンチ 小壺古墳の北側に設定したトレンチである。トレンチ南端から約1mで南に向って落ち込む部分が検出された。落ち込み下部で葺石状の小石を検出し、さらにトレンチ中央北より幅5m、深さ70cmの溝を確認した。

Bトレンチ Aトレンチに並行して東側に設定したトレンチである。トレンチ南端から約1.5mで南へ落ち込む。落ち込みは深さ40cmで平坦となる。この平坦面には5cmの大礫が敷かれた状態で検出された。トレンチ中央で幅5m、深さ70cmの溝を検出した。

Dトレンチ 小壺古墳の墳丘裾と周濠を検出した。濠の立ち上がりは最近の搅乱のため確認できなかったが、推定上部幅5m、底部幅1.6m、深さ60cmで、外側へゆるやかに立ち上がっている。墳丘斜面には原位置を保っていない5cm大の礫がみられ、落下した葺石と考えられる。



fig. 86 トレーニング設定図

fig. 87 G<sub>2</sub>トレンチ検出溝fig. 88 G<sub>3</sub>トレンチ外堤埴輪出土状況

**Eトレンチ** 小壺古墳の墳丘裾と周濠を確認した。周濠の上部幅は3m、底部幅1.4m、深さは中央で60cm、外側へゆるやかに立ち上がっている。埋土には埴輪片を含み、墳丘側からの流れ堆積とみられる。墳丘斜面は、約35度の傾斜角を測る。墳丘斜面にはD<sub>1</sub>トレンチと同様に原位置を保たない5cm大の小石が見られる。

**G<sub>2</sub>トレンチ** トレンチ南端より8mで溝を検出した。溝は幅3.1m、深さ48cmのU字溝である。溝の流入土内より結晶片岩及び円筒埴輪片が出土している。溝の南側には盛土がみられる。五色塚古墳の外堤と考えられ、幅7m以上の規模があったと推定される。

**G<sub>3</sub>トレンチ** G<sub>2</sub>トレンチの東側2mに設定した。表土直下で原位置を保つ円筒埴輪基部を確認した。円筒埴輪は直径30cmを測る。円筒埴輪の西1.5mで円形の掘方があり、円筒埴輪の抜き取り痕跡と考えられる。

**3.まとめ** A・Bトレンチで検出した南方向への落ち込みは、位置関係から小壺古墳周濠の外側立ち上がりと考えられる。またその外側にめぐる溝は、古墳兆域を画する溝又は周溝と考えられるが、外堤周溝とすれば、外堤幅が狭いものとなる。

D<sub>1</sub>・Eトレンチで検出した小壺古墳の墳丘裾と周濠立ち上がりは、周濠幅が3mと非常に狭く、またA・Bトレンチで検出した周濠の立ち上がりより外側に突出した形となる。D<sub>1</sub>・Eトレンチ検出の墳丘裾は、盛土によって造り出された施設と考えられる。さらに、小壺古墳の整備前での現況測量図によれば、標高19mの等高線が北側に突出しており、平坦面の存在が明らかである。以上の点から小壺古墳が墳丘北側に低い造り出しをもつ円墳か、帆立貝式古墳である可能性が想定される。

G<sub>2</sub>・G<sub>3</sub>トレンチで検出した五色塚古墳外堤は外側に周溝をもち、円筒埴輪列を完備するものと判明した。さらに外堤埴輪列の位置から周濠立ち上がりは道路上に存在し、東側の一部は住宅敷地内に検出されるものと推定される。

まいごこふんぐんひがしいしがたに  
14. 舞子古墳群東石ヶ谷1号墳

1. 環境　舞子古墳群は、独立丘陵である舞子丘陵上に位置し、かつては100基以上の古墳が東西1.2km、南北0.8kmに群在していたが、造成工事等でその多くは破壊され、現在は約20基程を残すのみとなっている。

東石ヶ谷1号墳は、この舞子古墳群のほぼ中央に位置している。

周辺には、西北に多聞古墳群、西方に大歳山遺跡、南西に狩口台キツネ塚古墳、南東には史跡五色塚古墳等の存在が知られている。

2. 立地　東石ヶ谷1号墳は、北から南へ伸びる

尾根がやや西に屈曲する平坦な頂部（標高80m前後）に位置し、尾根の先端には東石ヶ谷2号墳がある。

3. 墳形と規模　古墳は、南北約17m、東西約14mの南北に長い円形で、現存墳丘高は約1.6mである。

墳丘の周囲には堀があり、西側では深く掘り込まれ明瞭であるが（幅1.5m、深さ0.5m）、北側では明瞭ではない。

また羨道前庭部で須恵器甕の破片が集積された状態で出土している。葬送に伴う祭祀を行ったものと考えられる。墳丘北西部では、箱式石棺状の埋葬施設（全長85cm、幅35cm）が検出された。墳丘上に造営されているため、古墳築造後のものとみなされるが、出土遺物等がなく、時期・性格等は不明である。

墳丘盛土中からは、比較的多量の弥生土器片・サスカイト片が出土した。

石室　内部主体は右片袖式の横穴式石室である。開口方向は南（N4°30'E）である。袖部から羨道部にかけての三石は縦積にし、他の石材は一部を除いて横積されている。石室は持ち送りが見られ、側壁の残存高は床面より2mを測る。石室の規模は、玄室長5.5m、玄室幅1.5m、羨道長3.5m、羨道幅1.4mで、羨道と考えられる墳丘の素掘り部分は3.0mである。その最奥部で径0.3~0.5mの大の石が二石検出された。この二石は閉塞石である可能性が高い。天井石は原位置をとどめるものはなく、石室内には多量の石材・土砂が流入していた。これらの石材の中には、後世に石を運び出すために割ろうとしたクサビ痕が認められるものが含まれている。



fig. 89 東石ヶ谷支群位置図

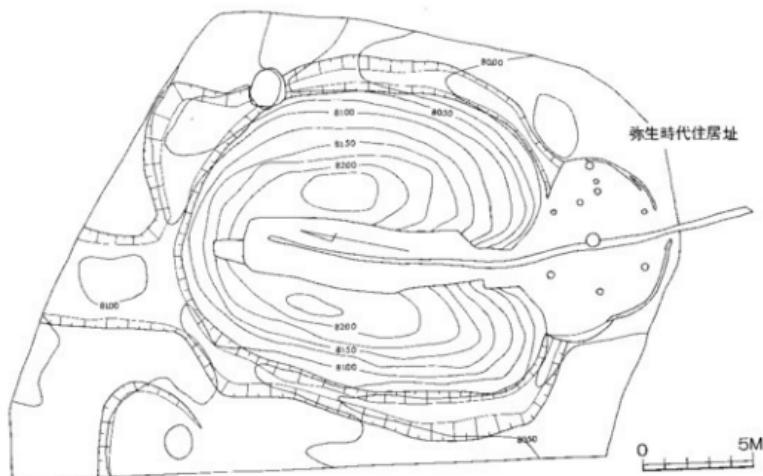


fig. 90 填丘測量図

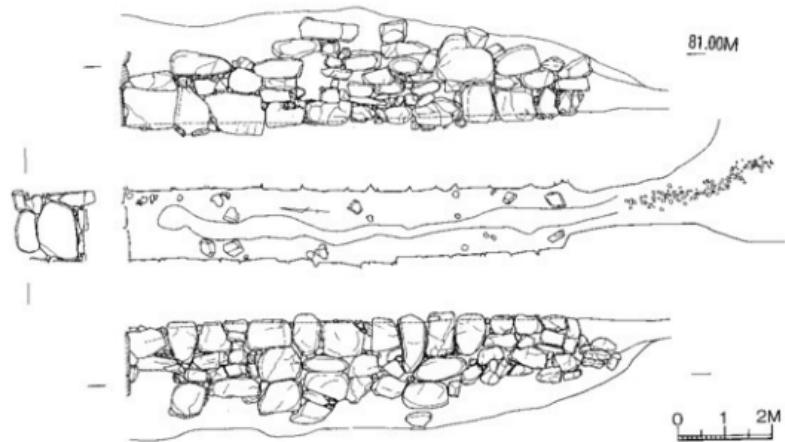


fig. 91 石室実測図

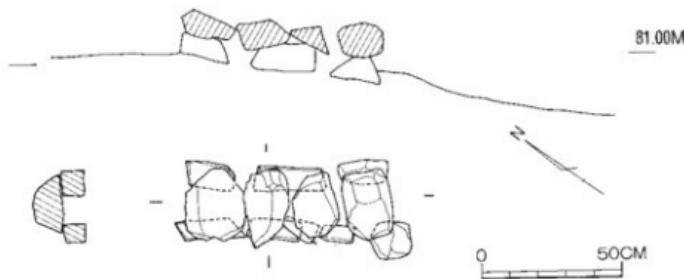


fig. 92 箱式石棺実測図

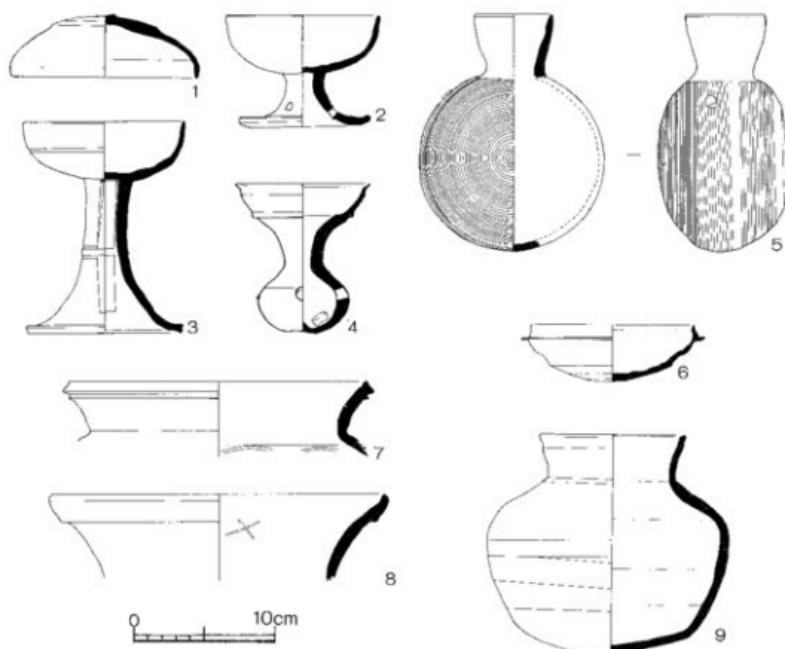


fig. 93 出土遺物実測図 (1～4 玄室内, 5～9 畑道)

**排水溝** 石室床面には地山土による約7cm程の張り床が認められ、その面を切って排水溝（幅30cm・深さ5cm）が、玄室奥から石室外まで伸びている（全長22m）。

**炭 敷** 石室床面直上の全面に炭が敷かれていた。この炭層の厚さは2~7cmあり、ほとんどが切り炭であった。石室内には焚き火の痕跡は認められない。この炭敷は副葬品を玄室外へかき出した後のものと考えられるが、上面からの出土遺物はなく、その時期・性格等は不明である。

**4. 出土遺物** 遺物は、玄室最奥部東側から原位置をとどめた須恵器短脚高壺・躰・堤瓶・土師器小型甕各1点、羨道入口床面から金環1点と須恵器壺、排水溝内からは須恵器甕・高壺・躰等の破片及びガラス小玉1点が集積された状態で、また、炭敷灰層内からは少量の須恵器片・鉄片及び金環1点が出土した。

**5. 弥生時代** 古墳の排水溝及び埴丘南側を検出中に、古墳築造前の地山を掘り込んだ弥生住居址 時代住居址を発見した。直径7.5mの比較的大型の円形竪穴住居址で、周壁溝をもち、柱穴は6ヶ所確認した。出土遺物には、臺・甕・高壺・器台等の弥生土器及び叩き石があり、これらから弥生時代後期の住居址と考えられる。

**4.まとめ** 出土遺物・石室の形態等からこの東石ヶ谷1号墳は、6世紀末頃の築造と考えられる。以前より舞子古墳群内で、弥生土器片や石器が表面採集されていたが、この住居址が発見されたことは大きな意味をもっており、今後この尾根上の弥生時代遺構の拡がりを把握することが必要となろう。



fig. 94 舞子古墳群位置図



fig. 95 古墳と弥生時代住居址全景（南から）



fig. 96 石室左側壁検出状況



fig. 97 石室内炭敷検出状況（南から）

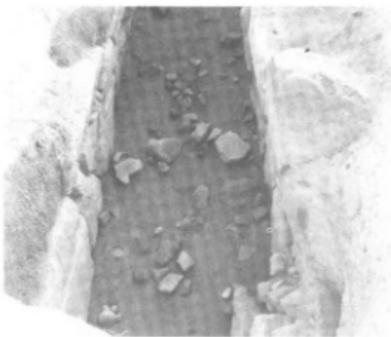


fig. 98 玄室内遺物出土状況（南から）



fig. 99 玄室奥壁付近遺物出土状況（東から）



fig. 100 箱式石棺検出状況

まつ の いせき  
15. 松野遺跡

**1. はじめに** 松野遺跡は、妙法寺川の左岸、觀音山丘陵の南西にひろがる現標高約9mの扇状地に立地している。

当遺跡は、市営住宅建設計画に伴う確認調査によって発見され、これまで2次にわたる調査を実施した。

調査の結果柵列に囲まれた掘立柱建物群（古墳時代・5世紀末）と土塙（弥生時代）が検出された。この調査で検出された遺構は、掘立柱建物7棟、竪穴住居1棟、柵列4条以上、溝2条、土塙21基、井戸1基である。

今回の第3次調査地はポンプ場予定地の約135m<sup>2</sup>で、前回調査地の東側柵列址外にあたる。

**2. 調査概要** 今回の調査で検出された遺構は、土塙1基、溝2条であった。

土塙（SK01）は、上面が一辺90cmの隅円方形で底面が径約40mの円形を呈し、深さ約90cmである。土塙内埋土より土器片数点が出土し、弥生時代後期と考えられる。

溝2条のうち、SD01は、時期、性格とも不明である。後世の比較的新しい時代の溝の可能性がある。SD02は、埋土状況から自然流路とみられる。SD02より弥生土器片が数点出土している。

出土遺物のほとんどは、4層の遺物包含層からの出土で、須恵器、土師器、青磁の小破片が多く、遺物の時期も、古墳時代から中世のものまでが混在している。

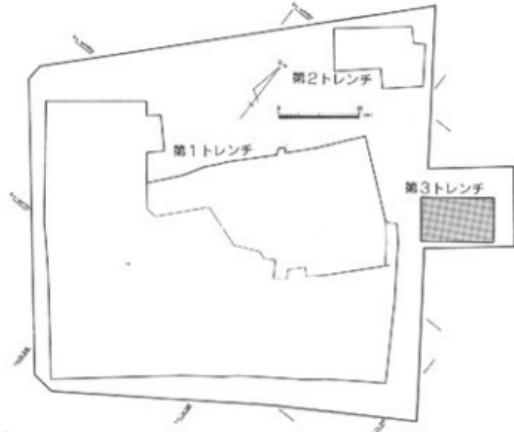


fig. 101 第3次調査地位置図

3. まとめ 今回の調査では、第1次、第2次調査で検出された古墳時代の建物群に関する構造は、検出されなかった。このことは、調査面積が、130m<sup>2</sup>余りと狭いこともあるが、調査地が柵列址の外側に位置していることも考えなければならない。柵列外に建物等の施設が存在しない可能性も今回の調査で考えられ、柵列に囲まれた建物群の存り方を考えるうえでひとつの資料が得られたことになる。

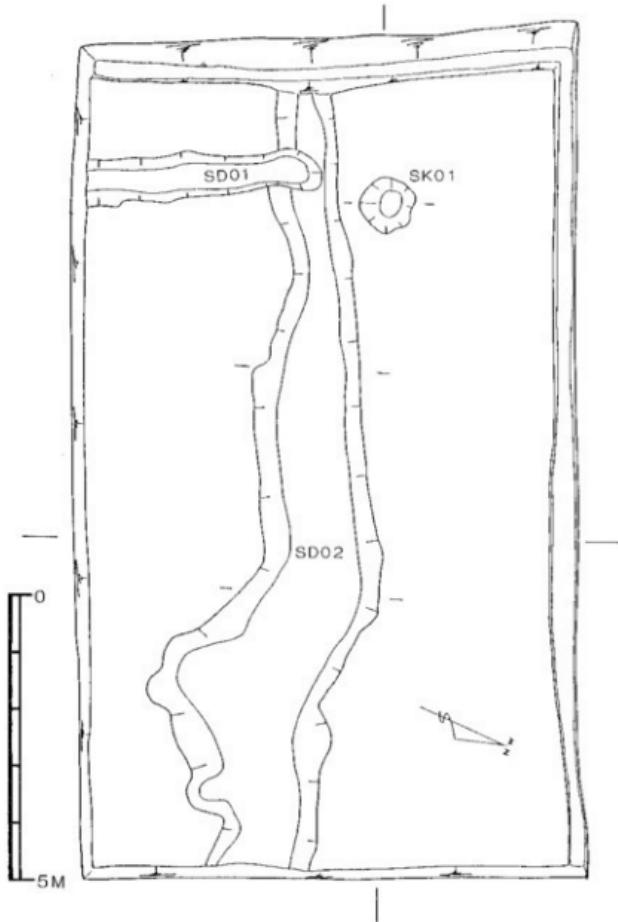


fig. 102  
造構平面図

## 16. 史跡処女塚古墳

**1. 調査経過** 史跡処女塚古墳整備事業は昭和54年度から開始され、整備工事に先立ち古墳の規模・形態を明らかにするため発掘調査を実施してきた。

先年度までの調査で明らかになった点は以下のとおりである。

- ①墳丘斜面に葺石が存在する。
- ②当初、前方後円形と考えていたが、前方後方形である可能性が高い。
- ③前方部は2段築成である。
- ④前方部墳頂部には、「葺石」が施されている。
- ⑤前方部の段築面は水平でない。
- ⑥主体部と考えられる配石が後方部墳頂にある。

上記の諸点が明らかになったものの、墳丘整備を実施するうえで、十分な資料とは言えなかった。そのため、今年度は以下の点を明らかにするために発掘調査を実施した。

- ①後方部の段築数を明らかにするために、搅乱の少ないと考えられる後方部西側斜面に第16トレンチ、東側上段付近に第17トレンチ、北側上段付近に第20、21トレンチを設定した。
- ②前方部の東側裾部を確認するために第18トレンチ、西側裾部及び段築を確認するために第19トレンチを設定した。

**3. 立地及び環境** 当古墳は、東側を流れる石屋川によって形成された砂堆の微高地に立地している。古墳の立地する砂堆は、標高約10mで南に向ってゆるやかに傾斜している。

六甲山麓における前・中期古墳の分布は、菟原郡域と八部郡域では対称的な様相を示している。

まず、処女塚古墳が所在する菟原郡域では、東・西求女塚古墳、ヘボソ塚古墳などが平野部に立地している。一方、八部郡域では、会下山二本松古墳、得能山古墳、夢野丸山古墳が丘陵上に立地しており、念佛山古墳のみが平野部に立地している。

### 4. 調査概要

**第16トレンチ** 後方部西側斜面に150m<sup>2</sup>のトレンチを設定した。トレンチ北半部は、大きく搅乱を受けていた。トレンチ中央部の標高14.20m付近で若干の葺石の溜りと平坦面を検出した。

断ち割りの断面観察によると、標高約14.00m付近で、盛土の変化が認められ

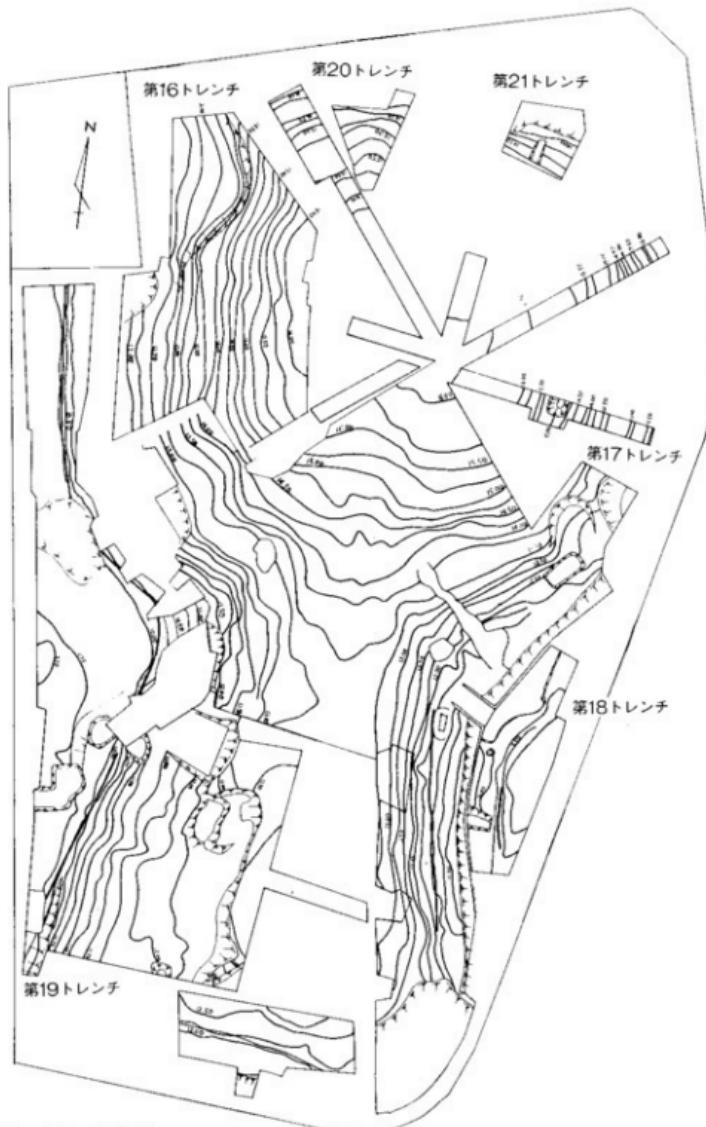


fig. 103 トレンチ配置図

た。つまりこのレベルより上位では盛土が砂によってなされ、下位は粘土により盛土がなされている。この盛土の相異は、段築面の築成と何らかの関係があると思われる。

**第17トレンチ** 後方部東側での上段テラス確認を目的として約34.3m<sup>2</sup>のトレンチを設定した。しかし、搅乱が著しく、原形をほとんどとどめていなかった。

**第18トレンチ** 前方部東側裾部の確認を目的として、約44.5m<sup>2</sup>のトレンチを設定した。搅乱が著しかったが、長さ約2.5mに渡って裾部の根石列を検出した。標高は9.6mで前方部のほぼ中央に相当する。根石は掘方をもたず、盛土と一緒に埋めこまれている。一石のみ、立石状態が認められたが、他はすべて横にねかせてある。

**第19トレンチ** 前方部西側の中段及び裾部の検出を目的として、約210m<sup>2</sup>のトレンチを設定した。

しかし、中段テラス付近は搅乱が著しく、テラスと推定される平坦部を若干検出したものの、根石列等は検出されなかった。

裾部については、一部搅乱によって根石がなくなっていたものの、長さ9mに渡って根石列が検出された。

根石外に転落した葺石の溜りからは、半截竹管で施文された埴輪が出土した。

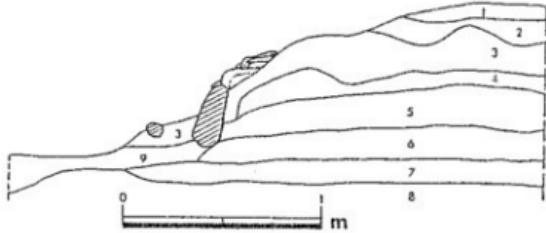
**第20トレンチ** 後方部北段上側テラスの確認を目的として、約13.9m<sup>2</sup>のトレンチを設定した。テラスと推定される14.00m付近で、転落葺石を検出した。

これら葺石の間から半截竹管で施文された埴輪片が出土した。

**第21トレンチ** 第20トレンチと同じ目的で17.2m<sup>2</sup>のトレンチを設定した。しかし、搅乱が著しく、原形をとどめた斜面はまったく検出されなかった。

fig. 104

第18トレンチ前方部東側  
断面図



- |            |          |           |
|------------|----------|-----------|
| 1. 黒 橙 色 土 | 4. 黄灰色泥砂 | 7. 黑 色 土  |
| 2. 灰 褐 色 土 | 5. 灰黄色泥砂 | 8. 灰黄色砂レキ |
| 3. 黄灰色粘質土  | 6. 灰色細砂  | 9. 灰白色砂質土 |

## 6.まとめ 今回の発掘調査によって明らかになった点は、以下のとおりである。

- ①前方部の東西の裾が確認できたため、前方部の幅、平面プランの開きかたが明らかになった。
- ②前方部裾部は、東西でレベルがちがう。その差は約0.5mである。
- ③後方部は3段築成であったと思われる。



fig. 105  
处女塚古墳  
全景

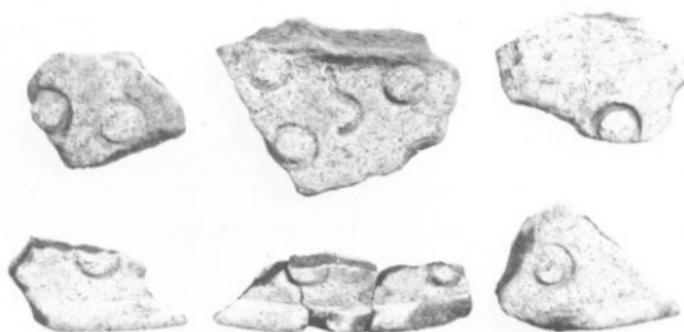


fig. 106 半截竹管文埴輪片

ぐんげいせき  
17. 郡家遺跡

**1.はじめに** 郡家遺跡は、昭和54年4月御影町郡家大蔵において、奈良時代の掘立柱建物、土塙、溝が発見され、これらの発見と郡家大蔵の地名から古代菟原都衙の所在地と推定されてきた。その下層には弥生時代及び古墳時代の遺物が出土しており、周辺に同時期の遺跡が存在していることを確認している。

さらに、昭和56年12月には、御影中町の東灘警察署西側のマンション建設予定地において、古墳時代（5世紀後半）の掘立柱建物が発見された。

以上の調査の結果から、御影町・御影中町周辺には、弥生時代中期から古墳時代・奈良時代にわたる広範な遺跡が存在するものと考えられた。

今回の調査は、遺跡の北東部から南西部に貫流する都市小河川天神川の河川改修工事に伴って実施した。調査地は、第1回調査地点（郡家大蔵遺跡）の西側50m、都市計画道路弓場線道路敷中央に位置している。調査面積は、南北32m、幅5mで約160m<sup>2</sup>である。

**2. 調査概要** 調査の契機は、河川改修工事中に弥生時代の遺物包含層が発見されたことによる。

調査地北壁断面で確認した遺跡の層序は、地表下60cmまで盛土され、旧耕土床土直下（地表下1.2m）で奈良時代の構造面と考えられる黄褐色粘質土層が確認できた。その下層に、古墳時代の土器・弥生土器を含む黒灰色砂質土層があり、この下層が弥生土器のみを含む単純な遺物包含層である暗褐色粘性砂質土。その下が赤褐色土の地山となる。この地山面が弥生時代の構造面となっている。

検出した遺構は、調査地北端で奈良時代の構造面を検出し、柱掘方1か所を確認した。また、弥生時代遺構面で河川状遺構3か所、溝1条を検出した。

### 3. 検出遺構

**柱掘方** 調査地北端部で検出した方形の掘方である。方形の掘方の一辺は1.0m、深さは50cmを測る。掘方の南よりに直径25cmの柱痕跡を検出した。

**溝1** 調査地中央北よりに検出した平面形コ字形の溝である。溝の東側は、工事用鋼矢板掘方によって欠失させられていて不明である。断面形は、U字を呈し、幅は80cm、深さ20cmを測る。北側屈折上層で弥生土器群が検出され、北側屈折部でも直径60cm大の河原石下に弥生時代壺形土器完形品が出土した。

溝1は、屈折部で土器が集中して出土し、平面形が方形を呈する点から一辺約7.0mの方形周溝遺構と考えられる。

**河道1** 調査地北西から南東方向に流れる自然流路である。幅1m、深さ約60cmを測り、南部の上層で河原石の堆積がみられる。この河原石群と、河川底において

弥生土器が出土している。

河道2 レンチ北東部で北西から南東方に  
流れる自然流路である。白色砂が堆積  
し埋土から須恵器、弥生土器が出土し  
ている。

河道3 レンチ北部で西から東に流れる自  
然流路である。東側は河道2によって  
切られている。幅2m、深さ40cm前後  
を測る。埋土より弥生土器が出土して  
いる。

**4.まとめ** 今回の調査においては、調査地の北  
部で一辺1mの柱掘方を検出したにす  
ぎず、郡家遺跡の郡衙遺構本体を検出  
することはできなかった。しかし、市  
街地化した場所に遺跡が広範囲にわた  
って存在していることを確認するこ  
とができた。そして、旧地形を復元すれ  
ば、第1回調査の郡家大歳遺跡（昭和  
54年調査）が丘陵線の高位に位置し、  
地山面で郡衙遺構を確認しているのに  
対して、今回の城の前の調査では、  
郡衙遺構が厚い整地層上に検出されて  
いる。このことから郡衙の成立にあた  
って、谷地形（今回の調査地は、天神  
川の谷地形）には大がかりな造成を行  
い、郡衙域を形成しているものと推定  
される。

郡衙遺構下層で、古墳時代と弥生時  
代の遺物包含層を検出し、弥生時代の  
遺構も検出した。

このことから、第1回目の調査で弥  
生土器・古墳時代土器が出土し、付近  
に同時代の遺跡が存在すると予想した  
のを裏付けることになった。

溝と河川状遺構の時期差について今

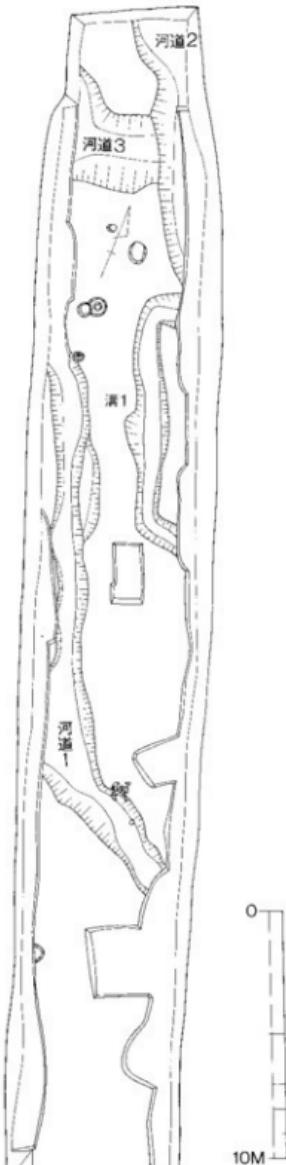


fig. 107 調査区平面図

今回の調査では判明しなかったが、今回の調査地点より高位に弥生時代の遺跡の本体があると推定される。

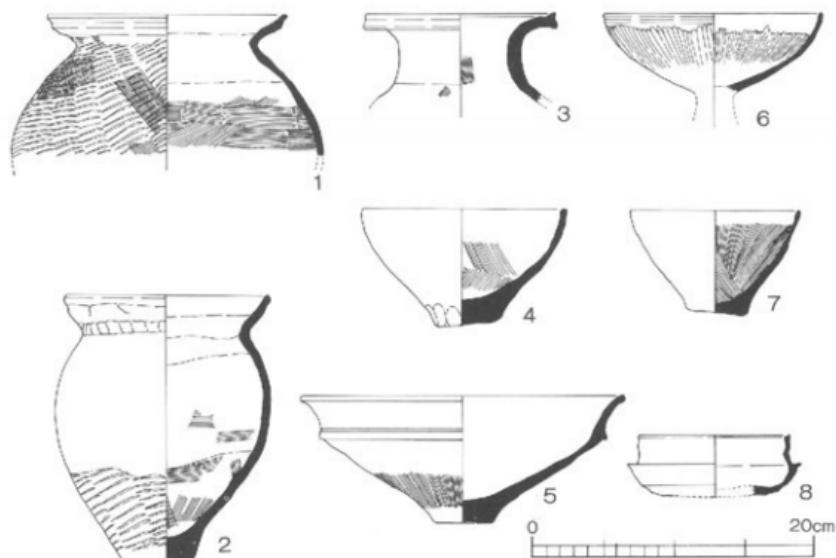


fig. 108 出土遺物実測図(1・2 溝1, 3・4 河2, 5 河1, 6・7 包含層, 8 河3)



fig. 109  
方形周溝構造検出状況

ひがしもとめづかこふた  
18. 東求女塚古墳

1. 調査に至り かねてから地元より要望の強かった神戸市立遊喜幼稚園の園舎改築は、昭和57年度に予算措置がとられ、具体化する運びとなった。

そもそも遊喜幼稚園は、東求女塚古墳の前方部が削平されたあと、その跡地に設立されたという経緯があり、今回、園舎が改築されるにあたり、その残存状況を調査する必要が生じた。そこで関係者の協議の結果、園舎の建築面積約1,200m<sup>2</sup>について、昭和57年8月から2ヶ月間の予定で発掘調査を実施することになった。

2. 調査概要 (1) 調査方法

当初、古墳の残存状況を探るため、園舎建築部分に4本のトレントを設定して調査した。その結果、第1、第4トレントで葺石と溝を検出し、第1、第2、第4トレントで中世の遺物包含層を確認した。

この時点では、古墳が良好な状態で残存していることが予想されたため全面調査に切りかえた。

(2) 検出遺構

今回の調査区内で検出された東求女塚古墳の遺構は、前方部の北側及び西側の墳丘據と溝と外堤である。

a 溝と外堤 調査区西側で溝と外堤が検出された。溝は黄褐色砂質土の地山を掘りこんで作られており、溝幅は10m、深さは0.8~1mである。

溝底は、地形にしたがって、北から南へ傾斜している。前方部正面の墳丘據と溝との間には30cm幅の平坦面が存在する。外堤は、地山の掘り残しのままで何らの施設を設けていない。北の調査区内では外堤は確認されず、溝の幅は10m以上になるものと考えられる。溝内には黒色の粘質土が堆積しており、滲水していたことを示している。

b 葺石 前方部西側

前方部西側の根石列は、一直線を呈さず若干「く」の字状に折れ曲る。検出長は36mである。

葺石は、径40cm程の根石を横にすえ、その上に径10cm程の石を小口積みにしてふき上げている。葺石の傾斜角は70°~80°で、根石から0.8~1mの高さまで残存している。

根石列は、北から南へ傾斜し、傾斜角は2°である。葺石は背後に径10cm程の円礫を用いて積み上げている。



fig. 110 東求女塚古墳調査区平面図

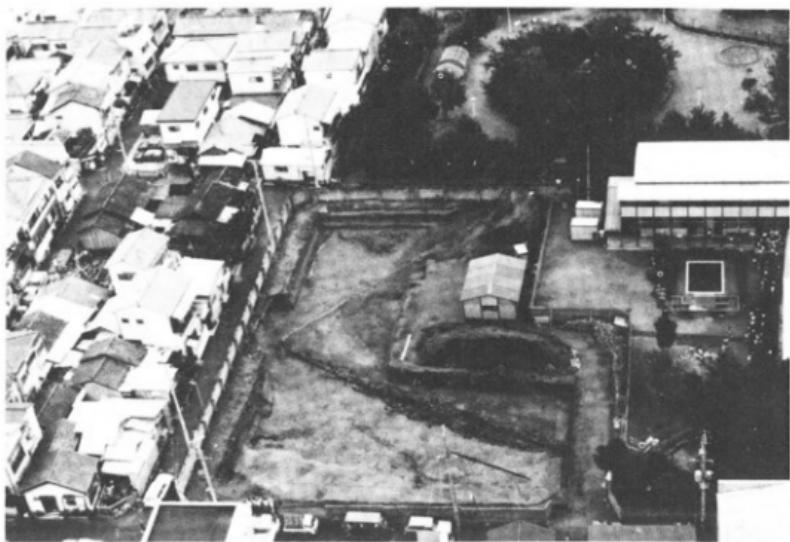


fig. 111 東求女塚古墳全景



fig. 112 前方部西側墳丘裾と周辺



fig. 113 前方部北側墳丘櫛と周溝



fig. 114 前方部北西隅

### 前方部北側

北から南へ傾斜する自然地形を横断して古墳が作られているため、前方部北側の根石列は、地形の高低に応じて起伏している。根石は径30cm程の石を横積み（一部縱積み）にして、その上に10cm程の小礫を小口積みにしている。

調査区の東で、葺石の存在しないところがみられるが、ここには溝の外から陸橋がとりついていた可能性が高い。前方部北側の根石列検出長は30.2mである。

c 盛土 古墳の墳丘部は、搅乱されているところが多く、盛土は60cm程残存しているのみであった。明褐色砂質土の地山の上に赤褐色砂質土、淡黄色砂質土が盛られていた。

d その他の 古墳の墳丘部には、戦時中の防空壕や肥桶などが存在していた。防空壕は長  
造構さ7m、幅2mで中から瓦、陶器、焼夷弾の破片等が出土した。搅乱土層や肥桶の中からは、牛、馬、犬の骨が多数出土している。

溝の埋土上には中世の遺物包含層が存在したが、遺構は検出されなかった。

3. 出土遺物 今回出土した遺物で、直接東求女塚古墳の築造年代と関わるものはない。墳丘斜面や溝から出土した土師器壺、須恵器壺、短頸壺は古墳築造後の6世紀代のものであり、墳丘盛土内から出土した壺は弥生時代中期のものである。埴輪は出土していない。

溝内の堆積土からは、4世紀代の土師器が出土している。中世の遺物包含層からは、中世須恵器片口鉢、壺、黒色土器などが出土地している。

4.まとめ 東求女塚古墳は、菟名負処女の悲恋伝説にまつわる古墳として古来から有名である。しかし、明治以降、古墳が土取り場の対象とされ、所有者が転々とするうちに次第にそこなわれ、現在ではわずかに痕跡をとどめるのみになっている。明治時代に古墳の主体部が盜掘され、その際銅鏡6面、車輪石、人骨、玉、剣が出土して学界でも著名な古墳であったが、その実態は不明な点が多かった。

今回実施した発掘調査によって、古墳が周囲に溝をめぐらし、全長が80mをこす大きな古墳であることが明らかになった。さらに、墳丘上には葺石を施すが、埴輪は樹立しないこと、主軸の方向が西北西をとること、前方部先端角度80°で他の前期古墳に比べてやや聞くこと等が明らかになった。

これまで東求女塚古墳は、出土遺物から古墳時代の前期に属する古墳と考えられてきたが、前方部が若干聞く墳形と周溝の存在は、従来の年代観の検討を余儀なくさせるものと思われる。その意味で古墳が現園舎の地下に保存されたことの意義は大きい。

## 19. 森北町遺跡

**1. 調査経過** 森北町遺跡は神戸市の東部、神戸市東灘区森北町4丁目に所在し、高地性集落として知られる芦屋市会下山遺跡が存在する山塊の裾にひろがる遺跡である。

昭和39年に森北町23番地で浄化槽工事を行った際、弥生時代後期の長頸壺等多量の土器片が発見され、森北町遺跡の存在が明らかにされた。また、森福荷神社前でサヌカイト片の散布がみられ、都市計画道路山手線の工事中に弥生土器片が採集されている。

以上のように、森北町遺跡は森福荷神社を中心にして東西300m、南北250mにわたる弥生時代の遺跡と考えられた。

森北町遺跡の西方約400mの山腹（神戸女子薬大構内）からは銅鐸（生駒銅鐸）が出土している。生駒銅鐸出土地の南では弥生時代中期の坂下町遺跡が存在する。また、森北町東方の芦屋市との市境には三条岡山遺跡があり、弥生時代・中世の遺物が出土している。

このように、森北町遺跡の周辺は弥生時代の遺跡が集中的に分布している。特に高地性集落会下山遺跡との関係、小河谷を隔てた丘陵山腹で出土した生駒銅鐸との関係など、今後の課題となると思われる。

今回の調査は日本放送協会東灘世帯新築工事に先立って行った。試掘調査を昭和56年7月に行った結果、建設予定地の北半分では遺物包含層はすでに削平され、遺構等は存在していない。南半部においては良好な遺物包含層及び土塙状の落ち込みを確認した。このため、建設予定地南半部約200mについて、本格的な発掘調査を実施した。

**2. 調査概要** 調査地は大正時代に宅地化され、旧地形をとどめていない。調査地の北部では旧表土直下に赤褐色粘質土の地山となり、南へ行くにしたがって地山面が深くなり遺物包含層が厚く堆積していることがわかった。また調査地中央及び東は、宅地造成による搅乱を蒙っていた。

検出した遺構は調査地南辺に中世（鎌倉時代後半）の東西溝1条、弥生時代中期の溝状遺構6条である。

溝1　　調査地の南辺沿いに走る東西溝である。断面形はロート状を呈する。上面の幅は溝の南肩が削平を蒙っているため明確ではないが、復原推定約2.5mと考えられる。溝底幅は20cm～40cm、深さは現存約1.5mを測る。溝内からは鎌倉時代後期の土師器皿・瓦器塊・中世須恵器片が出土している。調査地の南西部では、自然傾斜する地山を埋め立てた後に、溝1は掘り込まれている。

溝2　　断面形はU字形、幅1.3m、深さ40cmのL字形に折れ曲がる溝で、北東コーナ

一は搅乱塙によって破壊されている。溝内埋土上層より弥生時代壺形土器片(櫛描文土器)が出土している。

溝 3 幅1.1m、深さ30cmのU字溝で、溝2と接続している。溝3の東側は搅乱によって検出できなかった。溝内の埋土より弥生土器が出土している。

溝 4 南側を溝3によって切られる断面U字形の溝である。幅0.7m、深さ20cmを測る。溝内埋土から弥生土器の小破片が出土している。東側は搅乱によって消失している。

溝 5 幅1.7m、深さ40cmのL字型に曲がる溝である。溝のコーナー部で弥生時代の壺形土器4個体が集積された状態で出土した。溝の南部は溝1によって切られ東部は搅乱によって消失している。

溝 6 幅1.7m、深さ30cmのL字形に折れ曲がる断面U字形の溝である。溝のコーナー部で弥生時代の壺形土器1個体、石器が出土している。東北部は溝1によって切られ、南側は造成によって破壊され、一部しか残存していなかった。

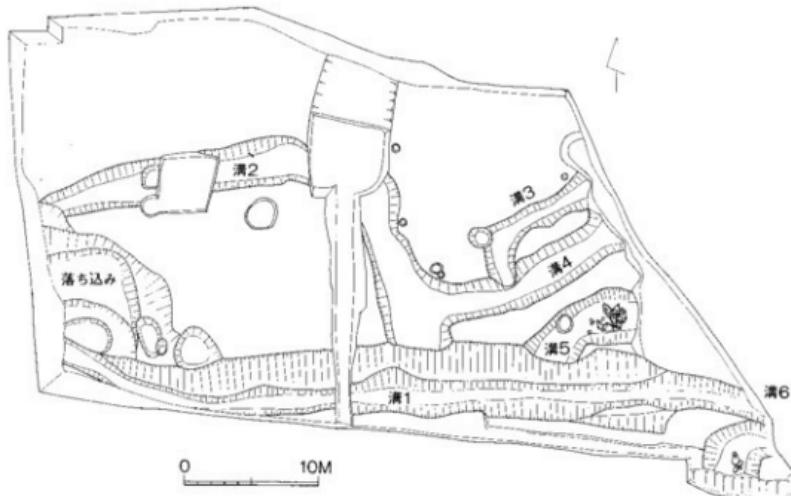


fig. 115 遺構平面図

3. 出土遺物 出土遺物は、溝5土器群(壺形土器4点・高環形土器1点)、溝6コーナー部出土壺形土器1点と溝2出土櫛描文土器片ほか溝1出土瓦器等の中世土器などがある。

溝5土器群 広口壺(1) やや「く」の字に斜め外方に立ち上がる頸部に、斜め下方に垂下する口縁部をつける。口縁部端面は櫛状工具による綾杉文をめぐらし、円

形浮文を貼付する。頸部には2条の断面三角形の突帯を貼りめぐらす。胴部はソロバン玉形で、肩部に直線・波状・斜格子の櫛描文と3個1組の円形浮文をめぐらせる。底部やや上方に焼成後の穿孔がある。

**広口壺（3）** やや下半に最大径をもつ丈高の体部に斜め上方に立ち上がる頸部と水平に開く口縁部をもち、端面をつくる。口縁内面は上端面より高くなる。器表全体に荒くハケ目を施し、胴部・底部はさらにハケ調整、底部はヘラミガキを行う。胴内面はハケ調整、底部内面はヘラ削りを施している。底部に一ヶ所穿孔がある。

**広口壺（5）** ソロバン玉形の胴部に、短く外方に立ち上がる口頸部をもつ小型の壺である。外面は荒くハケ調整のあと、口頸部・胴下半はナデ・ヘラミガキの調整を施している。内面はハケ調整のあと、口頸部・胴上半はナデ調整を施している。

**高坏（6）** 坏部は中央で細くくびれて外上方へ直線的に立ち上がり、内面に断面三角形の突帯を貼りめぐらせている。脚部は大きく開く。

**長頸壺（2）** 張りのある胴部にやや外方に立ち上がる口頸部をつける。口縁部は欠失しているため不明であるが、片口をもつタイプと考えられる。

**溝6出土遺物 長頸壺（4）** 張りのある胴部に直線的に外上方に立ち上がる口頸部をとりつけ、やや上方に拡張させた口縁端部をつくる。口縁部には口徑の約1/6程を浅く抉り取り片口としている。頸部から胴部上半に5帯の櫛描直線文をめぐらす。調整は全体にハケ調整のあと頸部をのぞきナデ消し、胴下半はヘラミガキ、内面も全体にハケを施したあと頸部・胴上半はハケをナデ消す。胴部下半に穿孔がある。



fig. 116 溝5土器群出土状況

**4. まとめ** 今回の森北町遺跡の調査では、鎌倉時代の溝1条、弥生時代の溝5条を検出した。鎌倉時代の溝は東西に計画的に穿たれた溝と考えられる。弥生時代の溝は、調査範囲が限定されたことによって遺構の性格を明らかにすることはできなかったが、溝2がL字状（方形状）にめぐり、溝3と共に存する点から、方形周溝墓である可能性が考えられる。また、溝5・溝6のコーナーにおいて土器が集中して出土した点は、方形周溝墓でみられる土器供獻の状況と近似している。これらの溝が、方形周溝墓に伴う溝と考えられるならば、近接して造られた溝2・溝3と溝5・溝6とは時期差が存在すると考えられる。出土土器の形態から弥生畿内第Ⅲ様式古段階から畿内第Ⅳ様式のものと考えられる。

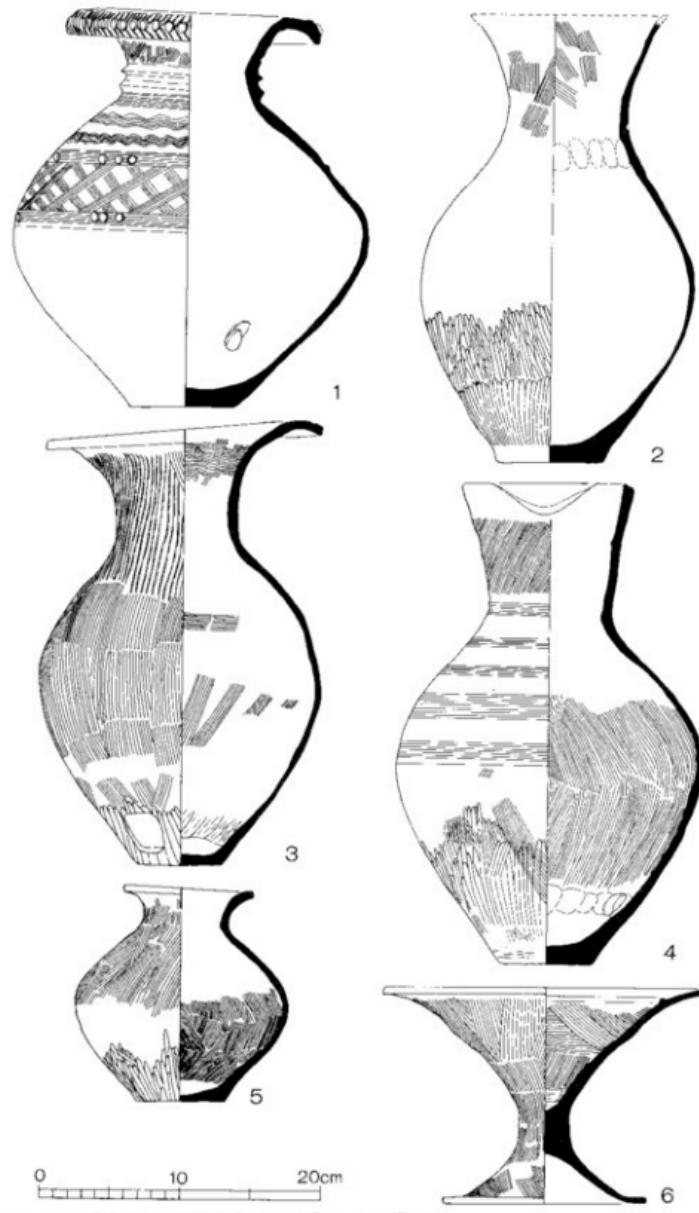


fig. 117 满出土土器実測図 (1・3・5・6 溝5, 2・4 溝6)

## 20. 北神ニュータウン(北神戸3地区)内遺跡

昭和57年度の北神ニュータウン(北神戸3地区)内埋蔵文化財調査は、第1地区内で第47地点遺跡、鹿の子遺跡の発掘調査と第4地点遺跡古墳参考地の試掘調査、第2地区内では長野谷地区的試掘調査、第3地区内では第28地点と雨堤地区的試掘調査を実施した。試掘調査を実施した5地点のうち、弥生時代中期集落址の第4地点遺跡を除き、遺構、遺物は発見されなかった。

### 第47地点遺跡

**1. 調査経過** 第47地点遺跡は神戸市北区道場町日下部に存在する。昭和56年度に、古墳参考地として試掘調査を実施した。その結果、古墳の存在は確認されなかつたが試掘トレンチ南端から火葬墓址一基が検出された。このため、第47地点の尾根全体について発掘調査を実施した。

**立地** 第47地点は、同様の火葬墓址群を検出した第46地点と同じように、東方に広がる塩田盆地からは望むことのできない、西方に開口する谷筋最奥部斜面に立地している。

**2. 調査概要** 今回の調査範囲1,600m<sup>2</sup>から57基の火葬墓址を検出したが、尾根頂部に立地するものではなく、すべて谷斜面に立地している。これらの検出墓址を形態的に分類すると、下記のように3種類7形態に分類できる(註)。

火葬墓址 I. 円形——a. 大型3例(S T34・37) b. 小型11例(S T31・47)

II. 長方形(座棺用) — a. 棺台石ナシ19例 (S T49)  
                           b. 棺台石2個13例 (S T3・20)  
                           c. 棺台石3個7例 (S T11・17)  
                           d. 棺台石敷きつめる3例 (S T1・33)

III. 長円形(伸展用) 1例 (S T23)

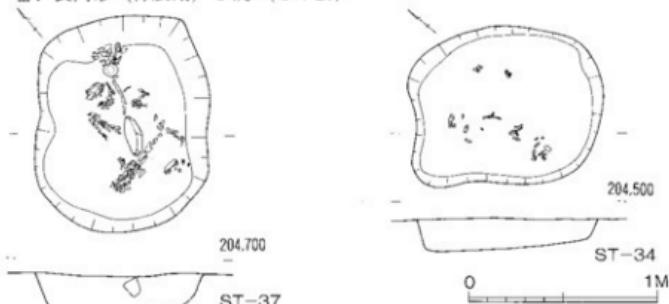


fig. 118 火葬墓址平面図(1)(単位はm)

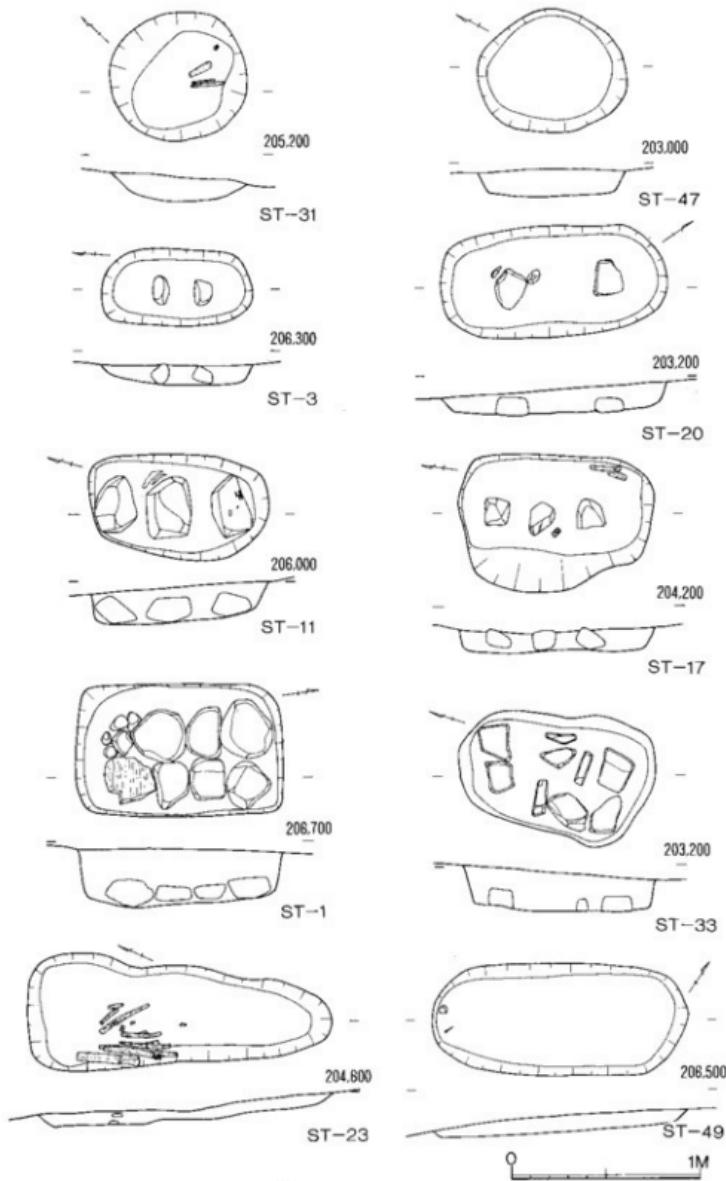


fig. 119 火葬墓址平面図（2）(単位はm)

長方形の形態をもつものの大きさは、 $1.1 \times 0.75\text{m}$ 前後の規格性が認められる。検出墓址の中には、径20cm大の石を墓標石として使用したものも含まれる。

**出土遺物** 出土遺物には、人骨片・珠・土師器皿・鉄釘・古銭がある。人骨片の出土量は墓址により異なり、少量のみのものとおよそ一体分出土するものに大別されるが、この事実から火葬のみを行った火葬址と、火葬したのち埋葬した墓址に分類することが可能である。出土古銭には至道元宝（北宋銭・995年初鑄）洪武通宝（明銭・1368年初鑄）が含まれる。

出土古銭や土師器片の形態から、これら火葬墓址群の造営年代は、14~15世紀と考えられる。

**3.まとめ** 第46・47地点は同じような立地条件・時代・墓址形態を備えている。両地点は近接しているが別々の墓域を選定している。相方の造営主たちの生活の場は塩田盆地内にあったと考えられるが、このように別々の地に彼らの墓域を選んだ理由は、血縁集団が異なる事を示していると思われる。

(註)「昭和57年度神戸市文化財年報」(昭和59年3月、神戸市教育委員会)において「3種類8形態」に分類したが、「長方形(座棺用)棺台石1個」形態の一石は、棺台石ではなく墓標石であった。そのため、「棺台石1個」3例は「棺台石ナシ」類に含まれる。

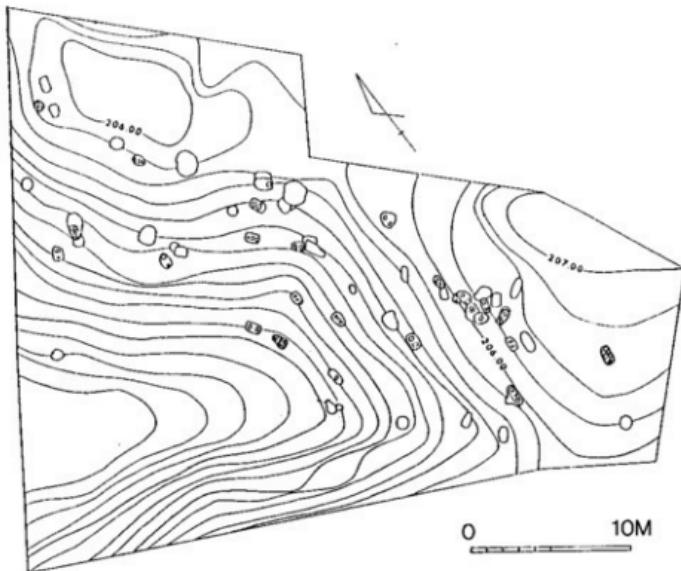


fig. 120 第47地点遺跡遺構全図

## 鹿の子遺跡

1. 調査経過 鹿の子遺跡は、有野川の支流長尾川の南岸、南北に細長く展開する支谷（通称鹿の子谷）に位置している。昭和56年秋、北神ニュータウン第1地区造成工事に伴って鹿の子谷が、調整池として選定されたため、試掘調査を実施した結果、遺物包含層・遺構を発見し、須恵器片を採集した。

昭和57年7月、試掘調査結果から、遺物散布の濃厚な中国自動車道より南側の地域について本格的な調査を実施した。

2. 調査概要 調査地は鹿の子川の左岸で、比較的広い河岸段丘上に立地する。調査面積は東西54m、南北46mの約2500m<sup>2</sup>である。調査地は自然地形にともない西から東に傾斜している。トレンチの西部高位では、床土下に遺物を含む遺物包含層がみられる。黄褐色粘質土は、往時の開墾によって削平され、段状になって西から東へ傾斜している。

検出遺構は、比較的削平を蒙っていないトレンチ西部で掘立柱建物1棟、土塙、トレンチ東端では柱穴群、中央部では西から東北方向に流れる溝2条と土塙墓1基を検出した。



fig. 121 鹿の子遺跡位置図

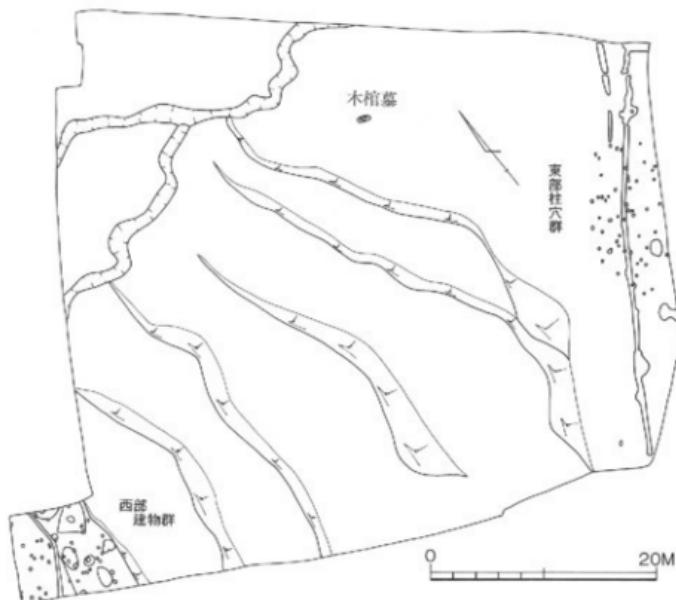


fig. 122 遺構配置図

**掘立柱建物** 北 $16^{\circ}$ 西に棟方向をおく梁間1間桁行3間以上南北棟建物である。柱間寸法は桁行で2.6m等間、梁間西側では3.0m、東側で2.6mで東柱が東にやや偏している。東柱の掘方は直径60cm～45cmの円形で、桁柱の掘方の直径30cmより大きい。東側の桁柱は南へ約60cmに柱掘方を設け、1回建てかえられたと推定される。

**土 坡** 掘立柱建物検出面のはば中央で検出した楕円形の土坡は、長径2.3m、短径1.4m、深さ5cmの浅い舟底状を呈する。土坡内からは、須恵器壊・塊・皿・土師器片が出土している。

**東部柱穴群** 32ヶ所の柱穴を確認したが、建物としてまとまるものはない。柱穴の掘方の直径は20cm～40cmで、深さは30cm以上を測るものもある。

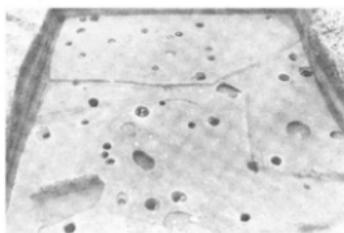
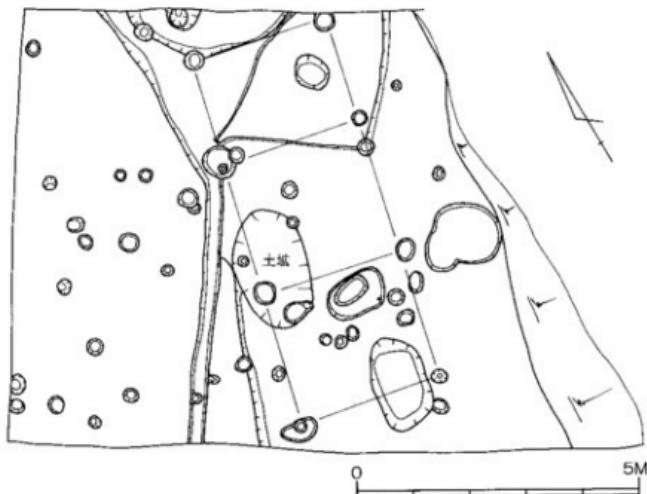


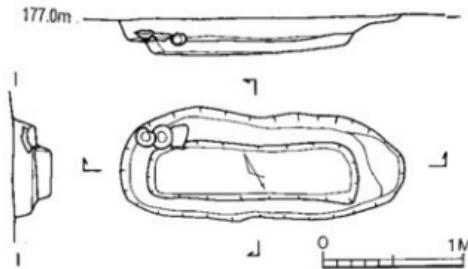
fig. 123 掘立柱建物検出状況

fig. 124  
西部建物  
実測図



**木棺墓** 木棺墓は河岸段丘の中央斜面で、調査地の北よりに位置する。長楕円形の掘方に、長方形の木棺を埋置する。掘方は長径5.0m、短径1.8m、深さ0.3mを測り、高位の北側は肩くずれがみられる。棺は掘方のやや南よりに埋置される。棺の長さ3.2m、棺幅1.0m、深さ12cm、棺底はわずかに東から西に傾斜し、棺の長軸は、N 59° Wにとっている。掘方西北隅に壺・壇・頸部を欠損した長頸瓶を埋置している。

fig. 125  
木棺墓実測図



溝 調査地の西北部で東南流する溝を検出した。幅1.1m～1.2m、深さ45cmの断面V字形の溝で、埋土内より須恵器坏身1点が出土した。

### 3. 出土遺物

**本格墓 内** 長頸瓶の胴部(1)は故意に頸部を打ち欠かれており、供獻土器と考えられる。肩部は少し張り、底部には外方に張り出す台形高台を付ける。壙(2・3)の体部はやや内弯気味に立ち上がり、口縁部で弱く外反する。高台側面はナデ調整を施している。

**西部土塙内** 坑(4・5)の底部はヘラ起しされ未調整である。体部はやや内弯気味に立ち上がり、口縁部は弱く外反する。坑(6)の底部には外方へ張り出す台形高台が付く。体部は斜め外方に直線的に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。皿(7)の口縁部は鋭く外反している。

**溝 内** 坑(8)は、4・5に比べ底径が少さい。体部は斜め外方へ直線的に立ち上がり、弱く外反する口縁部が付く。

**4.まとめ** 今回の鹿の子遺跡における調査で、中世掘立柱建物と土塙墓を確認した。掘立柱建物廃棄直後の埋没と考えられる土塙出土須恵器は、土塙墓供獻須恵器より古い様相を呈している。当地は集落として用いられた後、集落が移動、墓域として選地されたものと推定される。その年代は9世紀末葉～10世紀後葉と考えられる。

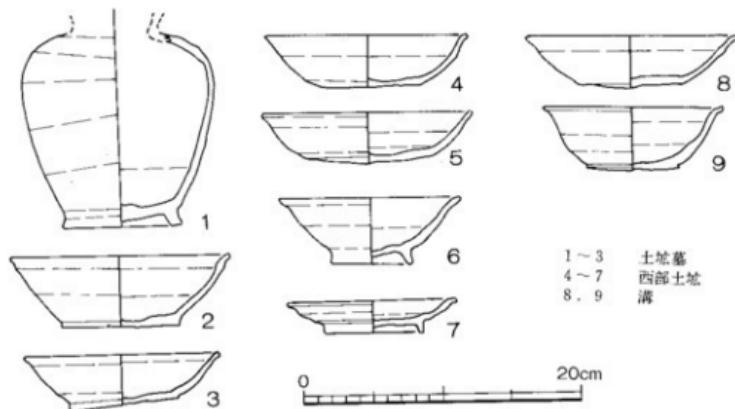


fig. 126 出土遺物実測図

## 21. オキダ2号墳

- 1. 調査経過** オキダ古墳群は有野川右岸の河岸段丘上に立地している。オキダ1号墳は段丘端に墳丘を有し、墳丘中央には地神が祀られている。1号墳の南の畠地にはオキダ遺跡（古墳時代後期・中世遺物散布地）が存在している。このオキダ1号墳の北側の水田が日下部地区土地改良事業区域内となり、墳丘裾に支線道路が設けられる計画となっていた。このため、オキダ1号墳に接する東側にトレンチを設定して調査を行った。
- 2. 調査概要** 調査地の層序は、耕作土、床土、中世遺物包含層、地山となり、黄褐色粘質土の地山面で中世土塙5基と石材の抜きとられた横穴式石室と古墳時代の溝を検出した。

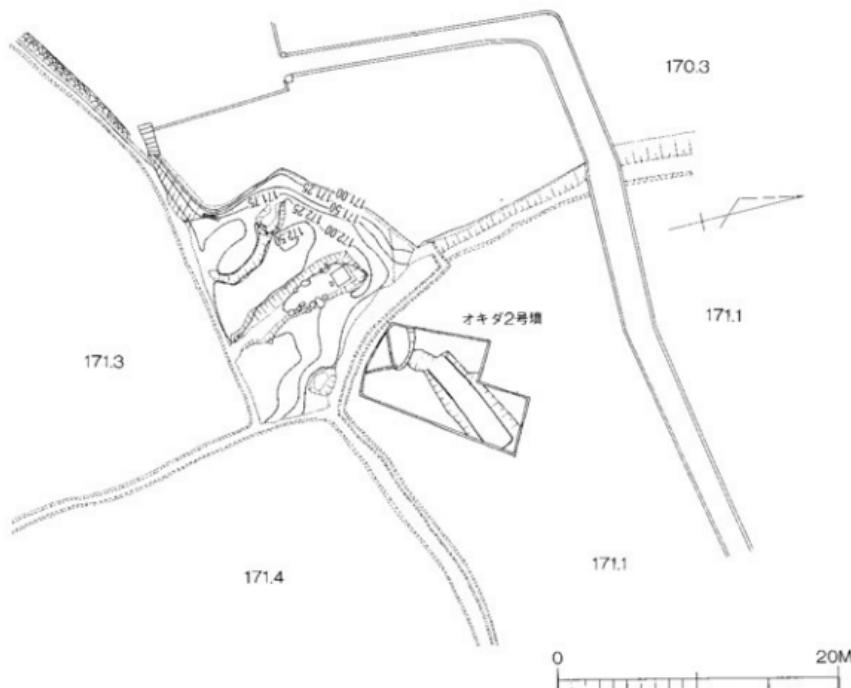


fig. 127 地形測量図

溝 調査地南西部でやや弧状を呈する溝を長さ3mにわたって検出した。幅1.8m深さ40cmを測る。埋土上層より須恵器高环、また溝肩より須恵器环身が出士している。

横穴式石室 調査地北東部から中央部にかけて床面のみ残存する横穴式石室を検出した。

掘方は長軸10m以上、短軸3.5m、形態は無袖状を呈する。石室は、側壁が破碎されたり抜き取られて原位置を保つものはないが、奥壁は中央の1石が原位置を保っていた。玄室床面は上面に5cm大の栗石、径20cm大の偏平な河原石を敷きつめる。

床面での遺物の出土状況は奥壁隅で須恵器环身・台付長頸壺・鉄鎌・鉄釘・刀子片・ミニチュア土器、左側壁に沿って直刀3振・刀子・鎌・鉄鎌・馬具、床面中央では、須恵器环蓋・土師器高环・人骨細片・金環が出土している。

羨道部は石材の据え付け痕跡が6ヶ所確認され、羨道部幅は玄門で1m、羨門で80cmを測る。羨門部で無蓋高环・菱形土器が破碎されて出土した。

以上の調査の結果、石室の規模は主軸全長8m、玄室長5.4m、幅1.8mを測る無袖の横穴式石室と考えられる(註)。今回発見された古墳を、今後オキダ2号墳と呼ぶことにする。



fig. 128 溝内遺物出土状況



fig. 129  
横穴式石室  
検出状況  
(西から)

3.まとめ 発掘調査と並行してオキダ1号墳の現状の測量調査を行った結果、規模15m前後の円墳ないし方墳であり、トレンチ調査で検出したオキダ2号墳とほぼ墳丘を接して築かれたと考えられる。また、オキダ2号墳開口部端で検出した溝は、1号墳の墳丘裾となるものか、2号墳に付属するものか不明である。

横穴式石室の使用時期は、長脚二段無蓋高環の時期（6世紀中葉）から奥壁中央出土の有蓋台付長頸壺の蓋の時期（7世紀初頭）までの時期と考えられる。その間、床面の敷石は1度以上改修されたものと考えられる。

なお、現地は農政当局の協力により、埋め立てて現状保存されることになり、床面下層の精査、墳丘規模の確認は行わなかった。

（註） オキダ2号墳は側壁石が残存していなかったため、その石室形態を判断するのが困難であった。そのため「昭和57年度神戸市文化財年報」（昭和59年3月、神戸市教育委員会）において「右片袖式」としたが、その後の検討によって「無袖式」である可能性が強くなつたため、訂正する。

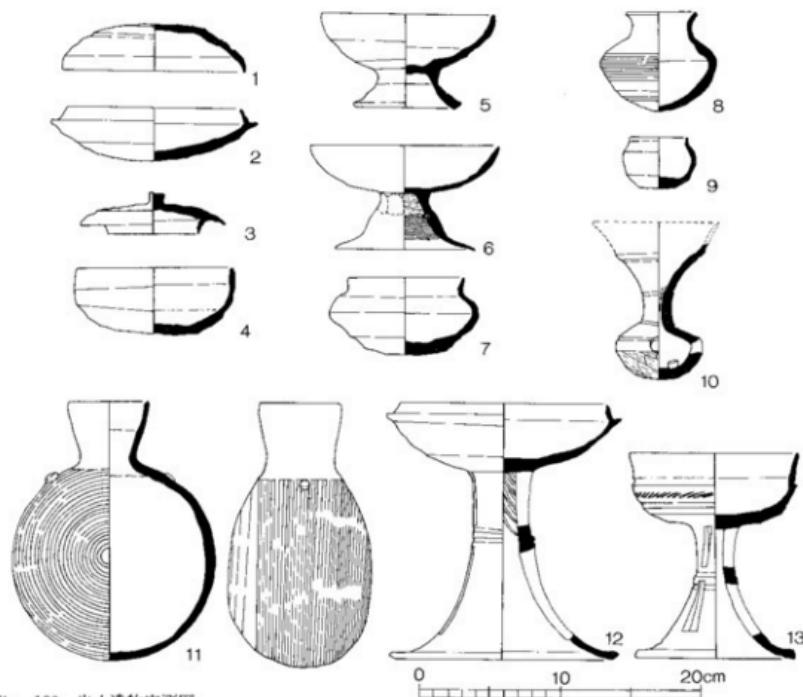


fig. 130 出土遺物実測図

## 22. 塩田遺跡

### 1. 環境

神戸市北区道場町塩田は、六甲山系から北へ流れる有馬川・有野川・八多川と東へ流れる長尾川が合流する地点の東南に位置する。

当地域は、地形的には、この四河川が、形成した東西約1.8km、南北約2kmの盆地である。

周辺遺跡には、東方の鶴鳴山中腹の磨製石剣出土地、その南麓には中野古墳群が知られている。

また武庫川と有野川の合流点の南側には、有棚石室を内部主体とする古墳を含む古墳群が、北側には、下田中古墳群・自強遺跡が存在している。

また西方には、現在調査中の北神N.T.内遺跡が存在する。

さらに塩田地区の圃場には、条里遺構が現存し、西南方向の山上山麓に平田古墳群が、また、かつては塩田火葬墓群が存在した。

### 2. 調査方法

調査は、前年度の分布調査及び試掘調査の結果に基づき、トレーニングを3か所設定して実施した。また57年度未調査地には、4か所の試掘場を設定した。

### 3. 調査概要 1トレーニング (3m × 20m)

基本的な層序は、耕土・床土・盛土（付近の山土を盛土したものであろう）で、その下層に薄い中世遺物包含層が堆積している。近世の遺構はこの層を切っており、この包含層を取り除くと中世の遺構面があらわれる。

近世の遺構は、井戸状遺構（SE01～04）4基と、水路跡と思われる幅3m、深さ0.3mの溝（SD01）1条が検出された。また性格は不明であるが、土壙（SK01、02）も検出された。

SE01～04では、遺物の出土はなかった。SD01・SK01・02の埋土内には、近世陶磁器が数点出土した。

中世の遺構は、10数か所のピットが検出された。しかし建物としてはまとまらなかった。

遺物包含層が薄かったため、遺物の出土量は少量であった。他にこの層中より弥生時代中期の壺の口縁部1点が出土した。

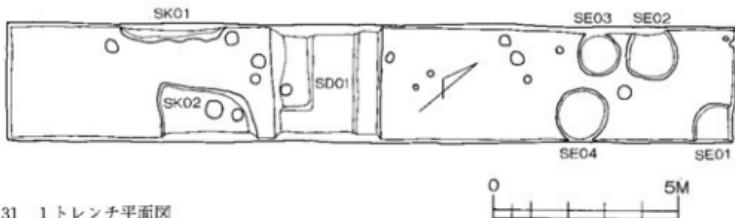


fig. 131 1トレーニング平面図

fig. 132 1 トレンチ全景  
(東から)



### 2 トレンチ (3m × 20m)

基本的な層序は、1 トレンチとほぼ同様であり、また中世遺物包含層も薄かった。2 トレンチでも1 トレンチと同様に近世～近代にかけての遺構が検出された。

**近世遺構** 井戸若しくは水溜めと考えられる、SE04・SK03が検出され、図示しなかつたがSD01内にも計3基の井戸状遺構が検出された。

**中世遺構** 中世の遺構は、土塙 (SK01-N・S・E) とトレンチ南端で検出されたピット群である。

土塙 (SK01-E) の南壁には石組があり、水溜め若しくは馬の足洗場の可能性がある。他のSK01-S・Nも水溜めと思われる。

ピット群は建物等としてまとまらず、性格は不明である。

さらに当初まったく予想されなかった、弥生時代の遺構が検出された。

SD01は、幅5m、深さ1mの北流する溝である。またSD04、05は、SD01が埋まった後に形成されたものである。(幅0.5m、深さ0.2m)。SD04、05埋土内からは、弥生時代中期の壺、甕片が出土した。SD01内からは、弥生式土器の細片が少量、北東辺で石庵丁1点が出土した。SD01の断面形は、台形をなし、溝の両肩は、直線的になっている。

### 3 トレンチ (3m × 5m)

当初3m × 15m程度のトレンチを設定し、調査を行う予定であった。しかし鍬入れ後、耕土直下地山であり、遺物包含層が確認できなかった。このためトレンチを3m × 5mに縮少して調査を行った。遺構・遺物は、検出されなかった。

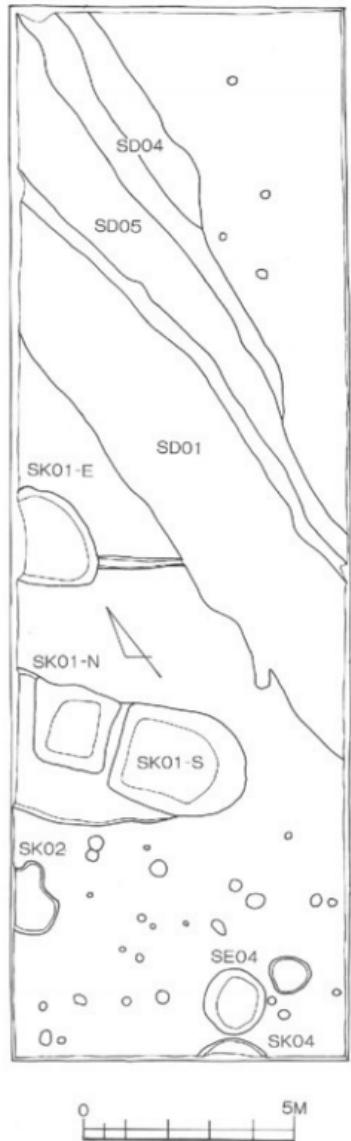


fig. 133 2トレンチ平面図



fig. 134 SE04漆器出土状況



fig. 135 SD05遺物出土状況

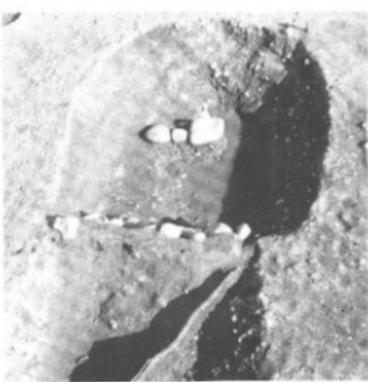


fig. 136 SK01-S, SK01-N

fig. 137 2トレンチSD01  
(西から)



fig. 138 2トレンチSD04  
SD05



4.まとめ 調査当初、中世遺構の存在を期待させたが、中世遺物包含層が薄く、また遺構も稀薄であった。しかし地形的にみても背後に山が存在し、高所に位置するこの山裾周辺は、居館をかまえるには適当な環境である。そのためこの周辺には、中世の遺構の存在を予想させる。

上記のように中世遺構の存在は稀薄であったが、この地点で弥生時代中期の遺構・遺物が発見されたことは、塩田地区では初見のことである。

北神N. T. 内遺跡でも同時期の遺跡が発見されており、塩田地区との関連性や、武庫川流域のこの時期の遺跡との関連性などを考察するうえできわめて重要な資料を提示している。

## 昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報

昭和60年3月25日 印刷  
昭和60年3月31日 発行

発 行 神 戸 市 教 育 委 員 会  
神戸市中央区加納町6丁目5番1号  
印 刷 株 式 会 社 奥 正 社  
神戸市中央区中山手通6丁目8番1号

広報印刷物登録・昭和59年 第223号A-6類